日蔭者の生き方。

Holzbein

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日蔭者の生き方。

【Ｎコード】
Ｎ９９２６Ｑ

【作者名】
Ｈｏｌｚｂｅｉｎ

【あらすじ】
ネギ・スプリングフィールドの双子の弟という立場に転生した彼は、ネギが原作通りに成長することを望み、陰から見守ろうと決意した。これは原作ブレイクを望まなかった、日蔭者の物語。

※魔法先生ネギま！の二次創作。コンセプトは中途半端な能力持ちの、原作乖離に対する葛藤等。そのため主要な原作キャラとは現在のところあまり深く関わっておりません。原作設定は既刊３４巻ま

での物を利用。以降もなるたけ取り入れる予定です。シリアス？

一話短め（平均５０００文字程度）不定期亀更新。

８／１０プロローグ前書に注意事項等追加。十四話までを多少修正。

プロローグ（前書き）

前書きのある小説はくだらんとどこぞの文学者さんはおっしゃっていますが、嗜好の合わないものに付き合わせてしまうのも申し訳ないため、このようなスペースを取らせていただく次第です。所謂地雷避けってやつですね。「転生オリ主原作知識有り」という時点であれな感じですけど。

○全体の方向性
・本筋に大きく関わるオリキャラは主人公のみ（予定）。
・シリアス風味。
・俺Ｔｕｅｅｅ・ＫＡＫＵＳＥＩ・ハーレム・ヘイト・劣化はほぼ無し。
・アンチの場合はなるべく根拠を提示。
・アンチ・ヘイトっぽい描写もあるが、その場面における主視点の人物が抱いている印象が大抵。
・ＯＲＩＳＨＵ・ＳＥＫＫＹＯＵ・ＯＨＡＮＡＳＨＩ・蹂躙・魔改造は無し。
・厨二病分は多分に有り。
・バトル要素は薄味。
・クロスはほぼ無し。メタなネタは小さじ一杯程度。

○ストーリー
・基本的に原作沿い。所謂物語保存目的型。
・ネギパーティーの裏や端っこでちまちま行動が基本。
・大枠としては学園祭で終了予定。

○設定
・原作の解釈や設定の補完・捏造は有り。（各話後書きにてある程

度補足）
・しばしば利用される二次設定（学園結界、夜の襲撃、長谷川千雨の特性等）は多少用いる。
・原作における脇役はそこそこ優遇。
・エヴァタソハァハァ、忠犬茶々丸、狂犬刹那、デレ真名等、極度のキャラ崩壊は避ける。
・でも葛葉刀子（笑）とか脇役をいじったりはする（原作設定は優先）

○資料
・最新話投稿時に流通している最新巻まで。（単行本派のため）
・ｗｉｋｉや研究・考察サイト、某討論スレ等のネット資料。
・その他雑多な本。

○その他注意
・ケータイの場合、一部傍点が（・）となっています。パソコンによる閲覧時（特にｃｈｒｏｍｅの場合）の見栄えに合わせているためご了承ください。
・更新、展開共に遅めです。

以上のような雰囲気です。これ違うんでねーのというところがございましたら御指摘ください。

蛇足として、このような作品を目指しておりますが、私はアンチもヘイトも原作重視も蹂躙も魔改造も俺Ｔｕｅｅｅも主人公なり代わりもクロスもハーレムも純愛もＳＥＫＫＹＯＵも原作破壊も断罪もパラレルもダークもネタも、わりかし楽しめる人間なので否定する意図はありませんよ、とだけ付け加えておきます。ＥＶＡで鍛えｒ（ｒｙ

プロローグ

イギリスはウェールズの山中にあるメルディアナ魔法学校。魔法使いの卵が通うその学校では、立派な魔法使い（マギステル・マギ）を志す子供たちが闊達に日々を過ごしている。勉学に励む者、魔法に、あるいは魔法で戯れる者、様々であるが、その傍らには総じて友人と言える存在があった――極少数を除いて。

魔法学校の一室、とある教室の片隅で、一人の少年が本を読んでいた。そしてそれは異常であった。休憩時間ではなく授業中に読んでいるから？　それが教科書ではなく、封印指定の魔本だから？　しかし最大の異常は、誰も少年の読書について何も指摘しない、ということである。教師も生徒も、少年のことなど最初から存在しないかのように振舞っていた。そして少年はその事実を甘受し、あまつさえ自ら望んでもいた。

その少年の名は、テトラ・スプリングフィールド。

彼は、転生者であった。

転生者の行動は幾つかのタイプに分けられる。原作干渉型、非干渉型、中立型（原作知識の無い者もここに含まれるだろう）の大別して三種類である。少年ことテトラの立場は、徹底した非干渉型である。これは転生前の人生の影響もあったが、その徹底を可能としたのは転生特典、俗に言われるギフトによるものであった。とはいえギフトについては、彼自身は転生時のことを覚えていないため、彼の推測にすぎないのだが。

世界5分前仮説、というものがある。過去が存在することに対する肯定の否定を骨子とするそれは、そのまま彼自身にもあてはまるのだ。彼のそれは真実転生前の記憶かもしれないし、植えつけられた、あるいは脳が勝手に創りだした妄想かもしれない。更にはその特異な能力も、既存能力の異常発展かもしれないし、そうでないかもしれない。

けれど彼はネギ・スプリングフィールドと同年齢に生まれたこの転生を真実だと考えたし、この世界もおそらくネギま！の世界なのだとみなしている。それゆえ、今のところは原作に介入しないようにしているのだ。

さて、そんな彼の行動は、極めて限られている。一日の授業が終われば、図書館に行くか、学校周辺の店に買出しに行くか、寮の自室に引き篭もるかの三択である。図書館に行けばネギ・スプリングフィールドにさえ黙認されていない禁書コーナーに引き篭もり、店に行けば魔法薬の材料を物色し、自室に戻れば、体を休めたり、物にあふれた別荘に引き篭もる。その隣に、誰も立つことはない。

日が傾き始めたころ、今日も彼は普段通り古びた寮の自室に戻っていた。ベッドに倒れこむと、彼は部屋の片隅にある鏡に目をやり、ああ、そんな時期でしたねと呟いた。鏡には雑然とした部屋が薄く映し出されていたが、寝ころんだまま何事か唱えると、そこには殺風景な部屋が見えるだけだった。その様子に思わず嘆息する。

「Ｌｉｅｓ　ｉｎ　ｔｈｅ　Ｍｉｒｒｏｒ――世界は嘘でできている、ね」

仰向けになり、天井を眺めながらそんな言葉を呟いた。

第一話

メルディアナ魔法学校の校長室で、長いひげをたくわえた白髪の老人が指で机を叩き、とんとんと音を立てていた。老人――メルディアナ魔法学校校長――は一つの案件を抱えている。

手元の資料には、瞳の色以外はアリカに似た、金髪ポニーテールでややツリ目がちな、無表情ではあるものの凛々しい少年の写真が貼られている。視線を資料に落とすと、もう少しで五年もの月日が流れるのかと彼は感慨深く頷いた。兄のネギ・スプリングフィールドと共に、三歳で魔法学校入学、更には飛び級を繰り返してきたのだ。校長という立場からだけでなく、彼らの祖父として目をかけてきた彼にとって、来年度、彼らが卒業するという出来事にはどうにも琴線に触れるものがあった。テトラの資料を見直した彼は、一つため息をつく。

感傷だけで済むのならばよかったのだが、実際はそうではない。問題は、来年度卒業見込みのテトラ・スプリングフィールドの扱いをどうするか、である。

卒業は、まあさせてもいいだろう。資料から読み取れるテトラの成績ならば、兄、ネギ・スプリングフィールドに座学、実技、魔力量等あらゆる面で数段劣るものの十分である。しかしこの情報だけでは問題の解決にはならない。英雄の息子の一人として、テトラには修業先の選定も必要なのだ。候補は大きく二つ。魔法世界のアリアドネーと旧世界の麻帆良学園である。最終的には個人的な友誼を交わしている近衛近右衛門の膝元である麻帆良に兄弟で送ることになるのだろうが、だからこそ人物評価は正確にしておきたかった。麻帆良での『魔法使いとしての』修行の方針を決定する資料は送ら

ねばならないのだ。

ところが、である。人物評価の、成績ではない部分、その人格については首をかしげざるを得ないのだ。テトラがどういった人間かを把握している者がおらず、誰に尋ねても、存在感が無い、という旨の評価しか返ってこない。実際、彼自身もまたそのような印象をテトラに抱いている。

（ネカネは良い子よと言っておったが……）

故に何かおかしいと彼は感じずにはいられないのだ。魔法使いとして指折りの力量を持つ彼が目をかけているというのに一般教員と同程度の情報しか得られない。さらに資料や記録を辿ると、テトラは休暇の度にふらりとどこかへ雲隠れしているようであった。そしてそのことは、校長自身を含め、誰も気にとめていないようなのである。テトラに直接尋ねようと思っても、ついつい聞きそびれてしまう。休暇中、雲隠れしたという事実はあれど、なぜかそれを重要視できなくなってしまっているのだ。

これは何かあるはずだ。何かあるのだろう、おそらく、きっと、たぶん、ｍａｙｂｅ……。疑心はさらなる疑心を呼ぶが、やはりどこか他人事のように遠く感じられた。自然、表情は固くなる。公人としての自分と私人としての自分が溶けていくような感覚が纏わりついていた。疑心を抱く一方で、けれどどこか大丈夫だろうと楽観視してもいる。何しろテトラはあの大馬鹿者の息子なのだ。

よせていた眉間のしわを指でほぐし、かの英雄の姿を思い浮かべた。彼岸の大戦終結に多大な貢献を果たした、テトラの父親。馬鹿がつく程の魔力に、単細胞。くっくと笑いがこみ上げてくる。

「あのナギの息子じゃしのう」

なんでもありえそうじゃの、と愉快気に漏らさずにはいられないのであった。

※

「どうしたものでしょう」

テトラは自室で独り、ベッドに寝っ転がりながら悶々と悩んでいた。現在は夏季の休暇期間。二ヶ月ほどの暇が出来ており、大抵の生徒はここぞとばかりに遊び倒しているのだが、彼は自室に引きこもって頭を抱える日々を過ごしていた。

（来年からは確実に足がつくんですよね）

彼がネギ・スプリングフィールドの双子の弟という立場に転生したと認識してから、もう数年が経つ。その間彼は幾つかのことを行い、あるいは現在進行形で行っている。

その中で大きなものは四つ。孤児院への寄付金・石化治療研究・魔法世界の遺跡盗掘・ネット上での魔法具屋運営である。

孤児院については、戦場の空気を味わうため、という不純ではあるが将来的に必要な行動の途中で拾った子供を収容してくれていることへの恩義である。

石化治療については、ネギが回復魔法に不得意であることを鑑み

て、治らなかった場合を考えてのことである。
遺跡盗掘については石化の治療法を求めて行ってきた。この際、別荘等の貴重な魔法具を入手してきた。
魔法具屋運営については、自作のポーション等を売ることで活動費用を捻出するためである。

「なんにせよ、麻帆良では監視が厳しくなりそうですし」

テトラが気にかけているのは所謂金の流れである。麻帆良は科学が異常発達しているため、さすがに誤魔化すのが難しいのだ。はっきり言って、魔法的な監視は意に介していない。テトラは、少なくとも魔法に関しては高度な隠ぺいの術(すべ)を持っているからだ。

「せっかく、色々と誤魔化せているというのに……」

うぅ、と唸りながら考える。

「孤児院への寄付は、数年分前払いか。石化治療研究は監視の無効化という条件付き可。盗掘は不可。魔法具屋も止めておくべき、かぁ。いや、いっそ電子精霊でも作ってみましょうか？　でも技術が足りないでしょうし。百年未来の技術に勝てるわけないですし、ああもう超ってリアルチート過ぎますよ」

理不尽です、と嘆息してテトラは思考を一旦放棄した。纏めていた髪をばらりと流し、ふるふると首を振る。情報が足りず、考えても仕方ないものは行き当たりばったりが信条なのだ。

（情報で思い出しましたが、やはりこの世界は原作通りのようです。少なくとも紅き翼のメンバーには変化がありませんでしたし、歴史年表も覚えている限りでは一致しました。イレギュラー、無いとい

いなぁ）

原作介入云々について、彼の意志はとことん決定している。徹底非介入、これである。この件について彼はただこう言葉を紡ぐだけである。

「ぶっちゃけ認識されなければどうということはありませんし」

（ああ、でもやっぱり不安です）

彼の悩みは尽きそうにない。

第二話

「魔法の射手（サギタ・マギカ）　戒めの風矢（アエール・カプトウーラエ）！！」

今、魔法学校の修練場では赤毛の少年――ネギ・スプリングフィールド――が魔法の練習を行っていた。壮年の教師が傍らでそれを監督し、彼以外の生徒は遠巻きに彼の様子を伺っている。期待や羨み、その視線に宿るのは様々であるが、唯一、テトラ・スプリングフィールドのみは木の根元に腰をおろし、気だるげに空を見上げていた。

（眩しいです）

悩み続けた夏季休暇も終わって、新学期が始まり、すでに中ごろとなっていた。結局、麻帆良行きについての問題に関しては臨機応変（いきあたりばったり）に行動することも視野に入れることに決めたが、ともあれ現在は魔法実技の授業である。

（あんなにもまっすぐに生きていられるのは、性根なんでしょう、きっと）

ちら、とネギを見やると、嫉妬にも似た羨望が湧きあがるのをテトラは感じた。自分にはとてもではないができそうにない。歪みつつも目標に直進し続けるネギの生きざまは好ましく、羨ましい。美しくさえあるように思える。現状では空回りしていそうに思われたが。

「魔法の射手（サギタ・マギカ）　戒めの風矢（アエール・カプトウーラエ）！！」

ネギが再び呪文を唱えると、不可視の魔法が標的を束縛する。しかしその魔法はまだまだ構成が甘く、ネギの大魔力によるごり押しで発現しているようだ。基礎魔法の天才ではなかったっけ。ああでも、魔力制御自体は魔法ではないから関係ないのか。いやしかし……。

「――ラ・スプリングフィールド！　テトラ・スプリングフィールド！」

そんな益体の無いことをテトラが考えていると、彼の番が来たようだ。衣服に付いた土ぼこりを払いながら腰を上げる。億劫そうに歩みを進め、教師の下に辿りつく。教師の視線には、普段のテトラに対するそれとは異なり、期待が混じっていた。

（これだから実技はいやなんですよ……。嘘から出たまことの負担も大きくなりますし、さっさと終わらせましょう）

「――――魔法の射手（サギタ・マギカ）　戒めの風矢（アエール・カプトゥーラエ）」

別に叫ぶ必要もないのでぼそりと呪文を唱え、術式をネギのそれよりやや杜撰なものにし、使用魔力もネギより少なめにする。自然、発動はするものの、ネギよりも数段劣った戒めの矢が放たれた。数瞬して標的に鋭い風が穿たれ、束縛される。教師はそれを一瞥すると、興味を失ったかのように次の生徒を呼んだ。

「まあ、よし。次――」

テトラは嘆息しながらその場を離れ、先程の木に背を預けた。ぼんやりと修練場を眺める。

（やっぱり実技は面倒です）

テトラは授業が嫌いである。それは独学の方が技能の習熟に時間がかからない、ということもあるが、一番の理由は他者との接点が増える――ひいては原作というシナリオに影響を与える可能性が増大するからだ。とりわけ実技は嫌いだ。座学は本を読んでいればいいが、実技は違う。

「嘘から出たまこと（ライズインザミラー）――世界は嘘でできている、ね」

テトラの生来の異能、それが嘘から出たまこと（ライズインザミラー）である。『認識の否定』がその能力の骨子。主観を介した認識（それ故、魔法による認識、探査やそれを利用する魔法的トラップを含める）を否定する（この能力の延長上に認識阻害あるいは操作の魔法が異常発展している）。

「私はここにいる／いない」

ここにいるけどいない。優秀だが普通。好き・嫌い／無関心。気にかけている／いない。ｅｔｃ．

一見便利ではあるが、幾つかの制約がある。否定する認識、人間に応じて使用魔力が増減すること、自らがそれを認識していなければならないこと、常に魔力を使用する必要があることなどがあるが、一番は能力の使用中に、攻撃的な魔法を発動させると――より正鵠を射るならば、他者を害せんとする意思がわずかでも生じると――使用魔力が大幅に増大することだ。

（要は奇襲が出来ないということなんですけど、現状では実技における魔法行使の瞬間、認識される、ということがネックなんですよ

ね）

ま、そもそも奇襲が必要な事態にならないといいのですが、と結論付けるテトラ。はるか上空には陽が昇っていた。柔かな日差しの下、穏やかな時間が流れる。そんな中、テトラがネギの姿を何とはなしに追っていると、つと、視界の端にツインテールの少女が映った。柔かな赤髪に紺のローブとは対照的に、活発な印象を持つ少女である。

「アンナ・ユーリエウナ・ココロウァ。アーニャですか」

アーニャがネギの下に走り寄り、嬉しそうに二三話しかけると、ネギもまた顔を綻ばせた。何事かと思い、集音の魔法を使って耳をそばだてると、テトラは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「――今度、ご飯食べに行くんだから！」

アーニャが元気に、そう宣言していた。

その日の夕方、寮の自室を片づけながら、テトラはネカネ・スプリングフィールドについて考えていた。

テトラ・スプリングフィールドはネカネ・スプリングフィールドに複雑な感情を抱いている。その一つは、ネカネ・スプリングフィールドは全く異常である、という感想だ。ネカネにはどういうわけか、認識操作の効き目が薄いのだ。認識操作が作用しにくい者は他にもいるが、それはネギのように魔力が多い、即ち抗魔力が高い者たちだ。ネカネはネギよりも魔力が少ない。にもかかわらずネカネ

はテトラをある程度認識し、更には世話を焼こうとしてくる。テトラの望むところではない。この点で、煩わしいとも言えるだろう。しかし、テトラはそのように思わない。申し訳ない、とさえ感じている。

（私がここにいるから……）

ネカネについて考えると最後には必ずそう思ってしまう。故にネカネ・スプリングフィールドと顔を合わせるということは特別な意味合いを持っている。切なくも冷たい、憎悪にも似た悔恨、疑心に満ちた自戒の念、様々な思いが胸に去来する。たった今、彼女のことを僅かに考えるだけでこんなにも苦しい思いがするというのに、彼はネカネがやってくるのを待っていた。

部屋の片づけもひと通り終えたころ、コンコン、とドアがノックされた。

「どうぞ」

テトラの言葉に、失礼するわねと応じて部屋に入ってきたネカネに、丸椅子をすすめる。ネカネはテトラにとって馴染みの笑みを浮かべていた。どこか読み取れない表情だった。沈黙の帳が落ち、いたたまれなくなったテトラは、ネカネから顔を背ける。何を、どんな顔で話せばいいのかわからないのだ。

（……アリカ姫の片目と同じ蒼眼に、私と同じ長いブロンド、か。オスティア王家の系譜に連なっていたりするのかもしれませんね）

あり得ないか、と自嘲する。何しろここは漫画が元の世界なのだ。蒼眼なんてけして珍しくはない。

互いに口を開かず、室内に時計の秒針の音が響く。カチッカチッカチッ……。それに言いようもない焦燥感をテトラは抱いたが、何も話すことはできない。そんな折、沈黙を破ったのはやはりネカネであった。

「ね、今度、ネギやアーニャと一緒にご飯食べない？」

テトラは顔を背けたまま首を横に振った。――だめだ、だめだ、だめなのだ。私はここにいる／いない。私は、私は、私は――。

「そう言わずに、ね」

にこりと微笑むネカネ。その笑顔はテトラにとって万難よりも辛く、苦しい。その蒼眼には醜い自分の姿が映し出されている気がして、どうしようもなかった。自分の姿が心が有様が。――ああ、あなたは、貴女はどうして――。

「……どうして、笑っていられるのですか。あんな、あんなことがあったというのに、貴女はなんて、なんて――」

※

「――なんて優しい／優しくない、か」

古びた木造の寮。沈みかけた夕陽の光がわずかに差し込む、薄暗

い板張りの廊下をネカネは重たそうに歩を進めていた。眼は伏せられて表情は暗く、暗欝とした雰囲気を醸し出している。

「あんなこと、か」

ネカネ・スプリングフィールドは、もちろんあの日のことを覚えている。覚えてはいるが仕方がなかったのだと割り切ってもいる。だってネカネにとって、テトラもネギと同じ、大事な弟なのだ。そんなことよりも、もっと大切なことがあると知っているのだ。――危うい。大切な弟は、常にどこか危ういのだ。それが決定的になったのはあの日以降だけれど、それ以前から彼は危うかった。彼は常に自分の存在を否定したがっている。故に誰からも無視されているような現状を甘受している。少なくともネカネにはそう感じられた。

良くない傾向だ、とネカネは思う。彼が何かを隠しているのは分かっている。彼の言葉が、時折二重に聞こえるのはそれのせいだろう。――ああ、まったく良くない傾向だ。

「誰に相談しても、わかってくれないし」

何より自分自身でもよくわかっていないのだ。弟が何者であるか。一体どうすべきか。一緒に居られるのはもう一年も無いだろう。来年度の末、あるいは卒業と同時に彼らは巣立つことになる。打つ手は見つからない。というより、自分は何をしても彼を傷つけるだけなのかもしれない。最初から、手など届いていないのかもしれない。

自然、ため息が漏れる。

歪んでいるな、とネカネは自嘲せずにはいられない。家族を失ったあの夜が自分のトラウマになっているのは自分でも理解している

のだ。だから家族のような人々、ネギやアーニャを猫かわいがりしてしまうのだろうことも理解している。そして今、テトラが自分と関わることで傷つくことも理解している。それでも、自分は関わろうとしている。歪んでいる。結局自分の為に行動しているだけなのかもしれない、私は。

「全然、優しくなんて、ないわ」

ネカネの脳裏には、先程のテトラの表情が浮かぶ。形容しがたい表情。哀しいような、寂しいような、それでいて、どこか嬉しそうな顔。そんな顔、見たくなんてないのに。どうして自分は無力なのだろう。

「ああそっか」

（あれは、自分の無力さを呪っているのかもしれない）

ネカネは少しだけテトラの気持ちを理解した。無力さと否定、これがテトラの、愛すべき弟の根幹なのだ。自分以外の誰かに、彼が――彼自身が認められるまで、きっとそれは変わらないのだろう。認められらないことで自身を救おうとしている人間が、認められることで救われるなんて、どうして私たちはこんなに歪んでしまったのだろう。

誰かに認められるということ、それを望むのはとても自然なことだろう。けれどテトラはそれを望まない。彼の兄、ネギとは対照的だ。ネギもまた、歪んでしまっている。父、ナギ・スプリングフィールドの背中を追い続けることで家族を失った悲しみを誤魔化し、あの夜から逃げ続けている。英雄の息子として認められることで、ナギとの繋がりを保とうとし続ける。――過去に失った悲しみを癒

すには、次の大切な人々との絆が必要なのに。

ネカネが寮を出ると、既に日は沈んでいた。そのまま家へと向かうが、辺りは暗く、一寸先もあやふやになったように感じられる。ひゅう、と風が吹いた。静けさを切り裂いたそれは僅かにネカネの肩を震わせる。

誰も彼もが歪んでしまった。歪まずにはいられなかった。

「――なんて、無様」

ぎり、と歯を噛む。ネカネは憎らしかった。あの夜を演出した悪魔が、召喚者たちが。あの頃私達にはまだ覚悟なんかなくって、夕暮れの薄暗がりをただぼんやりと楽しく歩いていただけなのに。ひょっとしたら今もそう在れたかもしれないのに。

「まだ割り切ってなかったのね、私」

はたと気付いて、ネカネは苦笑してしまう。――ええほんと、どうしようもない。過去は過去だと、テトラにも言ったのに。

「ほんと、無様」

誤魔化すように足を早める。早く家へ帰ろう。暖かな家。家族のいる家。ネギがお腹を空かせているかもしれない。早く、早く、早く――。

「――――優しくなんて、ないわ」

（テトラを夜の帳に置いていく、こんな私が――）

「優しいはず、ないじゃない」

零したのは心。零れたのは涙。じゃあ、杯の中身は何なのだろう？

気付くともう家についていた。古びた木製の扉。向こう側にはネギがいて、扉を開ければ、おかえりなさい、と声をかけてくれるだろう。

後、一年。私達が私達でいられる時間。
ネカネはただ、祈るのみだった。
修業先で、ネギに大切な人が出来ますように。
修業先で、テトラが誰かに認められますように。
――私にはできないことだから。

鍵を開け、ドアノブを回して、ネカネは扉を引く。せめて今だけは、と思いながら。

「おかえりなさい、ネカネお姉ちゃん」

誰も彼もが歪んでしまった。歪まずにはいられなかった。

それでもせめて今だけは――。

「ただいま、ネギ」

暖かいはずのそれはどこか冷たく感じられた。

第二話（後書き）

次回は卒業の予定

補足

ネカネとネギは同居（ネカネがネギの保護者だから）
ネカネは王家の系譜に連なるもの？
ネカネのトラウマ。
以上は捏造設定

第三話

長かった。テトラが今日という日を迎えるにあたって、初めに思い浮かべた感想であった。

部屋の片隅にある鏡に姿を映し、身だしなみを整える。学校指定の深緑のローブを羽織ると、ポニーテールを結びやすいよう天井を見上げるように顔を上げる。耳から上の髪を細いゴムで結び、その後耳から下の髪を合流させて再び結んだ。テールの高さが気に入らないのか何度か結び直すと、こんなものでしょう、とでも言うようにテトラは小さく頷いたが、鏡に映しだされた自分の姿を、思い出したかのように憎々しげな様子で眺める。

「生き写し、か。私にとっては正しく災厄の魔女なのでしょう」

鏡の中には若き日の母親――アリカがいる。身長はまだ比べるべくもないが、１５０ｃｍ程度はあり、瞳の色も虹彩異色（オッドアイ）ではなく、薄い茶色だ。けれどそれ以外、ツリ目がちな凛々しい顔つきや流麗なブロンド、鍛えてはいるものの未発達故の華奢さは、やはりアリカを彷彿させた。

「嗚呼、災いだ、災いだ」

ぼそりと呟き、帽子掛けからとんがり帽子を手に取って頭に載せる。座りが良くないのか何度かいじくって調整し、壁に掛けられた時計を見るとそろそろ講堂に向かわねばならない頃合いであった。

「ああ、もうこんな時間ですか」

テトラは部屋を後にする。後ろ手に閉めた扉はきしりと僅かに音を鳴らすのみで、残された鏡はただ殺風景な部屋を映していた。

「――本当に、長かった」

視線をめぐらすと、講堂には多くの人間がいた。ネギやアーニャはもちろん、在校生、教師ともに総出だろう。今日は卒業式。長い物語の始まりで、つかの間の平穏の終わり。英雄の息子の出立式。

（まだまだ誰かさんの掌の上なのでしょうけど）

その事について、テトラには特に感じるところはない。それなりに世界を回った身として、テトラは自身がまだまだ子供だということを理解している。子供が存在する社会では、彼らはどうしようもないくらいに弱い。誤魔化すための戸籍も手に入らず、庇護されるべき存在。それが『英雄』の息子ならなおさらだ。

（まあ、私は更に『災厄』に縛られるのでしょうが）

そんなことを考えているうちに、卒業式は始まった。校長が深く渋みのある声で祝言を述べ、そして卒業証書の授与。長かった。再びテトラは思う。

「卒業証書授与。
――ネギ・スプリングフィールド君！」

ハイ！と元気に返答をするネギに、不意に何かこみ上げるものがあった。もし私がテトラでなかったら、もし原作と呼ばれる知識が、

記憶がなかったら、もし、もし、もし――。

「貴方は主席として優秀な成績を修め、本校所定の全過程を終了し、卒業したことをここに証する」

暗い考えが纏わりつき、いつの間にか俯いてしまっていた。ネギの嬉しそうな様子を今だけは見たくなんてなかった。あの場所――ネギの立つ位置に憧れてなどいないのだ、と必死に言い聞かせる。私はここにいる／いない。そうだ！　私はここにいる／いないのだ！

「テトラ・スプリングフィールド？」

はっと顔を上げる。動きが急だったのか、テトラのとんがり帽子がずり落ちてしまった。羞恥は感じるが誰もそれを咎めない。笑うこともない。だってテトラはここにいる／いないから。ゆっくりと帽子を拾い上げ、壇上へ向かう。形式通りの言葉に礼を行って踵を返し、元の位置に立った。手には、修業先が浮かび上がる卒業証書。

（作られた運命、か）

私の在り様そのものかもしれないな、とそんなことを思った。

テトラは卒業式が終わると校内を見てまわっていた。特に思い出があるわけではないが、石造りの寺院のようなこの校舎の荘厳なゴシック様式に、琴線に触れるものがあったのだろう。修練場、教室、最後にお世話になった図書館を退出すると、テトラ、と聞き覚えのある声で小さく呼ばれた。振りむいた先にはネカネの姿。テトラが黙って近づいていくと、ネカネはくるりと方向転換してテトラの横

に並ぶ。

そうしてしばらくの間、外に面した石造りの廊下をネカネとテトラは歩いていた。石柱の間から切れ切れと覗かれる風景は、夕暮れの朱に塗られた雲とそれに隠れた山山。

「校長先生がテトラにお話があるって」

「そうですか」

微笑を湛えたネカネとは対照的に、テトラは無表情のまま。

「修行先はどこだったの？」

「日本です。日本で教師をすること」

「ネギと、同じなのね」

「ええ」

予想通りでしたが、という言葉をテトラは飲み込む。自分にしか理解できない言葉で、自分にしか意味のない言葉だ。そう自分にしか――。

「どうかした？」

「……少し考え事を」

そう、とネカネは相槌をうつ。

「その眼」

「え？」

「その眼、卒業式の時もしていたわ」

クスクスと笑ってネカネは続ける。

「帽子を落としたのも、そのせいよね、きっと」

その言葉に、テトラは初めて固い表情を崩した。耳が赤くなり、みっともなくうろたえてしまう。恥ずかしさで血が沸騰しているかのようだった。何しろテトラは、生まれてこのかた笑われた経験がない。最後に笑われたのは何年も昔、それこそ転生以前かもしれない。

「よかった」

「何も良くはありません」

「だって、そんな表情、できるじゃない。本当に、よかった」

すねたように顔を背けるテトラの様子に、ネカネは手を口にあてて朗らかに笑う。安堵したようなネカネの笑み。テトラは内心、厚顔無恥な自身に呆れていた。望んでいないことなのに、けれど誰かにみられていたという安心感がじわりじわりと広がっていく。

「――――ありがとうございます」

あ、と手で口をおさえる時には遅く、既に心が漏れてしまってい

た。気が緩んでいる。きっと今日で学校が終わったからだ。そうきっと。そのせいだ。

「どういたしまして」

ネカネは一瞬目を瞠って、けれどまた何事もなかったかのように、柔かく微笑んだ。

（恥ずかしい、恥ずかしいけれど悪くない）

テトラもつられて口の端がつり上がる。――本当に、悪くない。

「そういえば、テトラは日本に興味があるの？　お部屋に日本の漫画があったけど」

「ええまあ、日本語も話せますよ。って入ったんですか？」

「あら、テトラを探していたのよ。――前から知ってはいたけれど」

テトラの額に冷や汗がにじむ。

「それともなあに？　お姉ちゃんに見せられないものでもあるのかしら」

いやまあ、確かに見せられないものはたくさんありますけれど云々。しどろもどろになるテトラをネカネは愉快気に見つめていた。

「優しくありません」

「あら、最初からよ」

口を尖らせるテトラに、ネカネは軽口を返すのであった。

「つまり、麻帆良学園に先に行ってもらいたいということですか」

「そうなるかのう」

テトラとネカネが校長室に入ると、修業先についての説明が行われた。麻帆良学園で教職を執ること。テトラは日本に通じているということだから、ネギに先行して研修を受けること。そうして、ネギの助けをしてほしいこと。

日本に詳しい、ということを耳にした時、ネカネをつい睨んでしまったが、いつもの笑顔で流された。まあ、仕方がないか、とテトラは思う。悪気はないのだと思いたい。

はあ、と一つため息をつき、テトラは口を開く。

「幾つかお尋ねしてもよろしいですか？」

校長は鷹揚に頷いた。

「どうしても麻帆良でなければなりませんか？　子供の姿がだめなら年齢詐称薬を利用すればいいと思いますが」

「他にめぼしい候補地が無いんじゃ。事情を理解して尚、受け入れてくれる所が、の」

「先行する必要性があまり見られないのですが」

「要請があっての。それにいきなり授業を担当するよりかはましじゃろ？」

「……ｎｅｅｄ　ｔｏ　ｋｎｏｗですか」

校長は、ほっほと曖昧に笑う。

「兄の手助けということですが、私は兄と仲が良くありません」

悪いわけでもありませんが、と内心で付け加える。

「それはほれ、これからに期待、というやつかの」

テトラは、うんうんと頷いているネカネを見てややげんなりし、無いんだろうな、と諦めつつ念を押す。

「拒否権は」

「正直、ないのう」

「……了解しました」

「……まあ、修業先の学園長はワシの友人じゃからの。安心せい」

その後、細々とした事項を補足されたが、テトラの内心は晴れないままであった。

※

先程、校長室を出て行った少年、テトラ・スプリングフィールドにメルディアナ魔法学校校長は後ろめたさを感じていた。

「……事情と要請、の」

長く貯えた自慢の髭を撫でながら、校長はそれについて思いを巡らせる。

メルディアナ魔法学校の上位機関、メガロメセンブリア元老院は、ネギ・スプリングフィールドに『英雄』を、テトラ・スプリングフィールドには『英雄』と『災厄』を幻視しており、ネギを手元に、テトラを外様に置きたがっている。それ故、彼らが所属する組織は何かしらの圧力がかけられる。それは逆に言えば、メガロメセンブリアに対する彼らの価値を示していると言っても良いだろう。したがって彼らは狙われる。彼らを取り込む組織にはメガロメセンブリアの圧力と、彼らを狙う外敵、という問題が生じるのだ。

「メガロメセンブリアが健全じゃったらよかったんだがの」

それらの問題を解決できるほどの力を持つのは、アリアドネーか麻帆良学園くらいしか無かったのだ。だが魔法世界は単純に危険である。ネギもテトラもまだ力不足であろう。故に麻帆良学園。学園長、近衛近右衛門とのコネもある。『悠久の風』の筆頭、高畑・T・タカミチもいる。環境としては申し分ない。

「普通に考えればこれでめでたしなのじゃが……」

麻帆良学園とメガロメセンブリア、双方から要請があったのだ。

テトラ・スプリングフィールドはやり過ぎていた。テトラに関する資料があまりに少なすぎるのである。技能については、ネギに劣るものの申し分ない。これは校長自身も認めている。正統な資料と客観的に言える。だが素行や人格については不明だった。テトラは嘘（ライズインザミラー）から出たまことによって、主観的評価は誤魔化せていたものの、いや、誤魔化せていたからこそ、客観的に見た奇妙さについて失念していたのだ。

ただの魔法生徒だというのに、不明な点が多々ある。この点が麻帆良学園側に疑心を抱かせ、テトラ・スプリングフィールドの人物評価の為に、テトラを先行させることが求められたのだ。但しこれには警備上の問題も含まれてはいた。行動の傾向を含め、どの程度使えるのかがはっきりしなければ、警備や保護の対策がとれない。そのためにネギとテトラが二人揃う前の試用期間が必要とされた、という事情もある。

「まあ、これはある程度仕方がないかの。わしにも多少違和感はあるわけじゃし」

麻帆良学園がテトラの先行を求めたのに同調する形で、メガロメセンブリア側もそれを要請した。はたして麻帆良学園に『英雄』を育てるだけの力があるのか、といちゃもんをつけたのだ。彼らの言い分はこうである。警備の観点から二人を別々に育てるのに問題があるのは認めよう。だが『英雄の息子』は二人いる。で、あるならば片方を先に送り出して、真に英雄を育てるに足るか、試験期間を運用するのはどうであろうか、と。そしてその際、伸び代が目に見

えてあるテトラを指名したのだ。

要は、テトラ・スプリングフィールドが麻帆良で何らかの成長をしない、あるいは、外敵に傷つけられるような出来事があった場合、ネギ・スプリングフィールドはメガロメセンブリアで育てよう、ということである。

この主張を穿ってみると『メガロメセンブリアに不都合なテトラ・スプリングフィールドを害する、あるいは殺害することで、勢力を伸張させている麻帆良学園、ひいては関東魔法協会の権威の低下が可能である』ということになる。メガロメセンブリアにもそれなりの利があるのだ。

「政治に巻き込まれる子供たち、か。テトラ君にもネギ君にももう少し遊ばせてやりたかったもんじゃ」

まあ、ナギ程では困るんじゃがの、と付け加えて、独りニヤニヤする。

「それにしても、テトラ君には、おちおち足を向けては寝られんの」

そもそもテトラ君は安心して眠ることもできんかもしれんが、と不穏なことを考える校長であった。

※

「鬱だ死のう」

そのころテトラ・スプリングフィールドはそんなことを呟いていた。

ローブを床に放って自室のベッドに寝っ転がったテトラの脳裏では、どうしてこうなった、という言葉がでかでかと点滅していた。テトラには、校長の発した事情と要請、という言葉の真意なんて詳しいところはわからない。何かしらの政治的な配慮なのだろう、とただ推測するだけである。

「この顔のせいなのでしょうか」

ぺたりと手を頬に当て、正しく災厄です、と恨みがましく独りごちる。気分は急直下。自慢のポニーテールも艶がなく、心なしか萎びているようだ。

「だいたい先行とか原作ブレイクも甚だしいじゃないですか。いやまあ確かに認識されなければどうということは無いなんて思いましたけどね？でもそれとこれとは違うでしょうよ……そもそも何もしなかったはずなのに。いや何もしなかったのがまずいのでしょうかだとしたら私はいったいどうすればいいのでしょうかけれどまた何かしてあんなことを繰り返すのだとしたら私は踏鞴を踏んだら結局してしまうことになるので尻込みしてしまうに言い換えましょうそうしましょうそもそもなんで男の娘なんですかあれですか遺伝子の軌跡ですか王族の神秘ですかだいたい父さんって１７歳で求婚ですか禁則事項じゃねーですかあああでも私達をつくったのは２６歳ですからいいんでしょうかつーかつくったなら最後まで責任とってくださいよ子供にしょいこませるんじゃねーですよそもそも王族と駆け落ちとかドラマティックが止まらなさ過ぎますよってそういえ

ばここはそういう世界でしたうつだしのう……」

二三分、ひと通りの呪詛を吐くと、仰向けになり、額に手の甲を当てて上気した顔を冷やす。

「生きる、か」

――私はここにいる／いない。何度も繰り返してきた言葉だった。

「それに意味があったとして、私には、どうすればいいか、わかりません」

奇跡の軌跡で紡がれ、救われる繊細な物語。『魔法先生ネギま！』それが演目。救われるのは世界。紡ぎ手はネギ・スプリングフィールドとその愉快な仲間たち。そこには自分の姿なんてなくって。

「そもそも、ここに私がいる影響が気になるなら、さっさと死ぬなりなんなりして消えればいいのはわかってるんですよ」

けれど、とテトラは思う。

「……けれど死にたくなんてないし、不幸にもなりたくないんです」

くしゃり、とシーツを掴む。

「救ってほしいのは私の方ですよ……」

いつの間にか、ベッドのシーツにひとつ、シミが増えていた。

第三話（後書き）

テトラさん、やり過ぎて疑われました、の回。

補足

結局教師として働かせることに。というか教師以外にすると原作メンバーとの関わりにおける問題が出来なくなってしまうのが哀しいところ。

ネカネさんが大人っぽく。

校舎の全景（講堂のモデルはノートルダム寺院の祭壇らしいので）

ネギとテトラの修業先は校長他政治的圧力によって決定される。

（コネのあるところが偶然選ばれるなんて……？）

メガロメセンブリアが腹黒。校長と学園長も腹黒？

関東魔法協会は世界的に見ても独自的な権威がある。

次回は麻帆良学園に着任予定。

閑話

青々と茂った丘陵の斜面に体を預け、テトラは独り、暖かな日差しを浴びていた。

魔法学校を卒業したテトラは、落ち着かない日々を過ごしていた。卒業に伴い、住んでいた寮を追い出され、麻帆良に行くまでの短い期間、書類上の保護者であるネカネの家に居候することになったからだ。ネカネとの一方的な隔たりは、テトラが一度本音を吐露して以来、多少は鳴りを潜めていた――未だ、含むところは多々あるが。問題は、兄、ネギ・スプリングフィールドである。当然、二人は同じ屋根の下で暮らしているわけで、自然、テトラの胃はストレスで云々という状況にあった。そんな環境に対するせめてもの抵抗として、テトラは集落から離れて日向ぼっこをしている。

「――気持ちいいですねえ」

遠くではさわさわと揺れる木の葉の音。俗世なんて気にせずこのまま――。

「それが出来たらどんなにいいことでしょう」

庇護されるべき子供であること。そのたった一つの事実が致命的なまでにテトラの行動を縛っている。
今は雌伏の時だと理解はしているが、流れに乗らざるを得ない無力さはただただ呪わしい。

「『麻帆良で教師として生活する』――ねえ」

簡単には言うが、これには様々な問題が付きまとう。そのひとつが生活基盤の構築である。目下、テトラを悩ませているのは住居問題であった。テトラにとって、ネギ・スプリングフィールドの物語は絶対と言ってもいい。万が一にもA組メンバーと関わるのはよろしくないし、ネギは神楽坂明日菜と近衛木乃香のルームメイトになる必要がある。そして、ネカネのように嘘からでたまことが効きづらい者がいる可能性だってあるのだから、テトラにとっての最善は女子寮で生活しないことであり、最低でも神楽坂明日菜と近衛木乃香と同室は避けなければならない。

「――なんて難しい」

教師である、ということを利用して『教師と生徒の、それも異性との同居の問題性』を訴えると今度はネギにまで累が及ぶだろう。不可である。

アパートを借りる？　保証人がいないから問題外。誰かに無理やりさせることもできるが、さすがに疑われる。女子寮の外に理由もなく住居を構えるのは、おそらく警備の観点からも許可は下りないだろう。最悪、ネカネ・スプリングフィールドに保証人を頼むこともできるが「あらあら、じゃあネギと一緒に暮らすのはどうかしら」などと言う事態になりかねない。

「いやしかし、理由があればいいのか。個人的で絶対的で決定的な理由が」

女子寮、これがキーワードだ。女子寮の最大の特徴――――。そうか！　簡単じゃないか！

「女性恐怖症ということにすればいいのか！」

結論から言うと、この言い訳は通らなかった。メルディアナ魔法学校校長に要望を出したが、裏付けとして取られた「あら、そんなことないと思いますけど」というネカネの発言によって一蹴されたのである。というかそんなことを言ったら修業することもできはしないのだ。テトラ・スプリングフィールド。実は案外バカなのかもしれない。

とはいえ、数日間放心状態であったテトラを思いやったのか、ネカネが陰で尽力し、一人で暮らすことは許可された。その代わりに、テトラの資料には女性不信？　という補足がなされ、更にはネカネの茶目っ気により、テトラがそれを知るのは麻帆良到着後のこととなるのだが。哀れ。

閑話（後書き）

テトラさん、一周回っておバカ？の回

補足

ネカネさんのちょっとした茶目っ気（捏造）

テトラさん、人生経験が足りません。頭でっかちです。

感想で滞在先についての話があったので。

第四話

日本時間２００２年１０月４日金曜も昼時、成田国際空港の待合室には、紺のスーツを着たテトラの姿があった。ふかふかのアームチェアに身を預け、眠たそうに目をこすっている。脇には鈍く光るスーツケースが、膝の上には畳まれた黒のインバネスコートとビジネスバッグが置かれている。１５０センチと年齢にしては大柄であり、スーツ姿ということも相まって年齢とは不釣り合いな雰囲気を醸し出していたが、唯一、艶やかな金髪を結(ゆわ)えている空色のシュシュだけが子供らしさを表していた。

約半日もの間飛行機に乗った後であり、時差ボケも酷い。あまりの眠気に舟を漕いでいると、一人の男性が待合室にやってきた。年のころは３０も半ばと言ったところだろうか。眼鏡をかけ、素色のスーツに身を包んだその男性は、視線を巡らせてテトラの姿を見つけると、ふっと笑みをこぼし、テトラの方へ足を向ける。そんな彼に気付いたのか、テトラは薄く目を開け、眠気覚ましにと首を振った。金のポニーテールもそれにワンテンポ遅れて左右に揺れる。男性はその様子に目を細めながら、テトラに声をかけた。

「やあテトラ君」

その声にすっかり目を覚ましたテトラは、顔をあげて男性の姿を認めると、居住まいを正す。そうして不承不承ながら返事を口にした。

「こんにちは、高畑さん」

「じゃ、早速行こうか。ああ、疲れているようだから、荷物は僕が

持とうか？」

「……結構です」

テトラの慇懃な態度に対して高畑・T・タカミチは僅かに顔をしかめるが、すぐさまそれを隠し、行こうか、とテトラを促した。歩き始めた高畑の背を追いかけながら、テトラもまた、妙になれなれしいな、と眉根を寄せる。

そのまま空港を出ると、二人は電車に乗った。電車を乗り継いで麻帆良へ行く途中、幾度となくテトラに話を振ってくる高畑。その多くは麻帆良に関することで、話半分に――英語では一粒の塩を入れるっていうのでしたか、塩は解毒剤のひとつってことでしたっけなどと益体のないことで思考を弄びながら聞き流していたテトラだが、するりとある質問をされた瞬間、高畑の雰囲気が変わったのを感じた。

「――ウェールズはどんな場所なんだい？」

高畑の探るような気配。ここに至ってようやくテトラは自らの窮状に気がつき、麻帆良についてからでいいでしょう、などと考えていた自身の迂闊さに呆れた。

（……怪しまれている？　なら、私が今ここにいて、ネギがいない理由は、私自身に何かしらの懸念を抱いているということか……？）

適当に満足させるような返答を行いつつ思考を加速させる傍ら、高畑の持つ、テトラに関する関心と異常性認知を否定する。嘘から（ライズ）でたまこと（インザミラー）発動時の、体から力が抜ける独特な感覚が、メルディアナでのそれよりも大きいことにテトラは危機感を強めた。

（それなりに魔力を使いますね。麻帆良で魔力、残るんでしょうか……）

しかしその甲斐あってか、高畑からの質問攻勢ははたと収まり、次の瞬間には高畑の視線からは興味が抜け落ちていた。

（やれやれ、我ながら先が思いやられます。そもそも安心できる未来って私にあるんでしょうか……）

未解決の住居問題――ある程度はネカネの尽力で解決していることをテトラは知らない――を始めとする問題達を思い浮かべ、ため息が否応なく漏れるのが、やけに厭わしい。

思考に気を回し過ぎていたのか、ふと気がつくと、既に電車は麻帆良学園都市に入っていた。電車の外を過ぎ去っていく風景は、まさしく異世界。麻帆良超科学がそこここに覗かれる中世都市街は、正しく異世界である魔法世界への渡航経験があるテトラをして、世界が違いすぎると呆けさせていた。

「そろそろだよ」

高畑の言葉にはっとして、下車の準備をする。

「次は――麻帆良学園中央駅――。麻帆良学園中央駅――」

目的地を告げるアナウンスに、テトラは心躍らせることなく、肩をすくめるのみであった。

「――驚かんのじゃの」

むしろ、何故そちらが驚いているのですかとテトラ・スプリングフィールドは、後頭部がやけに特徴的な目の前の老人に混ぜっ返した。

「いや、それは……のう？」

「僕に振られても……」

後頭部がやけに特徴的な――ぬらりひょんを彷彿とさせる老人は、傍らに控えている高畑に話を振るが、彼は曖昧に言葉を濁す。

「――確かに特徴的な外見ですが、人間、見た目だけで判断されてはたまったものではありませんから」

その言葉に老人の目が僅かに鋭くなるのを見てとって、皮肉気な、そして自虐を含んだ自らの発言にしまったと思いつつも、まあいいかとテトラは内心で独りごちた。

「ところで、座ってもよろしいでしょうか？　長旅で少々疲れが……」

実際、テトラは疲弊しきっていた。体を動かすのも億劫で、ポニーテールも力なく垂れていた。嘘からでたまことは、結界のような範囲指定系と、半永続的な対象指定系の二つがあるが、麻帆良学園に入ってからこっち、両者を同時使用しているのだ。

（魔力の節約のため、私に関する関心と異常性の否定のみに絞って

いるのに、正直、これにA組メンバーが加わるとか、軽く死ねますよ……）

その甲斐もあり、老人と高畑の、テトラに対する関心とテトラの異常性の認知はだいぶん薄れてはいるのだが。ともあれ問題はテトラが今にも倒れそうだ、ということである。ぽろりと自虐めいた言葉が漏れるのも仕方のないことであろう。

「気がきかんですまんの。どうぞ座りんさい」

許可を得たテトラが来客用のソファにのろのろと腰掛けるのを見届け、老人はひとつ咳をして口を開いた。

「さて、儂は近衛近右衛門。麻帆良学園――この学園の学園長をやっておる。テトラ君、ようこそ麻帆良へ」

「歓迎の御言葉、痛み入ります。私はテトラ・スプリングフィールド。この度は修行の為、この麻帆良に参りました。厄介をかけますがどうぞよろしくお願いいたします」

歓迎の言葉に応じながら、これは交渉の場なのだ、とテトラは自分に言い聞かせる。好々爺然とした目の前の老人は腹にいくつも抱える化け物のようなものだ。テトラは自身の異能、嘘からでたまこと（ライズインザミラー）がどれだけ不完全な代物なのか、最近になって一層感じ取っていた。ネカネに始まり、自らのうっかり。どれだけ警戒してもしすぎることはないだろう。正攻法では敵うことはないのだから。

そんなテトラの様子を近右衛門は気に留めることはなく、修業についての説明を始めた。

「テトラ君には、おおよそ二つのことをしてもらうことになるのう」

その言葉にテトラは首をかしげる。

「ふむ、聞かされておらんのか？　まあよいか。一つは数学の教師じゃ。これは聞いておろう？」

ええ、と首肯するテトラ。実際その話についてはきちんと聞かされており、自身、できる限りの準備はしてきたのだ。今更やっぱり違いました、ではただでは済まない。主に近右衛門が被害者の方向で。

「それについてはあるクラスの副担任もしてもらいたいのじゃが……」

「御冗談を。それに私が副担任なら兄は担任でしょう？　実習生、もしくは新米の教師二人が担当するのはいささか問題があると思われますが」

予想された近右衛門の言葉に素早く言い返すが、事態はテトラの斜め上を行った。

「まま、そう焦るでない。副担任もしてもらいたいのじゃが、君の保護者から、君がその――ほれ、一人暮らしを希望しているのを聞かされての。女子寮の副管理人も兼ねて、個室を与えることにしたんじゃ。それで、さっきの二つのことの片っぽが女子寮の副管理人、というわけじゃ。いきなり二つの大きな負担を強いるのも申し訳ないしのう」

その言葉を聞いたテトラの心は筆舌に尽くしがたかった。不可能

かと思っていた出来事が解決し、欣喜雀躍している部分もあったが、ネカネにどうやってお詫びをすればいいのか、いよいよわからず、困惑しているのが大部分であった。落着いたらお礼の手紙を出そう。テトラは決心した。そこでようやく、自分が呆然としている状況に気が付き、急いで頭を下げた。

「……ありがとうございます」

「なあに、こちらの都合もあったしの。運が良かった、そう思うとええ。詳しい仕事については管理人に聞きなさい。――さて、教師についてだったの。仕事のこまごまとしたところは指導教員に聞いてほしいのじゃが、まあ、大体のところを説明するかの」

ほっほと一つ、笑って近右衛門は言葉を続けた。

「まず、十月の中旬、十日後くらいに行われる中間テストまでは、授業の仕方や準備について指導の先生に教わるとええ。それから授業の見学。これは担当クラスとの顔合わせという意味合いが強いのじゃが」

「特に僕のクラスは個性的だからね、いきなり授業するよりはいいと思うんだ」

「テストが終わったら、いよいよ実習、というわけじゃ。ちなみに実習期間は今年度一杯を目途にしておる。――こんなところかの。何か質問は？」

ふうむ、とテトラは僅かに思案して言葉を紡いだ。

「直接は関係ありませんが、お給金については如何程になるのでし

ょうか？」

その言葉に近右衛門は面食らったような表情を浮かべるが、すぐに気を取りなおす。

「給金については、まあこれくらいかのう。――ああ、女子寮の副管理人については家賃代わりと言うことになっておる。じゃからそんな顔をするでない」

その後も細かいところを詰めていくが、最後にテトラは問いかけた。

「――私は組織の一員として、関東魔法協会に庇護されると同時に、その責任を果たすべきである――これに相違ありませんね？」

この質問には流石の近右衛門も呆け、慌てて返事をした。

「まあ、テトラ君は身内、ということになるかの」

（言質はとれません、か。いざとなったら利用できたかもしれないのですが）

何かと物騒な考えから出た言葉であった。

「あー、これで終わりじゃったら、疲れているようじゃし、寮で休むとええ。最低限は準備されているはずじゃ」

※

「テトラ君、何というか落着いていましたね。学園長はどう感じましたか？」

テトラが出て行った室内で、高畑は感想を漏らした。近右衛門は長い髭を撫で、僅かに眉根を寄せながら、その言葉に応じる。

「ふむ、あれを表現するなら、固い、と言った方が適切じゃろう。子供と大人の中間――丁度中学生くらいの時分のそれに似た、の」

「そうですか？」

「そうじゃ。落着いているだけならば、あんな目はせんよ」

僕にはそう見えませんけどねえ、と高畑は頭を振った。

「――ああでも、ネギ君とは全然違いますね。落着いている、ということもそうですが、何というか存在感が無いというか……」

「確かにのう。ちょっと大人びた、どこにでもいる普通の子のようじゃった。……魔力もナギより数十段も劣っておったし」

あんな子を少しでも疑ったなんて馬鹿馬鹿しいにも程がある。それが二人の共通見解であった。

「そんな子を利用せねばならん魔法使いに、正義はあるのかのう」

その言葉に意気消沈する高畑をしり目に、近右衛門は考えをまと

めていた。

メガロメセンブリアの提案――テトラ・スプリングフィールドを利用した試用期間の意図――その裏の意味を、当然彼らは理解し、感得していた。テトラが先行する、という情報が流れてから麻帆良への侵入者が増えていたのだ。まだ大した力を持たない侵入者のみだったが、もしも大妖怪や爵位級の悪魔が来た日には、処理能力を超過し、目も当てられない惨状を呈することは想像に難くなかった。ちなみに吸血鬼事件――エヴァンジェリンについては黙認していた。あわよくば修行の一つに利用できるかもしれないと考えているからだ。

「……タカミチ君には迷惑をかけるの」

「良いんですよ。それが彼への恩返しにもなるんですから」

「千の呪文の男（サウザンドマスター）、大戦の英雄、ナギ・スプリングフィールド、のう。ナギの奴もどこをほっつき歩いておるのだか……」

「きっとどこかで生きていますよ。だって彼はナギさんですから」

そうじゃの、と近右衛門が同意すると、卓上の電話が鳴り響き、新たな侵入者の報が届いた。指示を出そうとしたが、高畑の眼光が鋭くなるのが視界に入り、内心でため息を漏らす。

「あー、タカミチ君タカミチ君。行ってくれるかの？」

「ええ喜んで」

侵入者の位置を聞き、目をぎらつかせて飛び出て行った高畑の様

子に、近右衛門は侵入者の冥福を祈らずにはいられなかった。

「まだまだ若いのう」

いっそうちのこのかを……いや、テトラ君も捨てがたいか……？

じゃが彼は女性不信という噂が……じゃから担任は一応はずしたんじゃが……やっぱりネギ君かのう、などと考える近右衛門であった。

第四話（後書き）

テトラさん、女性不信だと思われてますよ、の回

補足

吸血鬼事件に関する学園長の見解及び、ネギとテトラが関東魔法協会に所属する（した）扱いにしたことは捏造。

副担任からはずされた理由は、一応のメルディアナからの一応の報告だけでなく、ネカネさんの尽力のせいで女性不信の可能性ありとされたため。したがって副担任フラグは折れていなかったりする。

近右衛門と高畑が良い人？　英雄としてはネギに期待が集中してる。テトラは普通の子。そんな子に負担をかけるなんて……。

高畑がハッスルしすぎ？　数多の二次創作でナギにコンプレックス的なものを持っていると描写されているので流用。

近右衛門が微腹黒。これは後々

第五話

麻帆良学園女子中等部女子寮一階の片隅にそれはあった。玄関からは遠く、一番奥にあるそれは、滅多に人は寄りつかず、今では最低限の生活用品が置かれているのみの部屋だった。二人部屋として使われていたにしては広さがなく、殺風景で薄暗い部屋だった。

「この部屋、明らかに物置でしたよね……」

というか物置だった。麻帆良来訪の翌朝、昨夜買っておいたおにぎりを頬張りながら、テトラは現状を再確認していた。

救いは改装したてであることだろうか。昨日の時点では薄くほこりが積もっていたフローリングには、未使用のせいか傷一つない。部屋にはカーテンすらないのだが。というか持ち込んだ荷物に、多少の家電程度しかないのだが。

「いわくなら、ありそうなんですけど」

前日に顔を合わせた管理人の、何とも言えない表情がテトラの脳裏をよぎる。――なにそれこわい。彼女はそんな顔をしていた。もはや乾いた笑いしかでない。

「いやまあ、冷静に考えると、わざわざ改装してくれたということは大変ありがたいこと、というか普通あり得ないことなのですが。いやしかし、その分だけ目立っている、と言うことなんですよねえ。昨夜はまだ、然程の騒ぎにはなっていないのですが、今日からどうなることやら……」

まあ、今日はとりあえず買い物ですかねえ、とテトラはぼやいた。

※

右手にカメラを携えた一人の少女が、女子寮の門扉を遠くから見詰めていた。ハンチングに赤ぶちの伊達眼鏡をかけた少女の出で立ちは、ジーンズに、襟元にファーのついた淡藤色のパーカーと、どこかマニッシュな雰囲気を生み出している。普段の少女を見知っているものが目を留めても、誰かはわからないだろう。そんな変装をした少女は、楽しそうに口を開いた。

「ドキドキ☆大☆尾行大会！――なんちって」

女子寮ニ新タナ入居者キタル――この情報は一夜にして寮内を駆け巡っていた、というよりはそうならざるを得なかった。何しろテトラは女子寮の副管理人なのだから、その情報が公開されるのは当然である。だが、それだけが理由ではない。

生徒に事前通告として伝えられたのは、テトラの名前と写真のみで、本人の姿を認めた人間もそう多くはおらず、その誰もが『ええと、どんな子だったっけ？　金髪の美少女だったのは覚えてるんだけど……』と口を濁すのみだったからだ。これだけでは誰も満足しない。張り込みをしているその少女も、その内の一人であった。

「お、ようやく来たねー」

門扉からテトラが出てくるのを確認して、少女は舌なめずりをしながらその後を追う。

「うーん。あれだね。ちょっと男の子っぽいかっこだけど、美少女って感じだね～」

自他共に認める、麻帆良のパパラッチこと朝倉和美にとって情報とは生命線である。それゆえその管理には十分注意を払っている。何時、何処で、どのような状況で、何のためにその情報を手に入れ、どんな記事に仕立て上げるのか――事細かく注釈を入れることが習慣となっていた。しかし、昨夜は違った。一枚だけ、用途をさっと思い浮かべられない写真があったのだ。

（麻帆良パパラッチの私が忘れるなんて――）

彼女の左手に握られたその写真には、テトラの姿が小さく映し出されていた。

「んー、そう思ったんだけどなー」

そんな朝倉の先を行くテトラの行き先は商店街。増えてくる人ごみの中、多少早歩きではあるものの、特におかしな様子は見られない。

「ほうほう、まずは家具屋か」

カーテンやタンス、照明に本棚、ベッド等を物色していく。選んだ家具は全体的にシックな印象を抱かせるものだ。

「いいとこの子だったり？　んーでも、やっぱ女の子っぽくはない

かな」

次は電気屋。家電を見て回って幾つか選ぶと、店を後にした。

「今度は携帯ショップっと。――ってあああ、それは動作が遅いのに……」

テトラの買った携帯に、思わず愚痴を漏らしてしまう。彼女はそれを嫌って機種を乗り換えたのだ。

その次は麻帆良洋品店。あいかわらず男の子っぽい趣味だな、と感想を抱く。

店を出て通りに戻ると、時刻は昼下がり。通りを行き交う人も増えていた。多くの人がテトラにぶつかりそうになり、彼はひょいひょいと人ごみをよけていく。観察していると彼に衝突しそうになる人々は共通点を持っていた。

「たしかに、なんというかうすいのはわかるけどさー。みんなムシしすぎでしょ～」

テトラとは対照的に、人々は不機嫌なオーラを醸し出す朝倉を避けていく。そのことに更にイライラを募らせるが、写真を撮ることだけは怠らない。それが『麻帆良のパパラッチ』朝倉和美である。

人ごみをするすると進んでいくテトラであったが、パソコン専門店に入ろうとした時、ふと足をとめ、そうかと思うと、足早にその場を去っていく。なんだなんだと店内に視線をやると、彼女の級友、長谷川千雨が、テトラの去った方向を、眉をひそめて眺めているのがわかった。知り合いなのかとも考えたが、まー後で聞けばいいっ

しょ、と結論付け、再びテトラの後を追う。

一瞬見失いかけたものの、僅かに思案し、麻帆良で有名な和菓子店に入っていく彼の姿が見えた。

（……めずらしいんだろーなー。それとも実は甘いもの好き？）

数分待つと、餡蜜（あんみつ）の入ったビニル袋を抱えて出てくる。

「おーおー、たつみーと気が合いそうだねー」

その後もふらふらと街を探索していたが、変化が起きたのは、とある総合書店に入ったときのことだった。テトラの姿を追って本棚を曲がると、そこには誰も居なかったのだ。

「……まずった？」

麻帆良でも指折りの広さであるこの店内で、偶然にしても再び見つけることは難しい。故に、少しでもテトラを見つけられるよう、朝倉は出口を見張ることに決め、その一つに足を向ける。ダメでもともと、という考えはあったものの、それなりに勝算はあるとも踏んでいた。

出口を通過し、書店の真向かいにあるオープンカフェに席を取る。今日は朝から歩きっぱなしだ。少しぐらい休んでも罰は当たるまい、そんな気分だった。気付けにコーヒーを注文し、ちびちびと口にしながらテトラが出てくるのを待つが、なかなか出てこない。コーヒーを飲んだというのになんだか眠くなってきて、うとうとと――――。

「お疲れ様です」

その言葉に冷や水をかけられ、意識を瞬時に覚醒させると、素っ頓狂な声をあげた。

「……え！？」

目の前の席には、私にもコーヒーをと呑気に注文するテトラ・スプリングフィールド。脇に餡蜜が置かれている。

「えええええええええええ！？」

朝倉の様子に、テトラは表情を崩して怪訝そうな表情を浮かべた。その口からは「あれ？　え……間違ってしまいましたか？　いやしかし……」等と漏れている。

「そ、そーですよ。人違いですよ、きっと」

「（魔法使い的な意味で）学園の方ですよね？　朝からご迷惑をお掛けします」

朝倉はいよいよ観念した。こうなったら堂々と取材しよう。あははーと陽気な顔を作って言葉を選ぶ。

「バレちゃってたかー。結構自信あったんだけどなー」

「視線にはそれなりに敏感な性質（たち）でして、少なくとも素人レベルならわかりますよ。――それに……」

「それに？」

「――いえ、なんでもありません。そうですね、どういった御用向きで？」

「んー、噂の実態を調べようかにゃーなんて」

「……噂？　実態？　調べる？　……それはつまり、私に対する関心と言うことですよね？」

「そーだけど？」

妙に持って回ったような言い方をして、怪訝な表情を更に深めるテトラに朝倉は応じた。それ以外に何があるっていうのだろう？内心で疑問を募らせる。

「それはまた、どうしてですか？」

「女子寮に謎の副管理人来たる、なーんて話題性は十分！　スクープにぴったし！　偶然とったっぽい写真を見たら、ビビッとキタのよね～♪」

その言葉にテトラは頬をひきつらせる。瞳には焦燥の色。そんな顔もできるんだなと呑気な感想を抱く朝倉に、テトラは恐る恐る最後の質問をする。

「――失礼ですが、貴女のお名前は……？」

「こりゃまた失礼。私は――」

「……あれ？」

私は何をしていたのだっけ？　頭を振って思いだそうとする朝倉。いつの間にか夕方だ。カフェにどれだけ長い間居座っていたのだろう。

（そうだ、確か直接話をして――）

片手でカメラを弄びながら、その時のことを思い出したが、既に関心が薄れてしまっていた。

（なんだってそんなことを調べたんだったかなー？）

まあいっかと一人納得し、精算すると寮への道を歩き始める。はっきりとしない違和感が心の片隅に付きまとう、そんな日々の始まりであった。

※

彼女が『テトラ・スプリングフィールドの護衛』という依頼に応じたのは、偶然であると同時に必然でもあった。学園に所属する魔法使いだけでは処理の手が足りない、ということは偶然であったし、彼女が丁度その日、手すきであったのも偶然であった。しかしその依頼を引き受けたのは、彼女の意思による必然であった。

違和感と直感。それが彼女が依頼を引き受けた理由である。テトラ・スプリングフィールドの来訪に相前後して、麻帆良の何かが変わった。それがテトラによるものなのかどうか――その見極めとして、彼女は直感的にその依頼を承諾したのだ。そしてその直感が正しいことが今、証明されていた。

「あれが原因なのか……？」

テトラと朝倉からはるか遠く、とある建物の屋上に、ギターケースを背負った、コート姿の美女が立っていた。褐色の肌に腰まで届く黒髪、１８０センチを超えるその背丈に抜群のプロポーション、灼眼の凛々しい顔つきは、およそ中学生の少女には見えない。

それを望遠レンズ越しに目撃した瞬間、彼女――龍宮真名は、反射的にケースからライフルを取り出していた。スコープの向こうでは、護衛対象であるテトラがその場を離れていき、級友の朝倉はぼんやりと考え事をしている。テトラからも朝倉からも、魔法的異常はほぼ見られない。前日――テトラがやってきたその日から感じていた、ごくわずかな違和感が残るのみであった。

（学園結界が強められたせいかとも思ったのだが。この眼が無ければ、目の当たりにしなければ、おそらく気付かなかっただろう。その点ではやはりこの依頼を受けて正解だったな。

……しかし、一体どうしたものか）

優れた傭兵として戦場に在る彼女は、違和感を決して放置せず、また疑問を疑問のまま棄ておくことは無い。過分なく思考すること、それが彼女に生を与えてきたし、これからもそうであろう。故に彼女は考える。テトラ・スプリングフィールドを一体どう扱うべきかと。

――彼、テトラ・スプリングフィールドが何かしらの魔法を行使した。おそらくその結果、朝倉の様子が変化した。想像するに思考操作に類する魔法だろう。重罪である。しかし、しかしである。立証されなければ罪にならない。そしてその魔法は、その条件を充分に満たしていた。一人の証言だけでは根拠に薄いのだ。

「――あれは、私のような存在でなければ見破れんだろうな」

魔法関係者であると言うことではもちろんない。それならば学園長が黙っていないことだろう。半魔族であることでもない。それだけならば同室の桜崎刹那も違和感に気付くはずだ。だが現状、実際に気が付いているのは、魔眼保持者たる自らであり、そして、おそらくではあったがパソコン専門店にいた長谷川千雨だろう。

「先天的な資質が関係している……？」

情報の不足している現状では、この議論は無意味かと結論し、脇道にそれた思考を元の問題――テトラ・スプリングフィールドの扱い――に戻そうとするが、それが出来ないことに気づかされる。

「――――情報、か」

ここ麻帆良において、表の情報屋を朝倉和美とするならば、裏の情報屋は龍宮真名だと言える。学園に超、過去に所属していた『四音階の組み鈴』等々多数のコネが存在している。魔法関係で何か調べようとすれば、機密Aランクだろうが――情報料の多寡はあるものの――何かしら耳に入るのだ。では、テトラ・スプリングフィールドについてはどうだったか。答えは、有用な情報はない、という条件付きの肯定であった。

名前、性別、年齢、出身、外見的特徴――これらの、学園から提示された情報程度しか手に入っておらず、本当にほしい情報、身体能力や魔法的技能といったものは、まったく知るところがなかった。

「ただの子供なら、それでもよかったのだが」

ただの子供――魔法的素養があったとしても、だ――ならばそれでも良かった。だが現実は違う。まだ１０歳にもならずして、生活基盤をほぼ完璧に整えられる子供が、何処の世界にいるだろうか？

観察し始めてからまだ一日も過ぎていないが、テトラは明らかに理性で動いている。それ故に恐ろしい。

彼女の頬を冷や汗がつたい、今ならば、という考えが脳裏に浮かぶ。どういうわけか彼は、身体強化の魔法さえ使っていない。障壁もおそらく張っていないのだろう。引き金に指をかける。そう今ならば――――。

「――っ。何を考えているんだ私は」

引き金から、力を入れかけていた指をひきはがす。

もしもテトラの目的を邪魔したならば、すぐさま敵対することになるだろう。そしてそれは、認識外からの不可知の一撃という、狙撃主たる自分が最もよく知る脅威を敵に回すことと同義なのだ。

「学園長（クライアント）に報告すべきか否か」

学園長からの依頼は、あくまで護衛であって、監視ではない。何もかもを報告する義務はないだろう。依頼料とこの件は、明らかに

釣り合わない。情報を売るということもできるが、テトラの持つ潜在的な脅威とを秤にかけるとやはり……。

「何はともあれ情報だな。……超鈴音に協力を乞うのが妥当なところか？　奴ならば、計画の脅威とみなすはずだ。――いや、あるいは既に知っているのか？」

依頼としてテトラを護衛しながら、彼女は冷徹に思考を紡ぐ。それがプロ（生き抜く者）の傭兵としての矜持なのだ。受けた依頼はやり遂げ、しかし次の瞬間に敵対することをも考慮する。マナ・アルカナであったころの生き方、久しく忘れていた、シビアな戦場のそれを、彼女は思い出していた。

「……緩んだか」

ふっと思い出したかのように笑みを浮かべる。麻帆良という場所は存外、自分にとって大きな要素になっていたらしい。そうして、どこか持て余していた感情に気がついた。何故テトラ・スプリングフィールドにこうまで脅威を感じるのか、その源泉は一体どこにあるのか。

「――『クラスメイト』に、魔法をかけられたから、か」

気がついてみれば簡単なことで、心は熱く、頭は冷静に、という言葉を無意識に体現していた。

害が感じられないとはいえ、自らの為に利用するその姿勢。傭兵としての自分は賛同しても、全体としての自分は――。

「ま、杞憂ならそれでいいんだが」

餡蜜好きに敵はいないからな、と見当違いな感想を添える自分に、笑みを色濃くする。

「いやまったく、緩んだものだ」

さて、どういった報告をしようか。――ああそういえば。

「女性不信かどうかのチェックもあったんだったな。朝倉の件は案外それか……？」

※

夕方、女子寮の自室に戻ったテトラは、自身の異能『嘘からでたまこと（ライズインザミラー）』に関する認識が甘かったことを嘆いていた。

「嘘からでたまこと（ライズインザミラー）には結構な弱点があるようですね。まあ攻撃魔法とセットで使えない、ということは知っていましたが」

朝倉和美という事例から、彼は様々な仮説を立て、能力の既知の部分とをすり合わせて整理する。

「効果は『ある』認識の否定。その場限りの範囲指定型と半永久的な対象指定型。但し否定される認識は、私が認識できて、かつ意図したもののみ。そのため朝倉和美という事例が生まれたのでしょうか」

朝倉から聞いた話では、彼女は『偶然撮ったっぽい』写真でテトラに関心を持ったということだった。その写真を見るまでは効果があったのだろうが、それからは彼女の関心の対象が変わったのだろう。

関心の根っこが『テトラ』から『自身』へと変化したのだ。すなわち『普段なら』テトラという格好の対象に飛びつく自分が、一体どうして見落としていたのだろうか、と。

「だからこそ、嘘からでたまこと（ライズインザミラー）を使わずに、認識操作の魔法を使ったのですが」

隠匿性はそれなりに落ちるんですよね、とテトラはため息を漏らす。

「自分自身への関心を否定してしまったら、廃人まっしぐらでしょうし、それ以前の問題として、魔力が足りる気がしないのですが。——ま、朝倉さんについては、良い勉強になった、ということにしておきましょう」

テトラは朝倉という事例に気付かされるまで、範囲指定型の場合における効果について勘違いしていたのだ。範囲指定型の場合でも、それまでは、以降、関心を持たれることはなかった。それはいわば、範囲内の人間に、冴えない第一印象を与えることで、記憶に値しない存在としてテトラを位置づけさせる、ということであった。

要するに、対象指定型が『強制的に』関心を否定するのに対し、範囲指定型は『自発的に』関心を否定してもらうのだ。この認識をしていなかったがために今回の出来事が起こってしまった。

「結局のところ、朝倉さんの好奇心が強すぎたということなのでしょうね。さすがと言えばさすがなのでしょう。何がさすがなのかは不明ですけど」

ひょっとしたら、今までも似たようなことがあったのかも。いやないといいなあ。頭が痛くなるような想像を、誰も居ないのに頬を掻いて誤魔化す。

「餡蜜でも食べましょう。今日は色々あってくたびれました」

今日一日をもう一度振り返る。うん、厄日だ。いやでもこれからは毎日こんなものなのか。忘れたい……。一抹の不安を抱くテトラ。

「そういえば、ちうたんっぽい人も見かけましたね」

パソコン専門店で見かけた、丸眼鏡の、冴えない女の子。組み合わせがあまりにもそれ過ぎたためにテトラは一目見て、即座にその場を離れたのだ。面倒が起きたら、という不安もあったが、一方で、もしも本物だったら、一ファンとして嬉しかったりする。

（多分気付かれなかったと思うんですけど……）

「今日は厄日ですしねえ。――あれ？　毎日厄日だって言ってる気がします……。まあいいです。さっさと餡蜜でも食べましょう。――ってゆーかまさか餡蜜関連で龍宮さんとか関係してきませんよね。超長距離からの狙撃、もとい監視なんてされてたりして……。いやまさか、うん……ないですよ、ね……。ないと、いいなあ……」

強いて言うならば、テトラが自身をテトラ・スプリングフィールドと認識してからずっと、厄日なのかもしれない。

「あ、この餡蜜おいしい」

おいしいはずの餡蜜に、しょっぱさを感じてしまうテトラであった。

第五話（後書き）

テトラさん、勘違いと厄日が進行中、の回。または朝倉さんと龍宮さんの回。

補足

女子寮について（一応原作1巻の第三話を念頭に入れましたが……）

朝倉さんとたつみーの設定。

その他学園都市の店等。

以上三点は捏造

そもそも第五話ではちゃっちゃと2－Aと顔合わせをさせる予定でしたが、冷静に考えると絶対に朝倉さんが何かするな、と思ったのでこうなりました。

たつみーに関しては、前話で人手不足と記述＋原作9巻第74話にて、「だが我が魔眼からは逃れられん」と言及されており、視ることに特化しているようなので出してみた。たつみーって不思議な魅力があるよね！

第六話

麻帆良学園都市の朝は早い。部活動や友人関係、バイトに勉学――哀しいかな、勉学に関しては殆ど見られないのだが――について異常なまでのモチベーションが滾る学園の生徒たちは、平日だろうと休日だろうと構うことなく行動してしまう。やる気に相応した能力を個々人が持っていることも、その事実に拍車をかけていた。必然的に、子供を監督する大人もある程度同調することとなる。学園都市は、学園都市であるが故に、生徒を中心に回るのだ。

「きょうもしまっていこー！」

日が昇り始めた頃合いにも関わらず、女子中等部のグラウンドにそんな声が響くのも無理からぬことなのだ。

「いやねーよもとい、あり得ませんって。早朝六時から出勤とか、労働法にどんだけケンカ売ってんですか。社畜ですかそうですか」

休日も明けて月曜、グラウンドから聞こえる声に突っ込みを入れながら、紺色スーツ姿のテトラは職員室の前にやって来ていた。ぶつぶつ呟きながらの初出勤である。引き戸の前で身だしなみを確認し、こほんと一つ咳をして自身の気だるげな雰囲気を改めたテトラは、コンコンと引き戸をノックし、からりと開けた。

「おはようございます」

室内では、少なくない数の教師が自分のデスクで何かしらの仕事を行っていたが、入室したテトラに対して視線を向ける。テトラが既に自らへの関心を否定しているためか、それに好奇は含まれてい

ない。あるのは、労りや優しさ、称賛である。

（……むずがゆいですね）

彼らは、テトラのことをただの新しい仕事仲間だと認識しているものの、しかし同時に、まだ年若い子供であるとも認識しているのだ。（子供が仕事仲間である異常性の認識は、テトラによって否定されている。）礼を失さない子供の姿は、元気過ぎる生徒たちとを彼らについつい対比させ、好感を抱かせるのに充分であった。

彼らのそんな好意を含んだ視線に、こそばゆさを感じるテトラは若干頬を赤らめる。ブロンドのポニーテールも柔かに光を返し、恥ずかしいとばかりに左右に揺れていた。そうして、自身の心もまた揺れていることにテトラは気付き、今は――そう、少なくとも今はダメなのだ、とそれを否定する。体から魔力が抜け、次の瞬間、ただ一人を残し、好意は全て霧消した。

私達は他人同士でただの仕事仲間。子供であることは考慮に値するが、しかしそれだけの関係なのだ――彼らの無機質な視線はそう言っているように思われた。

テトラは笑顔という無表情を作り、彼が唯一、視線に好意を宿させたままにしておいた女性、指導教員の元へ歩みを進める。

「おはようございます」

彼に彼女以外の視線が向けられることは既になく、彼の望みを妨げるものはない。にもかかわらず、心の湖はさざめくばかりだった。

テトラは背筋と膝をしっかりと伸ばし、腰を曲げることで、腰か

ら頭にかけて美しい一直線を生み出す。両手は揃える。きっちり４５度。マーヴェラス。誰が見てもそう言うだろう。その最敬礼は正しく最高の敬礼である。但し、女性の行う、という修飾語がつくのだが。

敬礼を向けられた相手――レディスーツを見事に着こなし、艶のある薄茶の髪を肩の辺りまで伸ばした、たれ目がちの女性――は、新米とはとても思えないテトラの姿に驚きを覚えたが、職員室に入ったときの、テトラの恥入ったような姿を思い出し、優しく微笑んだ。

「おはよう。――まだ眠いでしょうに、ごめんなさいね」

「――仕事ですから」

彼女の微笑に再び湖面がさざめくのを感じたテトラは、誰にともなく言い訳をしてしまう。――そう、仕事なのですから、と。

テトラが彼女の認識に対して何も行っていない理由は、彼女が魔法関係者ではないからでもあったが、最大の理由は――少なくとも彼が認識している限りにおいてではあるが――教えを乞う相手に対する不義理を嫌ったからであった。

教師をすることは仕方ないにしても、出来るとは思えない。それがテトラの本音である。彼はもちろん、自身が肉体年齢よりも長い期間の記憶を持っていることを理解している。では精神年齢はその期間に比例して育ったのか、と自問する時、はっきりノーと自答できるし、してしまう。

もちろん精神的な面だけではなく、書類仕事等の実務についても

教わる必要がある。その組織にはその組織なりの伝統なり方針なりが存在するのだ。それを知るのも組織人としての役割であろう。そのこともしっかり理解している。とはいえやはり、テトラは内心で自嘲するのだ。

（こんな私が他人を教え導く？　ちゃんちゃらおかしいです。まだ闇の福音（ダークエヴァンジェル）の方がマシってもんでしょうよ）

鈍い自虐の光をテトラの瞳に見た彼女は、明らかに困惑していた。まだ挨拶をしただけなのに、一体この子はどうしたのだろう。表情にはそんな感情が浮かんでいる。

しばし沈黙して考える内に、彼女はふと、昔に担当した女の子を思い出した。初めて受け持った生徒で、一風変わった女の子。自身すら信じきれない女の子。独りぼっちの女の子。今も昔も何もしてあげられなかった女の子。その姿が浮かびあがってきた瞬間、彼女は目の前の少年をちょっとだけ理解した。困惑から一転、悪戯っぽい笑みが彼女の表情に浮かんだ。

「それじゃ、初めてのお仕事です」

「何でしょうか」

真面目に問うテトラに、彼女は真面目に愉快にユーモラスたっぷりに返答した。

「――――笑いましょう」

「……は？」

テトラは柄にもなく、ぽかんと口を開けていた。恥も外聞もなく、ただただぽかんと口を開けていた。他人の前に出るときにつける、偽物の表情を崩していた、いや、崩されていた。魔法も使えない、ただの人間に、崩されてしまっていた。

「生徒っていうのはね、よくみているものよ」

彼女はそう言って、やはり優しく微笑んだ。

「ぶっちゃけた話、教師なんて安月給で残業も多くて心労も耐えなくて労働法なめてんのかコラーとか言いたくなるほど良いとこなんて少ないけどさ。少なくともこの学校の生徒たちは良い子たちばっかりで、わたしとは全然ちがうな—とか思うんだけど。————ああ、いや……ううん、だからこそ、かな」

彼女はそこで言葉を区切り、テトラにグラウンドを見るよう促した。窓の向こうでは、生徒達が一生懸命に練習している。サッカー、ソフトボール、ドッジボール、トラック競技……。思い思いに体を動かしている生徒達。誰もが我武者羅に、楽しそうに過ごしている。

「無知と無垢とはちがうって言われるでしょう？　彼女たちはちょっとばかりまっすぐすぎて、迷うってことを誰かから教わらなきゃいけなくって……。別に『先生』っていうのは優秀だってことじゃないのよ。ただ誰かの知らないことを知っていて、体得していて、体現している。それだけのことなんだから」

彼女は黙したままのテトラに向き直る。

「だからわたしなんかも『先生』で、あなたさえも『先生』で、そ

して彼女たちまでも『先生』なの。私たちが彼女たちに学ばせるんじゃなくて、私たちが私たちであることを、勝手に学ばれるだけ。それは私たちも彼女たちも、そしてあなたも変わったりはしない」

真摯な瞳にテトラはどきりとする。たとえ深淵が見返したとしても、けっして反らそうとしない、そんな力強い瞳。視線を絡めたまま、彼女は再びその言葉を口にした。

「――だから、心の底から、愉快に痛快に笑いましょう。あなたがあなたらしくあって、彼女たちが勝手に学べるように」

それがお仕事ってものよ、とウィンクして、彼女は再び悪戯っぽく笑った。

（……反則です）

ともすれば零れそうなそれを、テトラは瞼をぐっと閉じて堪え、反則です、と胸の中で叫んだ。この人は優れた人間であり、先生であり、そして何にも代えがたいそれを知っている、魔法使いなのだ。魔力なんて知ったことか。彼女は本当に素晴らしい魔法を知っており、使えるのだ。彼女はネギま！という漫画に登場したことのない、ただの人間だ。設定の中に埋もれた、ただの人間だ。けれどそれが一体何だっていうんだ。彼女は偉大な魔法使いだ。誰が知るわけでもなく、ただ自分は知った。彼女は偉大な魔法使いだ。彼は繰り返し叫んだ。それに比べて自分はどうか。何かを否定せずにはいられない自分は一体どうか。

悔しかった。ちっぽけな自分が。片方の皿に世界を載せた天秤を壊せない自分が。世界を変革するほどの力を持っていない自分が。――そして何より、それでも決定的な一歩を踏み出せない自分が、

悔しかった。

恐ろしくもあった。自分の存在が。変数としての存在意義が。この不安定な世界に生まれた自分が恐ろしくもあった。ひょっとすると自分のせいで、この偉大な魔法使いを失うかもしれない。その予想が、想定が、推定が、推測が、いつか確定される未来が、今は何よりも恐ろしかった。

す、とテトラの頬に何かが触れた。温もりだ。柔かな、小さな手。けれど子供の頬を覆うには十分なてのひら。はるか遠く、すでに摩耗しつつある記憶の中に、テトラはその温もりを見つけた。

「え……？」

重たい腕を必死で動かし、人差し指でそれを拭いながら、閉じていた瞼を持ち上げる。信じられないとでも言わんばかりにテトラは目を見開き、自分の指先をじっと見詰めた。

テトラにとって、涙は自分独りのものだった。誰にも見せたくなんてなかったし、見せてはならないと思っていたし、今だってそう思っている。涙はいつだって感情の発露で、吐露で、誰かの何かを変えてしまうものだから。

テトラの口から漏れた困惑に、彼女の指先がピクリと震え、頬を覆っていたてのひらが離れた。その事実に名残惜しさを感じてしまったことに思わず赤面し、次の瞬間にはこれ以上ないほどに真っ赤になる。抱きしめられていた。背中に両腕をまわされ、ぎゅっと抱きしめられていた。

テトラはどうにも彼女と顔を合わせられなくなり、うつむいてし

まう。最近、とみに伸びた前髪が、視界を隠す。今顔を合わせたら、羞恥で死んでしまう――そんなバカげた感想を抱いた彼の鼻孔を、香水の淡い匂いがくすぐり、背中は子供をあやす様にぽんぽんと叩かれる。疲労にも似た強い安心感がテトラを支配していた。心の隙間にじんわりと入り込んでくるそれは、蜜のようだった。

やはり彼女は魔女だ。テトラは思う。――それも飛びきりの。

少しの間、その温もりに身を任せ、そうしていつか、彼はほんのちょっとだけ、口端をあげていた。頬には涙の跡が残っている、そのぶきっちょな笑みは、お世辞にも良い表情とは言えなかったが、けれど彼女にとっては十分に美しく見えた。

新たな風が吹き、波は次第に大きくなる。湖面にはもはや、さざ波は存在しない。何も生まれはしないけれど、今まで水の届かなかった荒れ地を、彼女は少しだけ、潤わせていた。

未だ一歩を踏み出すこと出来ないけれど、テトラはその日、その時、その場所で、ほんのちょっとだけ成長した。

「さて、落着いた？」

「……その、すいませんでした」

耳まで真っ赤にしながら、テトラはうつむいてしまっていた。穴があったら入りたい。むしろ掘って入りたい。ただその一心であった。出会った当初からは考えられないその様子に、彼女は顔をほころばせる。

「はい、笑顔笑顔。そんなんじゃ彼氏出来ないぞー」

ピシリと動きが止まるテトラ。自覚はしているものの、こたえるものはこたえる。

「……私、少年です」

「……ええと？」

疑問符を浮かべる彼女に、テトラは補足する。

「おしべとめしべ的にはおしべです」

「両方とも表現古いわね。ね、養子にならない？」

「何でですかっ！？」

「逆光源氏計画的な？」

「結構です」

「あら残念」

振られちゃったわ、とわざとらしく口を尖らせる。

「――ま、そんな風にちゃんと生徒と話をしてくれれば、嬉しいかな」

「それは……」

「少しずつでいいから、ね？」

「……はい」

「さて、そんな先生見習いテトラの今日のお仕事は……」

「はい？」

「わたしの授業見学。
わたしの授業補佐。
そして、ホームルームの時間で２－Ａと顔合わせ。
の三本です」

「……え？」

「２－Ａはお祭り騒ぎしそうだから、ホームルームを利用することにしたのよ」

それじゃ、わたしは授業準備があるから、はいこれクラス名簿、と言い渡し、彼女はテトラを職員室から追い出した。

「少しずつ進むんでしょう？」

どうしたものかと懊悩しながら、テトラは２－Ａへと向かう。未来のことを考えると、関わる意志はしぼんで消えてしまうのだが……。

「どうしたものでしょう」

がんばりなさい、と別れ際に付け加えられた言葉を、ただただ彼は反芻する。

２－Ａに辿りつくころ、彼は結局、仮面をかぶり直すことに決めた、今では僅かにひびの入ってしまった仮面を、それと気づかずに取り付けた。

チャイムが鳴って、ドアを開ける。挟まれていた黒板消しが目の前に落ちるのと同時に、がんばりなさい、という言葉が脳裏をよぎる。

「ええほんとに」

――がんばりましょう。そう唱えたとき、仮面のひびからは僅かな笑みが覗いていた。

第六話（後書き）

テトラさん、矯正されるの回。

または、正直、あってもなくても……の回。

補足

指導教員としてオリキャラ。性格は原作の誰とも被ってないはず、たぶん。名前をつけると愛着がわきそうなので無名です。

校舎の構造（職員室とグラウンドの位置関係）

以上捏造

実験的にくどい表現の連発。どれだけ文章が重たくなるか、ということの検証。当たり前ですがくどくなりました。もう少しテンポよく、中身を広げたいものです。

次回の２－Ａ陣前に、会話を練習しておきたかったということもありますが、本当に日蔭者というか、無関心な人間というかダメ人間になりそうだったので。

第七話

その時の長谷川千雨の心境を一言で表せ、と問われればこれほど簡単な問いはないだろう。一言で済んでしまうのだから。

「ありえねー」

週も明けて月曜。教室にそっと入って来た彼女は、席に辿りつくと鞄を机に叩きつけた。荒々しく席をひき、どかっと腰を下ろす。机の下で足を組み、頭を抱えた。丸縁メガネの下ではまぶたをひくつかせ、口元は真一文字に結ばれている。一昨日から続くあまりの事態に、ついつい口の端から愚痴が漏れる。

「……ありえねえ」

彼女が言うところのお気楽ノー天気集団２－Ａは、今日も、いや今日はとりわけ教師見習いの件で騒がしく、彼女のぼやきを耳にしたものはほとんどいない。

例えばあるところでは、

「女の先生ならいいなあ……」

「のどか。安心するです。噂によるとあの副管理人らしいです」

「……副管理人？」

「ブロンドポニテの外人薄幸美少女！　うわさでは身売りに出されたとか……」

「み、みうり？　……きゅぅ」

「のどか！？　ってハルナ！　急にヘンなことは言わないでほしいです！！」

「ゆえも顔真っ赤にしちゃって～。そ・れ・に、急じゃなかったらいいのかな～？」

「そ、それは……」

「ま、うわさよ、う・わ・さ。真偽のほどは――――朝倉ー！」

「んー？　なになに～？」

また、あるところでは。

「強者だといいアル！」

「そうでござるなあ。面白い御人ならいいでござるが」

「実力者かはともかく、興味深くはあるネ。ああハカセ、準備はいいカ？」

「バッチリです、超さん」

「ん、その小さいのはなんでござるか？」

「ふふふ。こんなこともあろうかとつくっておいた、光、磁気、温度、音声、化学、その他あらゆる物理現象に反応するセンサーを内蔵する超小型カメラです！　原理は……（略）」

「なんのことかさっぱりアル」

「要するにとんでもセンサーネ。――ちなみに結構なお値段ヨ」

「……残念でござる」

「なんの話アル？」

「ま、古（クー）は肉まんでも食べるといいネ。今なら安くするヨ？」

更にあるところでは、

「……龍宮。彼女は本当に危険なのか？　お前の言う違和感など感じられないのだが……」

「さてね。少なくとも刹那にとっての危険性はないだろうがな」

「……お嬢様を害するようなことがあれば、私がこの手で――」

「ま、来ればわかるさ。――そうそう刹那、決めているところで悪いが」

「ん、なんだ？」

「彼は男だぞ」

「……え？」

またまたあるところでは、

「ちっ。この私が朝から学校とは……。タカミチのバカめ。おい茶々丸、ホームルームが終わったら屋上に行くぞ」

「はい、マスター」

「サウザンドマスターの息子には興味があるがな、何だって朝から……」

「ああ、マスター。血圧が……」

ちなみにある幽霊は、

「みえるといいな～。よし、がんばりましょう！　ふぬぬ……」

無駄に力んでいた。

そのすべてを長谷川千雨が聞き取ったわけではないが、誰もが異常と捉えていないことは理解して、一刻も早く寮の自室に戻り、ストレス解消（ストアイドル）をしたかった。一昨日、外人の美少女（ガキ）が寮の副管理人に来たのは諦めた。PC専門店で明らかに避けられたことには多少腹が立ったものの、ホームページに愚痴ったことでストレスはある程度解消した。

「にしたって、ガキが教師とかありえなさすぎるだろ……ん？」

視線を感じ、伏せていた顔をあげると、顔にペイントを塗った少

女、ザジ・レイニーデイと目があった。

「……」

黙って憐れまれている気がした。

（いったい私がなにしたってんだー！）

内心で叫ぶ千雨をしり目に、どんどん席が埋まっていく。誰も彼もが噂の教師見習いの話をしており、千雨のイライラは募るばかりである。新たにやって来た鳴滝姉妹と春日美空が悪戯（トラップ）をしかけ終わり、一人の少女を除く全員が登校したころ、ホームルームのチャイムが鳴った。御喋りは収まらず、未だにクラスは喧騒の中。

カラリとクラス前方のドアが開かれ、挟まれていた黒板消しが落ちる。足元のロープ、バケツ、横から飛んでくる矢をすんでのところで避けて教壇に立ち、口を開いた。

「テトラ・スプリングフィールドです。本日より数学の教師見習いとして麻帆良学園女子中等部にてお世話になります。まだまだ若輩者ですがどうかよろしくお願いいたします」

そうして、その時は来た。

「ありえねー」

まず千雨が毒づいたのは、テトラが少年であることに対してだった。ネットアイドルとして地位を確立している彼女は、どんな写真の加工も見破る自信があるし、何より容姿について造詣が深い。PC専門店では遠目だったためにわからなかったが、今観察すると、

見た目は凛々しい美少女だが、男であり、少年であった。自分の容姿には多少の自信を持つ千雨だが、これにはやはり嫉妬してしまう。

彼女が次にあり得ないと感じたことは、『子供が教師をする』という異常に対して、一瞬であっても、そういうこともあるかと納得してしまったことだった。麻帆良という異界にあって、外界の常識的な生活を切望する彼女にとって、それはあり得ないことだった。

そして最後に、とっておきの異常があった。このお祭り騒ぎが常のクラスが、目の前にくべられた焚き木を全く燃焼しないのだ。朝倉和美を始め、早乙女ハルナ、明石裕奈、運動部三人組、鳴滝姉妹、等などがバカ騒ぎしない。千雨にとってそれは甚だ不本意なのだが、見過ごすことはできようもない最大の異常だった。

「テトラさ……先生は、いったいどちらのご出身ですの？」

その発言をきっかけにして、ぼんやりとした朝倉の代わりに、委員長の雪広あやかが質問を重ねていく。出身、年齢、好きなもの、嫌いなもの。誰も性別を尋ねない事に千雨は一人、頭を痛めていた。ありえねえ、嗚呼ありえねえ、ありえねえ。それが千雨の心境であった。

そんな千雨に気がついたのか、テトラの視線と交差し、やはりすぐに反らされた。その瞳にあったのは――――。

「疑問と罪悪感？」

なんだそりゃあ、と小声で漏らす。知りもしない相手に抱くものじゃないだろうに。いったい何だってんだよ、まったく。そう思った千雨であったが、テトラがある空席に目をやった瞬間、みるみる

顔を青くさせていくのがわかった。

（……相坂の席だったか、ありゃあ。――はは、幽霊とか言うんじゃねーだろーな？）

誰も居ないところを見て、青ざめる少年。一度も登校してこない少女。空想するには十分で、けれどそんな馬鹿げた思考をする自分に対し、毒されたか、と内心で罵る。そんな折、一人の少女が教室に飛び込んできた。

「高畑先生！　遅れてすいませ……え？　あれ？　どーゆーこと？」

柑子色の長髪をツインテールにした少女、神楽坂明日菜は、数瞬遅れて現状を認識し、そして叫んだ、叫んでしまった。

「なんでアンタみたいなガキがここにいんのよ！」

※

ホームルームが終わった後の屋上に二つの姿があった。一つは綺麗な金髪を持つ、十歳程の少女。踏ん反りがえったように日陰に座っている。もう一つは、その少女につき従うように控えている、耳の部分がやけにメカメカしい、長身の少女である。二人の片割れ、絡繰　茶々丸は、屋上で優雅にサボりを決め込んでいるエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルの傍らで、自らの思考ルーチンをひ

たすらに点検していた。

彼女がテトラ・スプリングフィールドを見た瞬間に感じたのは違和感であった。それは彼女がガイノイド――平たく言えばロボット――であるが故のことだった。茶々丸はエヴァンジェリンをマスターとする従者であり、マスターの安全の為、他者を敵かどうか観察（警戒と言い換えてもいい）しようとするし、また、しなければならない。

故に彼女は解離する。既に宿りつつある魂の部分は、テトラ・スプリングフィールドへの関心を持たず、そうあるように設定された、ガイノイドとしてのプログラムの部分は、彼を観察するように命令する。思考ルーチンは矛盾せずに起動しているというのに、何度自己点検しても、そこには矛盾が存在していた。矛盾を理解するには、魂を自己認定するしかなかったが、まだそれが出来るほど彼女は成長していなかったのだ。

「……マスター。ハカセに後で点検していただきたいのですが」

「ん？　どうした、茶々丸。調子でも悪いのか？」

「いえ、それが……」

思考ルーチンが正常であると同時に異常である旨を自身のマスターに説明すると、エヴァンジェリンは嬉しそうに笑みを浮かべた。感情を未だ理解しきれていない茶々丸には、その笑みの意味がわからない。文脈からその意味を推測するしかない。

「……マスター。マスターに私はいらなかったのでしょうか」

「は？　いきなり何を言っているんだ？」

「はい。私が思考ルーチンに問題があると報告すると、マスターは笑みを浮かべました。ここには因果関係があると推測されます。したがってマスターは私に問題があることに対して笑みを浮かべたと考えられます。笑みとは通常、喜ばしいときに生じるとされているため、マスターは私に問題があることを喜んだ、と言うことになり、さらに言えば、私に問題が出来たことを喜んだと推定されます。従者契約をしている状態において、私に問題が発生することは、本来マスターの害にしかなりません。にもかかわらず、マスターは喜びました。これは矛盾ですが、契約が存在すること自体がマスターの害であると仮定するならば成立します。

以上のことから、私は、マスターが私を必要としておらず、私に問題が生じると同時に、契約を破棄しようと考えていたのではないか、そう思考しました」

茶々丸の返答にエヴァンジェリンは不愉快気に鼻を鳴らした。

「それで？　もし私が破棄したい、と言ったら、茶々丸はどうしたいんだ？」

「――それは……その、私はマスターの為に作られた存在ですから、それがマスターの意向ならば従います……ああ、マスター、またです。また……」

やれやれ、とエヴァンジェリンは首を振る。

「もし、と言ったろう。少なくとも契約を破棄したいと考えてなどいない。それは『悪の魔法使い』の矜持にも反するからな。何、も

う少し成長すれば、茶々丸もわかるようになる。何故私が笑みを浮かべたのかをな」

「マスター、私はガイノイドです。機能は拡張することも可能ですが、成長などいたしません」

その言葉を聞き、エヴァンジェリンは頬杖をついてしばし黙考した。

「感情を理解するのに必要なものが、何かわかるか？」

「はい。いいえ。わかりません」

「そうか。では一つの事例だ。先程の魔力も意気地もないテトラ・スプリングフィールドは、何故、神楽坂明日菜の言葉を受けて教室を出たのか、考えてみろ」

「はい。マスター。テトラ先生は、神楽坂さんが言葉を発する少し前から、脈拍は不安定になっていました。持病と言うことも考えられますが、それではわざわざ神楽坂さんに声をかけられてから飛び出した理由がつきません。それゆえ、テトラ先生は何かしらの不安を抱えていたものと考えられ――」

「何故、奴が不安を抱えていたと判断した？」

「はい。それは起動して以来の事例と照らし合わせたからです」

「事例収集、つまりは経験だな。経験を積む存在が成長できないはずがないだろう」

「はい。いいえ、マスター。それは比喩です。それはあくまでＡＩの機能拡張であって、厳密な成長とは言えません」

「比喩、比喩か。――だがな茶々丸、言葉とはそもそも比喩だろうに」

「しかしマスター、それは日常レベルの『言葉』に用いるべき議論ではないと考えます」

「そう、それだよ茶々丸。私はそれが喜ばしいのさ。茶々丸は何故、今、反論した？　従者は私（マスター）に従うべきなのだろう？」

「それは……」

「ま、しばらく考えることだ。時間もあることだしな」

「時間……ですか？」

「何、テトラ・スプリングフィールドはサウザンドマスターの息子とは思えない程薄弱だ。この忌まわしい呪いを解く足しにもならん。そもそもつまらん人間で関心も湧かんし、襲う価値もあるまい。予定は繰り下げてもう一人を狙うさ」

私はもう寝る、と言って、エヴァンジェリンは目を閉じる。秋風が吹き、彼女の金髪を僅かに揺らした。茶々丸はその様をぼんやりと眺めていた。と、エヴァンジェリンは思い出したかのように口を動かす。

「――茶々丸。何度でも言うが、私は契約を破棄するつもりはないからな」

だから安心しろ。そう付け加えた言葉に、茶々丸は思う。

「はい。マスター」

――成る程これが安心なのでしょうか。茶々丸は一つ、経験を積んだ。

※

テトラが去った教室では、いつも通りの喧騒が再開されていた。そんな中、ダブルシニヨンの少女は瞳を鋭く光らせている。そのすぐ傍には、ぼさぼさの髪を何とかおさげにしている、おでこの広い少女が立っていた。彼女はぱっとしない眼鏡をくいとあげ、シニヨンの少女に問いかけた。

「それにしても超さん。どうしてこんなものを記録したんですか？」

――あの件についてですか？　少女、葉加瀬聡美は心底不思議そうに尋ねた。

「関係がないわけでもないネ。ただ、今は判断するに足る情報が必要なのだヨ。ところでハカセ。ハカセは、この異常を感じていないのカ？」

「異常ですか？」

首を傾げる葉加瀬に、超鈴音は低い声を出した。

「ふむ。ハカセ、ハカセは自らの全存在を否定する人間が現れたら、当然、怒るはずヨ。少なくともショックは受けるはずネ」

「それはそうですね」

「その瞬間を目撃した人間も、当然そうネ。――しかし」

ようやく合点の行った葉加瀬は言葉を引き取る。

「――しかし、現状はそうではない、ということですか」

頷いた超はクラスメイトの様子をそれとなく観察する。龍宮真名からは既に報告を受けていたため、今は除外し、その他のクラスメイトを順に視線を見ていく。特に気にした風もないもの、僅かに気まずそうにしているもの、体を震わせている長谷川千雨、近衛木乃香に説教を受けている神楽坂明日菜……。

（気付いているのは、数人だけカ。とりわけ動揺しているのは、神楽坂明日菜カ）

当然と言えば当然だがネ、と超は呟いた。

「いったいどんな理論なのでしょうか」

「まず、認識操作のそれと仮定していいネ」

その単語を耳にした葉加瀬は顔をしかめる。

「認識系ですか……。他のそれなら未知のエネルギーが物理現象に変換されているだけと考えればいいんですが認識系はいやそもそも認識は脳の電気信号の……未だ定説化される程の仮説すらできていませんし……そもそも臨床実験によるものでしか……科学的なアプローチが未発達ともいえる分野……雑誌にも統計的問題を抱えるであろう推論が載るくらい……いやしかし……」

ぶつぶつ呟き始めた葉加瀬を横目に、超は観察をやめ、席に戻る。麻帆良の最強頭脳と称されている彼女は計画の修正草案をまとめていた。テトラ・スプリングフィールドが持つと推定される能力、それを勘定に入れた上でどの程度計画に影響が出るか、あるいは、支障をきたさない為には何が出来るのか。テトラを変数とした上で予想される結果を、枝葉に至るまで想定し続ける。

シミュレーションを重ねるうちに、ふと言葉が漏れた。

「――何も出来なかった人間と、何もしなかった人間カ」

これは――になるかもネ。

超の心境など構うことなく、一限の始まりを知らせる鐘が大きく鳴り響く。

（想定内と想定外、どちらが喜ばしいカ）

震える空気のなか、超鈴音はただ思考を巡らせるのみであった。

第七話（後書き）

彼女らはどう思ったか、の回。

補足

焦点を当てたキャラ毎に、均等な分量を書きたかった。
超さんはとりわけ好きなキャラですが妙に書きにくい……。登場人物が書き手の頭脳を超えるわけがないということなのでしょう。

次回は、テトラさん、上がった後下がるの回。

相変わらず亀展開で申し訳ありません。

第八話（前書き）

序盤は多少表現を和らげたものの、食事時にふさわしくはありません。お食事中の方はどうぞお気をつけください。

第八話

「……うう……」

男子教員用のトイレに低いうなり声が木霊していた。一限が始まる直前の為か、人影はない。時折、苦しそうな咳も混ざり、びしゃりと水がぶちまけられるような音が響き渡る。その源は、唯一使用されている隅の個室であった。教室を飛び出したテトラは洋式トイレの前に膝をつき、手を口元に当てている。血色の悪い顔に憔悴した瞳、喉からせりあがる苦悶の呻き声。寒気に震える身体が落着くことはない。荒波に襲われる心。――がんばりましょう。少しでも考えた瞬間が今では懐かしく感じられ、どこか遠く、地平線の彼方へと沈んだように思われた。

「アリは、ナメクジは、カタツムリは、どうやって善行を積めばいいのでしょう」

自身が汚らわしかった。知らなければ、あるいはせめて視えなければよかったのに。そんなことを願ってしまう自分が途方もなく醜悪で、そして何より、見捨てなければならないという事実が酷く情けなかった。異常を異常と認識する長谷川千雨に、幽霊であるがために認知されない相坂さよ。それがテトラの罪悪感を痛烈に刺激していた。

テトラは、例え自身がそうさせるものであったとしても、他者からの否定について知り過ぎるほどに知っている。自身が認知されず、さらには存在自体を認識されないということを体験してきた。しかし、縋るところがあるだけ――信じて縋れるところがあるだけ、まだマシだった。

だが彼女らにはそれがない。理由もわからず否定される日々が、望みも叶わず認識されない日々が八ヶ月、ネギ・スプリングフィールドが彼らを救うまで、まだ八ヶ月も続くのだ。それまでの人生の何分の一とはいえ、テトラでさえ、先程まで経験したことのなかった辛苦が繰り返されるのだ。

不機嫌そうな瞳を、もしかしたらという希望を宿した瞳を見た瞬間に、テトラは叫びたかった。あなたの感性は普通なのだと、あなたはそこにいるのだと、声を張り上げて主張したかった。

――けれど出来ない。出来っこないのだ。

う、と嗚咽が洩れた。潤い始めていた土壌が再び乾き、空っぽになっていく。この感覚が更にテトラを追い詰めていた。楽観し、あまつさえ期待していたことがどうしようもなく滑稽だった。まるで喜劇のようで、戦場のようだった。一人で抱く覚悟には重みがないことは、あの場所で嫌になるほど見てきたというのに理解していなかった。あるいは、自身にとっての戦場が、この麻帆良であることを感情に入れていなかった。ろくすっぽ訓練もされていない新兵よろしく、ただ時が過ぎるのを待つしかなかった。そしてそれは許されなかった。

「……どうして、私は、ここにいるのでしょう？」

神楽坂明日菜の言葉自体は特段、テトラを揺さぶることはなかった。彼女の敬愛する高畑がおらず、代わりに見知らぬ――それもぱっと見ではほぼ同年代の――子供が教壇に立っていたのだ。混乱の末、思わず口をついた言葉だろうことは容易に想像できる。仕方のないことだと理性は納得し、むしろ、神楽坂明日菜に対して自身の

異能が効いていないという事態に警鐘を鳴らしていた。しかし結果として、テトラは逃げ出さざるを得なかった。それは何故か？

「――ネカネさん……」

神楽坂明日菜の面立ちが、ネカネ・スプリングフィールドを連想させてしまった。テトラは明日菜に、ネカネを幻視してしまったのだ。テトラが率直に望んでいたことではないものの、何時も、どんな時も見守ってくれていた。テトラの罪など気にしない、その美しい笑み。魔法発動体の空色のシュシュをわざわざ手作りしてくれた彼女。気付かぬうちに、どれだけ救われていたことか。

――なんでアンタみたいなガキがここにいんのよ！

けれど、その裏ではどう思っていたのだろう？　眼前では、音もなく忍びよった蛇が鎌首をもたげていた。今や目をそらすこともできず、飲み込まれるのを待つだけのようで、いっそ自ら飛びこんでしまいたかった。

テトラは再び呻き声をあげる。

テトラは今日になってようやく、否定される恐怖を経験したのだ。否定させるのではなく、否定される恐ろしさ。そんなものを味わうのなら、自分から徹底的に――。

「――――でも、信じたいんですよ」

深く息を吸うと、芳香剤のにおいが鼻につき、つんとした。溢れそうなのはきっと芳香剤のせいだと必死で言い訳し、熱くなった目頭を押さえる。

なんて自分勝手で不合理。全く馬鹿馬鹿しく、道化のようで、おこがましいにも程があった。けれど、それでも信じたいのだ。約束してしまったのだから、少しずつでも進むのだと。示したのだから、頑張ろうと。

「ほんと、くそったれの甘ったれです」

テトラは口をつり上げ、自らを嘲った。今朝出会ったばかりの彼女にこうも依存しつつある自分がみじめで、忌々しかった。頬を覆った手の柔かさと抱擁の温もりを思い返すうち、いつの間にか体の震えが止まっていた。愉快に痛快に笑いましょう、と彼女は言った。そうだ。今は無理やりにでも笑うのだ。

口元を拭って、トイレの水を流す。酸っぱい臭いがほんの少しだけ和らいだ。手洗い場で口をゆすぎ手をあらう。鏡には、こわばった笑顔を浮かべた自分が映っていた。目元は赤くなっている。これは彼女に何か言われるかな、とテトラは思った。

携帯で時間を確認すると、もうすぐ一限が始まる。早く職員室に戻らなければ。

「だってそれが仕事なんですから」

職員室に向かう途中、ふと洩れる、いつもの口癖。

「私はここにいる／いらない」

けれどそれはいつもと少しだけ異なっていて、上滑りすることなく、舌の上を転がり続けた。

その夜、夕食を終えたテトラの部屋に来訪者があった。誰でしょう、と薄暗い部屋の中、テトラはノックの音にいぶかしむ。彼がそう望むこともあり、彼の部屋を訪れる者はほとんどいない。せいぜいが寮の管理人くらいで、それでさえもお使いのような雑用を頼まれる程度である。

いったい何なのでしょう。テトラは疑問に思いながらも、のろのろと腰を上げて扉へ向かう。その途中、最初はコンコンと控え目だった音が心持ち強くなった。インターホンを使えばいいでしょうに、いやはやいったい何なのでしょう。テトラは更に疑念を深めながら、ノブに手をかけた。と、ノックが途絶え、扉の向こうから話声が聞こえた。

「……このか～。いないみたいだしやっぱり明日に……」

「あかんよアスナ。早うあやまらんと」

何となく扉の外の光景を想像できたテトラは、思わず苦笑してしまう。彼女らに対して、想像した光景に笑みを浮かべかけた自分に対して。謝りに来てくれたことに安堵している自分がいて……。首を振って否定すると、意を決してノブを回し、扉を開けた。

気まずそうな顔を浮かべた、橙髪ツインテールにオッドアイの少女。テトラは年齢の割には身長が高いものの、少し顔をあげなければそれを窺い知ることは出来ない。目が合うといよいよばつが悪そうに目をそらされたが、隣に立っている、髪を長く伸ばした――場違いなことにテトラはこの時、烏の濡羽色とはこういうことですか

などと考えていた――柔和な微笑みを湛えた少女がそれを諌めた。

内心でため息をつき、神楽坂明日菜さんに近衛木乃香さん、どういった御用ですかとテトラが尋ねると、木乃香は、もう名前覚えたんやね、えらいな～と感心した表情を浮かべる。仕事ですからと不満げに返答するテトラを見た木乃香は、言った通りやん、と明日菜の脇腹を肘で楽しげにつついた。明日菜はやはり気まずげに、先程反らした視線を決心したようにテトラの瞳に戻すと、ややあってその重い口を開いた。

「……今朝は、その、悪かったわね、ごめん。――――――って何笑ってんのよ！」

僅かに耳を赤くする明日菜の様子にテトラはついつい口元を緩めていた。照れ隠しに怒る目の前の少女が、愛だの恋だのは関係なく、可愛らしく思え、更に目を細めてしまう。――私はここにいる。要するかどうかはわからなかったけれど、そうテトラは感じた。

がんばりましょう、とテトラは今日何度目かになる言葉を思い浮かべた。直接的な深入りは出来ないけれど、せめて、きちんと真面目に授業をしましょう。長谷川さんにも、もう何十年も授業を受けている相坂さんにとっても、もちろん他の生徒にとってもｉｎｔｅｒｅｓｔｉｎｇな授業にしましょう。少しはマシな生活を送れるように、きっとそれが、関われない自分の、精一杯の妥協点なのでしょうから。テトラはそう決意し、無意識に笑みの表情を濃くしていた。悩みは深く、未だ先は見えないけれど、僅かに陽が差し込んだような気がした。

笑みの意味を勘違いした明日菜はまたテトラに詰め寄る。そんな明日菜を見て、ああそうだ、とテトラは思う。

（ついでに数学だけはバカレンジャー、解散させましょうか）

この時テトラは、自分が愉快に痛快に笑っていることがわかった。

そんな二人の様子を、一人離れて見ていた木乃香は、テトラの笑顔を見て、かわえーなーと呑気に呟いていた。表情には安堵が浮かんでいる。よかったなーと彼女は更に呟いた。それが明日菜に対してか、テトラに対してかは当人にしか分からない。けれどその表情は、やはり綺麗な笑顔で、少なくともこの瞬間、彼らはとても楽しげなように見えた。

「だから笑うなって言ってんでしょー！」

一人を除いて。

次の日からテトラは精力的に学び始めた。講師として必要なこと、次に教師として必要なことを意欲的にさらった。良い表情（かお）になったわねー、養子にならない？　とは指導教員の談。冗談ですね、とはそれに対するテトラの談である。

中間テストが終わった後もそれは変わらない。予定では、テスト後から少しずつ授業を受け持つことになっていたが、学園長に掛け合って、何とか今学期中の猶予を確保した。というのも、テトラにとって腹立たしくも嬉しいことに（そして信じられないことに）、指導教員の彼女は何とも魅力的な授業を行っていた。

個々人のレベルできちんと指導することはもちろん、さくっと指

導要領分を終わらせて雑談を始めたりもする。ニュートン先生マジぱねぇっすという話から、アルクインっつー人によれば8が不完全な数だから、世界は不完全なんだとーだとか、みんな安心しろー、ユートピアでは方程式なんて誰もわかんないからーだとかそんな雑談だ。通じる人は苦笑し、わからなくともどこか引きこまれる語り口。哀しいことに、２－Ａの授業では雑談の時間がなかなか取れないのだが。

そういうこともあって、今は学べるだけ学ぶ時だった。朝となく昼となく、思っていた以上に面白い数学の世界に浸り、偉人に対してどんだけ変人なんですかと突っ込んだりしていた。夜になってからはそれに拍車がかかる。妙に気分が高揚し、数秘術だりなんだりと、とにかく何かに手を出していた。ある時には、いつの間にか満月の下に立ちつくしていたこともあった。そんな時は大抵、激しい眠気に襲われてぐっすり眠れるのだが。

そうして、麻帆良にやってきてから2ヶ月が経った。テトラは夜、自室で筆を取っていた。窓の外では雪が降っており、風が冷たい音を奏でている。来週の今日は丁度クリスマス。そろそろ手紙を送ろうか。テトラはそう考えていた。

「……一人暮らしのお礼もまだでしたしね」

緩んだ、とは自分でも思う。今でももちろんたくさんの認識を否定してはいるものの、その中できちんと出来ることはやろうと決めたのだ。――だからきちんとネカネにも、ネカネに対する罪悪にも目を向けなければならないのだ。

何と書いたものかと思案しながら、少しずつ筆を進めていく。書いては消し、書いては消しを繰り返しようやく書き終えたころには

既に１１時を過ぎていた。明日も早いというのに、何をやっているのだか、とほんの少し笑みを作り、ひんやりと冷たいベッドに寝っ転がる。目を閉じると、頑張りましょうと一つ呟いて彼はまどろみに意識を放すのであった。

明日は満月。窓から差し込む月光がテーブル上の手紙を照らし出していた。

ネカネ・スプリングフィールド様。

早いものでもうすぐ年の瀬。毎日あわただしくお過ごしのことと思います。

こちらは特に何事もなく、穏やかな日々を過ごしております。指導教員の方から毎日学んではおりますが。

さて、一人暮らしの件について、こんな私の為に力を尽くしていただき、ありがとうございます。おかげ様で、頂いたシュシュを使用することもなく、日々、安穏としております。

来週はクリスマスです。日本でも華やかに行われるようでたくさんの生徒達が楽しそうに準備を始めております。とはいえ、私は指導教員の方に付き合わされるのですが、それもお仕事なのだそうです。

残念ながらそちらにプレゼントを送ることはできませんが、兄やアーニャとどうぞ楽しいクリスマスをお過ごしください。

何かと気忙しい毎日ですが、健康にはくれぐれもご留意ください。

では。

Ｔｅｔｒａ　Ｓｐｒｉｎｇｆｉｅｌｄ

しんと静まりかえった部屋の中に、ひゅうと吹き込む隙間風。テトラは気付くことなく、穏やかな寝息を立てていた。

第八話（後書き）

テトラさん、上がった後下がって、また上がるの回。もしくは時間飛ばしの回。

補足は特になし。

第九話（前書き）

今話から『残酷描写あり』を追加いたしました。とはいえ大したことはありませんが。

第九話

勤務を終えて昨日書いた手紙を投函したころには既に夕闇が到来し、頭上には満月が光を放っていた。そんな中、帰宅の途につくテトラは暗い夜道を進む。石畳には雪が薄く積もっており、足跡が残されていく。コートを羽織ってはいるものの、寒さに身を震わせながら白い息を吐くテトラであったが、誰かが張ったのであろう人払いの結界に自身が近づいているのを感じて足を止めた。

宵闇の頃合いには時たま結界が張られている。人払いや認識阻害が主だったが、麻帆良に来て以来何度も感覚に引っかかっていたため、入りこまないように注意していたし、結界が張られる時間帯――逢魔が時から宵闇にかけての時間帯に出歩くことをテトラは控えていた。そのため結界が存在すること自体は特段珍しいことではなかった。

結界を迂回するように道を変えてしばらく進むが、再び結界に出くわしてしまった。またかと僅かに苛立つテトラ。指導教員の彼女はせっついていないが、そろそろ来学期の授業計画を提出せねばならないために早く自室に戻って作業を始めたかったのだ。テトラは心持ち早足で結界から離れる。

その後も幾度か結界に邪魔をされて帰宅することは叶わなかったが、結界が流石に多すぎることに疑問を覚える。妙に苛々して気付くのが遅れたが、まだ住宅街ではあるものの人気はなくなり、もう少しで山際というところまで来ていた。ある可能性がテトラの脳裏に浮かぶ。もし自分が結界を迂回するように移動することを知られていたのなら、それを利用することで行動を制限できるのではないか。

つまり――。

薄い皮膜を突き破る感覚。身をよじりながら咄嗟に障壁を張るが間に合わず、左肩からは血飛沫（ちしぶき）。

（……誘導、ですか）

必死で痛みを堪え、髪を結えるシュシュに魔力を通して認識阻害と身体強化を自身にかけながら山の中に飛び込む。その間にも魔法の矢は音を立てて飛来してくるが一瞥する余裕もなかった。

林に身を隠すと弾幕は一旦止んだ。テトラは少しばかり安堵し、辺りに気を配りながら肩の傷を検分する。幸いなことに魔法による傷としては浅い、治癒可能な裂傷であった。

「プセマ・アリスィア・スィンヴァン、汝が為にユピテル王の恩寵あれ。治癒（クーラ）」

淡い光が肩を包むと何事もなかったかのように傷は消えたが体外に流れ出た血までは戻らず、左腕に若干の違和が残る。左手を握ったり開いたりを繰り返して感覚のずれを把握し終えると、思考を切り替えて探査魔法を行使する。同心円状に薄く広がる感覚網に、飛来する一条の矢が検知された。

その場を離れると同時、射線上の木々が轟音を立てて引き裂かれ、かと思うとすぐさま二の矢が飛んでくる。一つ所に留まることを許されず、テトラはひたすら避け続けた。次第に息は荒くなり、動きも鈍くなっていく。状況は悪化の一途を辿る一方だった。

（手詰まり、とはこのことを言うのでしょうね）

「プセマ・アリスィア・スィンヴァン、光の精霊３７柱。集い来りて敵を射て。魔法の射手・連弾・光の３７矢」

威嚇射撃は出来るものの正確な反撃は出来ない。攻撃の方向から住宅街に敵が潜んでいることは間違いがなく、まさかそこに広域殲滅呪文を打ち込むわけにもいかない。それ以前の問題として嘘から（ライズ）でたまこと（インザミラー）との為に魔力を消費しているため魔力が全く足りていない。接近しようにも、弾幕を耐える、あるいは掻い潜ることは出来ず、仮に出来たとして、戦場の空気は知っているものの戦闘経験の少ない上、武芸の師となる存在もいないテトラには格闘など土台無理というものであった。そしてそもそも、テトラにとっては害すること自体が不可能と同等である。

（何より、威嚇ならまだしも敵を害そうとすれば、嘘からでたまこと（ライズインザミラー）が解除される公算が大きい。――命に比べればマシかもしれませんが）

逃げることもできない。転移魔法符は持ち合わせておらず、自力で転移するには時間が足りない。発動までにハチの巣と化すだろう。瞬動術を使おうにも『抜き』の僅かな硬直を狙い撃たれる。敵はそれだけの力量を持つと考えた方がいい。

それ故に応援が来るまで耐えるしかない。戦闘前に張られていた結界の数からしてまだ時間がかかるだろうが、それでも救いの手を待つ選択肢しかなかった。

「――ッ」

とうとう矢がかすり、コートが破れた。初歩の障壁魔法など何の意味も持たず貫通される。はっはっと荒い息が漏れ、今更ながらに恐怖が纏わりつく。殺意に身を焦がされて叫び声をあげていた。――私はここにいる！　悲鳴のような喜びが心の中で産声をあげていた。

戸惑いがテトラに生まれた。死に臨する喜びを理解できなかった。死にたくないと心の底から望んでいたはずなのにいったいどうして。その思考が僅かにテトラの足を竦ませ、敵はその機を逃さない。放たれたそれは過たずテトラに吸い込まれる。殺到する致死性の矢。テトラは後方に飛び退るには遅いと判断し、数瞬後の死を幻視した。死ぬんだろうなと他人事のように考えていた。

「風花（フランス・パリアエ以アーリス）・風障壁」

しかしテトラは必死で口を動かし、『風楯（デフレクシオー）』よりも強力な障壁を発生させる。一瞬しか効果はないがその一瞬があれば十分だった。飛来する矢の半分を打ち消し、その幾ばくかの間に飛び退って後続の矢から逃れる。

（馬鹿ですか、私は。諦めるにはあまりに遅すぎますよ）

その表情に浮かぶのは笑み。動きからは精彩が欠けているものの未だワルツは終わらない。避けて避けて避け続け、魔法（サギタ・マギカ）の矢で迎え撃ち、寸でのところで障壁を発生させる。動悸は激しくなり、髪は汗でべたつく。高揚感から全身の気だるさはなくなった。

テトラは崖の縁で踊り続ける。失敗のお詫びは自分の命。ＢＧＭは矢々の風切り音に、林の崩れる轟音。観客は狙撃主たる敵のみ。永遠とも思われる上演時間は、けれど唐突に終わりを迎える。

ふと弾幕が止んだが、テトラは気を緩めない。周囲には既に遮蔽物は無く、彼方からは高まる魔力が感じられ、次の瞬間膨大な爆発が迫る。先程までの矢とは比べ物にもならないその威力。体力も使用可能な魔力も底を尽きかけているテトラには打つ手がなかった。

死にたくはなかった。けれど奇妙なことに満足感が心を満たしていた。自らに課した矜持の中で精一杯に努力したという事実が喜びを与え、あまつさえ、生きる努力を続けようと思考を促していた。だからテトラはただ受け止め、努めて冷静に呟くだけだった。これは無理ですね、と。

そうして目の前に、

「氷神（マレウス・アクィローニス）の戦鎚」

巨大な氷塊が出現した。吹き荒れる炎でそれは溶けていくが、その陰に隠れたテトラは無事であった。テトラは突如現れた金髪の少女の背中をぼんやりと見つめている。麻帆良学園の制服を着た少女は不機嫌そうに何ごとか呟くと、やをら振り返った。

「よかったなテトラ・スプリングフィールド。敵さんはタカミチに捕まったそうだ」

不愉快気に髪をかきあげる少女を見つめながら、テトラは改めて異常を否定する。ゆっくりと近づいて少女の手をとった。

「マクダウェルさん、わざわざありがとうございます」

もう片方の手もとって、がっしりと握ると、血がぽたりと落ちた。

「今宵は満月。ガキのお守をする程度には気分がよかっただけだ」

エヴァンジェリンは足元の血だまりを気にすることなく、鼻を鳴らす。

「まったく、貴様のせいで貴重な魔法薬を使いきったがな」

テトラはしばし考え込んでいたが、やがて「血なら好きにしてください」と呟いた。エヴァンジェリンは「知っているのか？」と首を傾げた。驚いたような顔をされたので、テトラの方も驚いてしまう。

「マクダウェルさんが闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）だということでしたら、知っていました。――有名ですから」

「それなら遠慮はいらんな」とエヴァンジェリンは口を吊り上げ、「ええどうぞ」とテトラは投げやりに応える。エヴァンジェリンはそのテトラの様子に眉根を寄せた。

「恐ろしくは無いのか？」

「封印されているみたいですから。――だから」

「だから何だ」

だから――何でしたっけ？　テトラは問いに答えることが出来ず、首を振る。エヴァンジェリンはちっと舌を鳴らして言葉を続ける。

「まあいい。貴様の父親、サウザンドマスターのかけた馬鹿げた呪

いでな、十五年も中学生をやらされているのさ。貴様が来てようやく呪いが解けると思ったら大したことのない意気地なしと来た」

わなわなと肩を震わせるエヴァンジェリンに、テトラはただ謝ることしかできず、底冷えするようなエヴァンジェリンの呪詛は留まることを知らない。エヴァンジェリンがひと通り言い終え、息を吐いたところでテトラはぎゅっと手を握り締める。ぽたりぽたりと血が流れた。

「そういえば、絡繰さんはいらっしゃらないのですか？」

「茶々丸か？　茶々丸はタカミチの援護に行ったはずだ。そろそろ来るはずだが」

それがどうしたのか、と訝しむエヴァンジェリンにテトラは曖昧に頷いた。

「まあいい。――さて。貴様はいったいいつまで手を握っているつもりだ？」

テトラはにこりと嗤って口を開く。

「そうですね。それでは次は」

その言葉が最後まで発されることは無かった。

「マスター！」

その場に悲痛な叫びが響くのと同時にテトラは背中に強烈な衝撃を受け、地べたに吹き飛ばされた。

「ああ、マスター。腕が……腕が……」

「どうした茶々丸。腕ならほれ、そこにあるだろう」

「マスター。いったい何をおっしゃって……」

テトラを蹴り飛ばした少女、絡繰茶々丸は主人の様子にただ困惑していた。両腕がないというのにそれを当然としているエヴァンジェリンが全く理解できなかった。きっとテトラを睨みつける。

「テトラ先生！　あなたはいったい何を……」

したのですか、と茶々丸は続けることが出来なかった。エヴァンジェリンの両腕を呆然と見つめているテトラがただならぬ様子であることを察したのだ。

この時、テトラは自分がいったい何をしているのかわからなかった。どうして自分がエヴァンジェリンの腕を持っているのか。どうしてその事に何も感じていないのか。更には『だから』今なら壊すことができると思ってさえいるのか。壊して当然とさえ思っているのか。そこまで考えてようやく認識が現実に追いついた。自分がエヴァンジェリンを『害した』という事実を今になって認識し、意志となった。その瞬間、嘘からでたまことは解除された。

久しく――それこそ異能に気付いて以来――食われていた魔力リソースが満たされていく。魔力負荷が（結果的に）かかっていた為か、兄であるネギよりも魔力は成長しており、戦闘で困憊していた体に力が戻ってくる。けれど精神は追いつかない。抱えている腕をまんじりと眺め続ける。

「貴様、何故私の腕を……」

その声の方に目をやると、腕がないことに気付いたエヴァンジェリンが苦しげに呻いていた。テトラの瞳に暗い感情が宿った。冬・夜・傷・血だまり・炎・呻き声・いるべき人。フラッシュバック。あの日あの時あの場所。

――ボクはここにいていい？

あ、と意味のない声が漏れた。あは、と意味のない笑みがこぼれた。そのまま足をずるずると引きずって、幽鬼のようにエヴァンジェリンへ近づいていく。ぐったりとした様子に笑みが色濃くなる。――ああ、今なら簡単に。

「――先生！　早く！」

茶々丸の声にはっとし、自分の正気以外の認識を否定しようとする。けれどわからない。正気とは何か、狂気とは何か。今のテトラからは基準がどこかへ行ってしまっていた。罪・罰・害意・殺意・恐怖・……。そのすべてが正気のようで、狂気のようだった。

先生、という呼びかけだけが今は頼りだった。否定して否定して否定して否定して何度も否定して削ぎ落とした末に心を形作る。エヴァンジェリンの両腕を元の位置にあてがい、震える声で呪文を唱え続けた。

「プセマ・アリスィア・スィンヴァン、汝が為にユピテル王の恩寵あれ。治癒（クーラ）。プセマ・アリスィア・スィンヴァン、汝が為にユピテル王の恩寵あれ。治癒（クーラ）。プセマ・アリスィア・スィンヴァン、汝が

為にユピテル王の恩寵あれ。治癒（クーラ）。……」

声を振り絞ってぶつぶつと。

第九話（後書き）

テトラさん、襲われましたの回。もしくはエヴァさん不憫の回。

補足

テトラの障壁については障壁発生位置の更に外側に検知魔法があるという設定。薄い皮膜～の部分が検知魔法です。なのはに出てくるオートガードのイメージです。

狙撃主は異能の範囲外にいるため影響を受けていない。

プセマ・アリスィア・スィンヴァン＝テトラの始動キー

テトラの異能の制限については『対象』への『害意』がキー。

例えば、

威嚇射撃は敵を傷つけないで引いてもらうことが目的だから可。

相殺は身を守ることのみを目的とするから可。

害意以前の問題として傷つけるとさえ感じない対象へも可。

（今まで食べたパンを数えたことがありますか、のようなもの）

第二話の演習においては『標的という対象』への束縛という『害意』が存在がするから不可。

等々。曖昧ですがこんな感じです。いずれにせよ、害意をテトラが認識していることかどうかが大事。

エヴァさんが封印状態で氷神の戦鎚を使っていますが、魔法薬の補助ありなら可能ということにいたしました。流石に武装解除しか使えないのはなあ、ということです。

第十話（前書き）

あまりに唐突だった前話の裏側。

第十話

時刻は零時を回る頃、深夜の学園長室。月光を背にした近衛近右衛門は、あまりの異常事態に頭を抱えていた。テトラが襲われたこと、それ自体は然程問題ではない。

近右衛門は関東魔法協会の長であると同時に、一教育機関の長でもある。近右衛門はテトラが教師として、人間として成長していることを日々実感し、勤勉に学ぶテトラに満足していた。例え魔法使いとしての目に見えた成長は見られなくとも、それはそれでいいと思っていた。しかしそれは近右衛門にとってのこと。当然、それだけでは飽き足らないものも存在する。

『約定ヲ違エルベカラズ』と、本国であるメガロメセンブリアから最初の通達があったのは十二月に入ってすぐのことだった。一向に情報が入ってこない事態に痺れを切らしたメガロメセンブリアは、英雄の息子を麻帆良に引き取るための約定、すなわち『ネギ・スプリングフィールドの来日までにテトラ・スプリングフィールドを魔法使いとして成長させること』を引き合いに出してきた。

別に近右衛門は約定を忘れていたわけではない。仕事として責務は果たそうとしていた。ただテトラがあまりにも近右衛門の策に引っかからなかっただけのことである。近右衛門は、テトラに『誤って』結界に足を踏み入れさせ、『偶然』魔法に関係させようとしていた。これは近右衛門の茶目っ気によるところもあるが、危機に直面した時こそ真価を図ることが出来るという考えによるところも大きい。

ところがテトラは見事に結界を避けていく。これは困った。困っ

たが、学園でも高度な結界を感知する能力をテトラが持つことを近右衛門は理解し、少ない情報ではあるがメガロメセンブリアへその旨をやや捻じ曲げて送っていた。曰く『テトラ・スプリングフィールドは魔法感知能力に関して成長している』と。

だがメガロメセンブリアは納得しない、あるいは納得しようとせず、『いったい何をやっているのか』と非難する。非難を受けた近右衛門は仕方なく、『テトラ・スプリングフィールドが危局に瀕した場合に取る行動から資質を図ろうとしているが、難航している』と弁明した。

その主張を耳にしたメガロメセンブリアは、ならばと『麻帆良学園の警備体制調査を兼ね、事前通告なしに襲撃者を送ること』を提案。警備体制及びテトラの資質調査。いずれも約定に沿うものであり、更には安全を保証されている。例えその提案の裏に『災厄』を害する意図があろうとなかろうと、拒否することは難しく、結果強行される。かくしてテトラは襲われる運びとなった。

首尾はこうだ。幾人かの襲撃者を送り、結界を発生させる。その際、テトラが迂回した場合に人気が無い場所へと向かうよう誘導する。人気が無くなった時点、あるいは誘導に気付いた時点で威嚇として長距離攻撃を行い、テトラの命が危険域ぎりぎりになるまで戦闘を行う。襲撃側には距離を取らせて、テトラが遠距離型ならばそのまま実力を判断し、近接型ならば接近の際に実力を見る。学園側の魔法先生及び生徒は担当区域の襲撃者制圧が完了次第、テトラの援護に入る。そのため、いずれにせよテトラの命は保証されていたはずだった。

メガロメセンブリアの狸どもめ、と近右衛門は悪態を吐く。近右衛門は遠身の魔法で一部始終を目にしていたが、テトラを襲った人

間は途中からは明らかに殺す気で魔法の矢を放っていた。極めつけは最後の爆発、紅き焔（フラグラルビカアス）。急ぎ向かわせたエヴァンジェリンが間に合わなければ、テトラの命は無かっただろう。

とはいえそれは過ぎた事。嬉しい誤算もあった。戦闘の様子から、少なくとも逃げに関してテトラはB＋レベル、すなわち一般的な高位の魔法使いや麻帆良学園の魔法先生と同等の、あるいはそれ以上の戦闘力を有していることがわかったのだ。飛来する魔法の矢を同じく魔法の矢で相殺する技量に、一瞬しか持たない風花・風障壁で逃げのびる度胸。

「――さらには腕を繋げる程の治癒術とはの」

だが、それらの誤算も頭を悩ませる問題に比べれば些事に過ぎない。問題は、封印状態にあるとはいえ、最強の一角であるエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの両腕をいとも容易くもぎ取ったということだ。それもB＋程度の魔法使いがそれと認知されることもなく、だ。

一般に、認識を掌（つかさど）る魔法は難度が高い。良い例が記憶操作だ。僅かなミスで対象の記憶を全て消去してしまうことも有り得る程であり、魔法使い見習い程度が手を出せる分野ではないのだ。にもかかわらず、テトラは歴戦の猛者であるエヴァンジェリンに認識操作を行っていたのである。自身も気付かぬ内に術中にはまっているのではないかと思うと、冷や汗が出る。

「それに加えてあの魔力じゃ。いきなり増えおった」

火事場の馬鹿力というものは近右衛門自身も幾度か経験したことがある。まだ麻帆良学園に通っていたころのこと、学園内では連続

殺人事件が起きていた。無残な死体にはいずれも情交の痕跡が残っており、現場には魔力の残滓が少しばかり漂っていた。その隠蔽術から、犯人は高位の魔法使いと推定され、当時中学生であった近右衛門は義憤から個人的な捜査を行っていた。高位の魔法使いに魔法生徒が挑むとは、後から思い返せばどれだけ無謀なことだったのだろう。近右衛門は結局、暴力に及ぶ前の現場に踏み込んだものの、目の前で女生徒を死なせてしまった。それも庇われる形で。その瞬間は今でも近右衛門の網膜に焼き付いている。魔法の矢が胸に突き刺さり、溢れだす黒い血。目の前が真っ赤になり、体が軽くなる感覚。気付いた時には相手を殴り倒していた。心を満たす万能感。けれど女生徒を救うことは出来なかった。

魔力の暴走は、時として異常とも言える力を発揮する。しかしそれでさえ、テトラの身に起こった出来事の説明はつかない。暴走はあくまで魔力を限界まで絞り出すだけであり、器が拡張されるわけではないのだ。テトラはせいぜい魔法先生と同等の魔力量であったにもかかわらず、あの瞬間、ナギ・スプリングフィールドの領域にまで跳ね上がったのだ。

近右衛門にはテトラが生命力を対価としたようにしか考えられなかった。エヴァンジェリン共々テトラを回収した絡繰茶々丸の報告によれば、テトラは深い眠りに落ちていると聞く。二度目は無いと近右衛門は確信させられ、同じ轍を踏まぬように決心せずにはいられない。

今回の件で、テトラの情報を大分収集できた。結界の誘導にぎりぎりとはいえ気付く頭脳に、見習いとは思えない魔法技術と戦闘時の精神力。再運用については可能性の域を出ないが、潜在的な魔力量。どれも高水準にあり、喉から手が出るほどメガロメセンブリアは欲しがるだろう。何しろテトラは齢九つ。洗脳も容易で、使いっ

ぶすにはもってこいと言える。それを容認できる近右衛門ではない。

近右衛門は公人として他者を利用することは多々ある。英雄の息子を迎え入れることもその一つだ。将来有望な若者を囲い込み、育てるのは組織として当然の姿と言えるだろう。だが、利用することと使いつぶすことは違うと考えているし、前途洋洋たる人間の可能性を摘み取ることなどしたくはない。これは別にテトラに関してだけでなく、２－Ａについても同じことだ。良くも悪くも目立つ所に置き、巻き込まれた場合には適度な試練を与えることで緩やかに成長させてあげたいと思っていた。公人としても私人としてもそれが一番の利なのである。

故に近右衛門は行動する。まずは情報封鎖。メガロメセンブリアにはもちろん、学園の魔法使いにも情報を与えるわけにはいかない。近右衛門から見ても、頑固な正義バカは学園にも多いのだ。

メガロメセンブリアを中心とする現在の魔法教育には近右衛門も多少の疑問を覚えているが、それは現実をきちんと知っているからだ。個人として戦場を経験し、集団として組織の長を務め、理想に気を取られて足元を御留守にしている人々を幾度も目にしてきた。だが逆に言うと、それらの経験がなければ自身もまた正義バカの一人だったかもしれない。幼いころから魔法教育に染められた彼らにとって、それを否定することは古典物理学を切り崩すようなものだ。常識的に生きてきた人間が、どうして簡単に異常を肯定できるだろう。その困難さを近右衛門は知っているのだ。

だから近右衛門は彼らに同情はするものの見捨てたりはせず、相応の対処をする。今回の場合は情報の制限。襲撃がメガロメセンブリアによる訓練であることや、テトラの能力については伏せておく。前者は士気をこのまま維持するため、後者についてはテトラへの嫉

妬や過剰な期待の暴発を防ぐためだ。

幸いなことにテトラの情報は、近右衛門、高畑、エヴァンジェリン、絡繰茶々丸、当の襲撃者本人しか手にしていない。エヴァ主従は別段問題は無く、襲撃者は記憶をちょいといじればいい。メガロメセンブリアへは『テトラ・スプリングフィールドは怪我を負うことなく無事に保護。能力は魔法使い見習いよりは高いが、見習いの域は出ず。但し、魔力についてはある程度の向上が見られた』とでも報告すれば充分だろう。

ひとまず思考を整理し、ため息をつく。眉間を揉み解して、冷えるのうと呟いた。学園長室には暖房が完備されているものの、やはり夜は冷える。じっと椅子にもたれかかったまま、考え事をしていたのだからなおさらだった。長くたくわえた髭を手で梳(す)きながら、空いた手で頬杖をつき、年を取ったもんじゃと愚痴を漏らす。室内に響き渡り、いつしか静寂に飲み込まれてしまった。カチッ、カチッと時計の音だけがさざめいている。

秒針の音を聞きながら、まんじりともせずに時を過ごしていると、コンコンと戸がノックされて開かれる。失礼しますという高畑の声が耳に届いた。頬杖を崩して視線を向けると、高畑はくたびれた様子で報告を始めた。負傷者や施設の損害、警備網の問題点、魔法生徒の心理的負荷、一般人への影響、更には教師としての勤務交代について等々、大体のところを列挙していく。

報告を聞き終え、「御苦労じゃった」と労いながらソファを高畑にすすめる。「ありがとうございます」とやはりくたびれた調子で礼を口にしながら、高畑は柔かなソファに身を委ねた。よく見ると普段は几帳面に着こなしているスーツはよれており、襲撃の処理が激務であったことがうかがい知れる。

近右衛門はパチリと指を鳴らして二人分の饅頭とお茶を転移させると、高畑に労りを込めてもてなす。恐縮しながら手を伸ばす高畑に「大したもんでもないがの」と笑みを浮かべた。しばらく二人はのんびりとお茶をすするが、あまりおいしいものではない。明日は茶道部にでも行こうかの、などと近右衛門は考えてしまった。

「エヴァの具合はどうじゃ？」と、茶道部繋がりで問いかけてしまう辺り、少し気が緩んでいるのだろう。「ぱっと見でしたが、両腕はきちんと治っていましたよ」と答える高畑に「あれの立て茶はおいしいからのう。――もう少し淑やかなら言うことなしなんじゃが」と軽口を返す近右衛門。

高畑はそんな近右衛門を呆れたように見て、「学園長……そりゃあエヴァは年上ですがね。それはちょっとまずいでしょう」半笑いで投げ返す。近右衛門もまた笑いを堪えながら「そうじゃの」と頷いた。

「それにしても今回は流石に疲れましたよ」

高畑はそう言って足を組んだ。

「それだけ本国も必死だったんじゃろ」

「これにネギ君も追加されるんですよねえ」

ややげんなりした風の高畑に近右衛門は「何、むしろその頃にはちょっかいを出される大義名分も無くなっておる。今が山場……じゃと思いたい」とフォローを入れようとしたが最後には弱音も混じってしまった。

二人の盛大なため息が室内に響いた。

「お互い、年を取ったのう」

どこか泣きそうな顔で高畑は首肯する。「お主は別荘の使いすぎ、自業自得じゃろ」という近右衛門の言葉に「追い打ちをかけないでくださいよ……」と高畑は打ちひしがれる。究極技法の使い手とは思えない、何とも情けない姿であった。そんな高畑をしり目に、近右衛門はぼそりと呟く。

「未来を拓くのが若者なら、現在(いま)を支えるのがワシらじゃて」

小さすぎる肩を近右衛門は思い浮かべた。――そう、背負い込むのは大人だけで十分じゃ。背負い込むのではなく後押しに変えて、今はただ前に進むべき時。そうじゃろ？

誰に問いかけるわけでもないその言葉は心の底に沈みゆき、ただ願うことしかできなかった。

第十話（後書き）

事後処理お疲れ様の回。あるいはちょっとカッコイイ学園長の回。

補足

襲撃は自作自演、ネギとエヴァンジェリン戦の拡張バージョンのようなものでした。
テトラさん、嘘からでたまことを不完全に解除しながら絶賛眠り中。
そのため学園長に興味を持たれることに。
テトラの魔力量増加について、近右衛門は生命力云々と言っていますが、実際は前話の通り、ただ食われていた魔力リソースが戻っただけです。
学園長の殺人事件捜査については相坂さよの初期設定を利用しています。詳細は捏造ですが。
暴走による魔力の器云々は捏造です。でもこんな感じじゃないかなあ。
学園内の正義バカや魔法教育云々については多少の誇張。

テトラさんはあんまり強くありません。
魔力の全リソースを戦闘に回しても広域殲滅呪文が使えるようになるくらいにしかなりません。戦場ならともかくネギまでは主に、閉塞的な空間が戦域になるため使用は難しいのです。
それゆえラカン強さ表的には
３００～４００（振れ幅は魔力リソースの変化による）
最近の話でネギからＮＥＧＩへと進化した兄には及ぶべくもありません。

それにしてもアンチが出来ない。別にしたいわけでもないのですが。

第十一話

真っ暗な夢。暗闇の夢。光のない夢。いつか立ち消える幻の中、テトラは立ちつくし、辺りに視線を彷徨わせていた。床も壁も天井も剥き出しのコンクリートばかりだったが、目を凝らすと、深淵の向こう側に階段が見えた。無意識に足が動き、コツコツと足音が吸い込まれる。

一段一段慎重に階段を下りる。先のわからない、延々と続く階段。地の底へ沈むような感覚に、テトラは恐怖を覚えた。背筋を悪寒がじりじりと這いのぼる。それでもギュッと掌を握り締めて、また一段足を進めた。

どれだけの時が過ぎただろう。ようやく見えてきた階段の果てに、一条の光が差し込んでいた。それを目にしたテトラは階段を駆け下り、縋るように手を伸ばす。と、その手は何かにぶつかった。小さく舌打ちを鳴らし、じっと観察すると、目前の扉に気が付いた。どうやら光は扉の隙間から漏れ出しているらしい。隙間に指をかけて力を入れる。鈍い音を立てて扉は開いた。そっと足を踏み入れた瞬間、冷や汗が吹き出る。視界には元の部屋が映るのみ。違いは天井に蛍光灯が吊るされていることだけで、ご丁寧にも対面には同じような階段がある。空恐ろしさにぱっと振り返ると扉は無くなっていた。

生きた心地がせず、逃げるように階段を転げ落ちるテトラ。底には再び扉、元の部屋、階段、扉……。いつまでも続く繰り返しに、とうとうテトラは扉を前にして立ち竦み、目を瞑ってしまう。扉の向こう側を想像して開けることもままならなくなっていた。何をしても変わらない世界にぞっとする。そんな世界を望んでいるはずな

のにどうしようもなく恐ろしかった。ここが夢の中だとはテトラも理解している。いずれ意識が覚醒することも分かっている。けれど問わずにはいられなかった。

目を閉じたまま、力を振り絞って扉を開ける。

――ここはどこ？

幻聴と同時に、凍てつく寒さに襲われた。――寒さ？　驚いて目をこじ開けると冬の湖を前にしていた。そこでは一人の幼子が溺れている。ネギ・スプリングフィールドだ。テトラ・スプリングフィールドとしての初めて目にした光景（記憶と言い換えてもよい）だった。テトラにはこれ以前の記憶がない。まるで誰かがいなくなってしまったかのように、すっぽりと抜け落ちてしまっているのだ。

呆然とネギを眺めていると、村人がロープをたなびかせて文字通り飛んできた。慌ててネギを湖から引き上げ、水辺に佇むテトラには一瞥もくれずに村の方へ連れていく。記憶通りの、私がまだボクだったころの光景。

――どうしてボクはここにいるの？

景色は変わり、目の前に幼い少年が現れた。薄く雪が積もった、暗い林の中、必死で魔法の練習をしている。少年は白い息を吐きながら呪文を唱え続けていた。誰かを救えるかもしれないと少しは前向きに生きていた自分の姿。やめてくれ、どうせ意味はないんだからやめてくれ。テトラは呪詛のように呟いた。

――ほんとうに？

舞台が白と紅に染まる。天をも焦がす炎。業火に包まれる家々。人々の怒声、怨嗟、悪魔の嗤い声、何もかもが壊れる音。村の魔法使いたちがまた一人倒れ、石化していく。『見捨てる』ということ、その罪悪に晒される少年を、テトラは一歩引いたところから眺めていた。少年から乾いた嗤いが漏れる。もしも悪魔の襲来を伝えていたなら、そんなｉｆの世界を選んでいたら――テトラの心に今でもこびりつくその後悔が初めて現出した瞬間だった。

ぁ、と小さな悲鳴。微動だにせず嗤い続ける少年の耳にその声は届いた。竦む体を懸命に動かし、未だ悲鳴の聞こえる方へ走っていく。まだ、まだ生きている人がいる。助けられるかもしれない人が、まだいるのだ。テトラは自分がそう願っていることに気が付いた。いつの間にか目の前の少年――過去の自分――と同一化していたが、しかし体の主導権は無い。行くんじゃない。テトラは心の中で絶叫した。

悲鳴はもう聞こえない。急げと囁く声。それに従って更に足を早める身体。炎にあぶられながら曲がり角を曲がる。けれど視界に飛び込んできたのは恐怖で色濃く塗られた石像のみで、今度こそ立ちつくすしか、なかった。

唇を噛み締める。憎らしかった。何も行わない自分が悪魔たちが召喚者たちがたまらなく憎らしかった。どす黒い感情に支配される。小さな杖を取り出し、詠唱を始めてしまう。やめてくれと声を張り上げるテトラとは裏腹に、身体は目の前を通り過ぎる悪魔の頭部に狙いを定め、それを放った。――駆けよる人影に気づくことなく。

突き刺さる矢、鮮血、血飛沫、血だまりに倒れるネカネ・スプリングフィールド。

だから言ったのに。

次に立っていたのは紛争地域。異能をある程度使いこなせるようになったテトラは、こっそりと戦場を見て回り、消極的に人助けをするのみ。戦闘なんてできるはずがなかった。救命でさえ何がしかの影響をもたらすかもしれないのに、積極的な行動などもってのほかだった。ただ目の前で死なれるのが嫌なだけだった。偽善に塗れた日々だった。誰かを助けざるを得ない状況に身を置いて、ネカネを傷つけたことから逃げ出したかっただけだった。だから、もう会うことのない少女の問いに窮してしまった。

眼前に、いつかの少女と魔法使いの姿が現れる。みすぼらしいボロに身を包んだ少女は俯いたまま、恐怖の為か身を震わせている。ボロに突っ込んだ手は何かを握っていた。少女を見下す男は下品な笑みを浮かべ、上唇を舐める。身の毛もよだつような光景だった。

紛争地域にいる魔法使いは大抵マギステル・マギを目指しており、人々に無償で手を差し伸べている。けれどその日にテトラが目にしたのはその類の魔法使いではなかった。男は魔法を悪用していた。殺害、強姦、破壊活動、思いつく限りの悪行を働いていたのだ。

テトラはそのような魔法使いの存在を想定はしていた。力を持った存在とは得てしてそういうものだろうと多少は納得もしていた。だがそんなちっぽけな覚悟は何の意味もなかった。そうして自分を嫌悪する。馬鹿げてる。ああ馬鹿げている。

身勝手に生きていられる男への羨望を頭を振って追い払い、行動を開始する。起動準備を整えた転移魔法符を片手に、一足で二人に近寄る。少女の腕を引っ掴むと、男の驚愕をよそに転移を開始する。妨害されることもなく、全ては一瞬のこと。

転移を終えたテトラは数キロ離れた草原に腰を下ろした。少女は地面に横たわったまま身を強張らせ、腕を掴んでいるテトラの手を睨みつけている。テトラが手を離してもそれは変わらない。戸惑うテトラをよそに少女は口を開いた。「どうして助けたの」糾弾するような語気で問われたテトラは返答に窮してしまう。「せっかく、せっかくお母さんの仇を見つけたのに！」その言葉にガツンと頭を殴られた。

「魔法使いのくせに。どうせあんたも、あいつと同じのくせに！」

ボロから取りだした少女の小さな手。握られているのは手榴弾。目に涙を湛えてピンに指をかける。

――どうして助けたの？

……。

暗転。

次の瞬間には誰もいない映画館に座っていた。ビーと音が鳴ったかと思うと照明は消え、かたかたと映写機が動き出す。スクリーンには幸せそうに麻帆良で暮らす、テトラの姿が映し出されていた。職責を果たし、魔法の技術も隠すことなく、見合うだけの評価を得ているテトラ。先生や生徒達と楽しげにお喋りをするテトラ。未来なんて気にせずに、憂いなく年相応に笑うテトラ。

こんなものを見せるな。テトラは呻く。

――望んでる癖に？

幻聴がまた聞こえた。

――認められたいんだよね。

……。

――人殺しの癖にさ。

バラバラに飛び散った少女に画面が変わる。

――未来を壊しかけた癖に。

今度は両腕のないエヴァンジェリン。

――逃げてるだけの癖に。

逃げてない。

――じゃあどうして教師なんてしてるのさ。

……。

――どうして答えないの？

……。

――否定し続けてさ、空っぽだもんね。

……。

――君って、ただ死んでないってだけだもん。これじゃ浮かばれないってもんだよ。

私は生きてる。

――そう、『私』は死んでないよね。

……さい。

――そんな死に方、楽しい？

……るさい。

――マゾ？

うるさい。

――ま、頑張りなよ。

「……うるさいと言っているでしょう！」

自身の激昂に、テトラははっと目を覚ました。何か嫌な夢を見ていた気がするがいまいち思い出すことはできない。

びっしょりとかいた寝汗を不快に感じながら、ベッドから身体を起こそうとするが、頭がくらくらして上手くいかない。どうやら貧血のようだ。額に手を当てると、濡れたタオルが置かれていた。温くなってしまっているそれを片手で握り、鈍い動きで室内に視線を巡らせる。石造りの古い部屋で、ベッドと脇に置いてある水桶と骨

董品と思しきオイルランプ以外には何もない。光を取りこむ窓もなく、昼か夜かさえ分からない。テトラ以外に誰もおらず、静けさがうるさいほど。見たことのない場所であった。

どうにか身を起こし、握っているタオルを水桶の縁にかけたテトラは、ふと後頭部の重みが軽くなっていることに気がついた。髪の毛を手櫛で梳いてみると、長髪は肩口の辺りで乱雑に切られ、ネカネのくれた空色のシュシュも無くなっている。その事に寂しさと焦りを覚え、枕を裏っ返したり、掛け布団に潜って探すがシュシュは何処にも見当たらない。

落ち込んで布団から顔を出した途端、僅かに舞い上がった埃にけほりと一つ咳をするテトラ。口内がかさついていて、のどの渇きが酷い。水でも貰いたかったが家人を呼びつけるのは流石に失礼かと思って我慢する。何もすることがなく、全身を覆う倦怠感から再び身を横たえるものの、どこか落着かない。先程まで見ていた夢のことを考えてしまう。嫌な夢だったとは分かっているのだが……。

まんじりともせずに時を過ごしていると不意に扉が開かれた。

「起きられましたか、テトラ様」

淡々と声を発する、茶々丸に瓜二つの入室者。「絡繰さん……？」と疑問を漏らして身を起こしたテトラに「いいえ、茶々丸は私の妹でございます」とやはり無感情に応じた。

尋ねたいことは山ほどあった。あれから何が起こったのか、気を失ってからどれだけの時間が流れたのか、エヴァンジェリンは無事なのか、自分の処遇はどうなっているのか。しかし有無を言わせない雰囲気を醸し出す彼女に声をかけられなかった。当然か、とテト

ラは思う。茶々丸の姉なのだから多少の魂はあるのかもしれない。敬愛するマスターを――望まぬこととはいえ――傷つけてしまったのだ。少なくとも良い思いはしていないだろう。この分では絡繰さんに関しては絶望的かもしれないな。テトラは内心でため息をつく。

ベッドに近づいて水桶とタオルを手に取った彼女は「起きられて間もないとは思いますが、これからマスターにお会いになっていただきます。着替えをお持ちいたしますので少々お待ちください」ぺこりとお辞儀をすると、すぐさま退出してしまった。

エヴァンジェリンが生きていることにひとまず安堵したテトラは、天井をじっと見つめて漠然と考え事を始めた。倦怠感の理由は魔力が身体の中に篭っているせいだろう。貧血の理由も不本意ではあるが想像はつく。エヴァンジェリンとの会談は言うまでもなく意識を失う直前の出来事についてのはずだ。きちんと謝罪はせねばならないが問題は説明だ。自分でも不明瞭だというのにどのように説いたものだろう。

ごろりと一つ寝返りを打つ。

だが一番の問題は、純粋な魔法である認識操作はともかく、自らの異能、嘘からでたまこと（ライズインザミラー）がどうにも不安定になってしまったことだ。慣れ親しんだ感覚がいつのまにかあやふやになっており、実際に使用してみないとわからないはずなのに、以前のような利用は無理だと心のどこかで理解してしまっている。それでも多少は役に立つだろうが、持ち合わせの技術を組み合わせるしかないだろう。有り合わせで何とかするとは、まるで軍人のようだと見当違いな感想を抱く。

逃げ場はもはやなく、けれど曖昧な不安しか残っていない。そん

な自分に疑問を覚えるが、まあいいかと流せてしまうことも不思議だった。そんなことよりも手元にないシュシュの方が気になってしまう。エヴァンジェリンが生きていたから、緊張も動揺も無くなってしまったのかもしれない。

そんな風にぼやっと考え事をしながら、テトラはふと、とても小さな問題を思い出した。いや現状ではそこまで大したことがないというわけではないのだから、ある意味切実ではあった。けれどあまりに呑気なその問題に、テトラは思わずくすりと笑ってしまう。

「お水、お願いするのを忘れてしまいました」

第十一話（後書き）

テトラさん、断髪されていたの回。あるいは夢（カコ）のお話。

補足

茶々丸の姉は一応原作に登場していたので利用。
テトラの心境の変化、夢の中の幻聴、髪の毛が切られたことについては追々（だいぶ先になるかもしれませんが）
魔法使いについての云々は当然捏造です。

あっさりと流し過ぎかもしれませんが、ようやく原作に固執する理由が開示できました。また、やっとテトラの髪の毛を切ることに成功。

第十二話

四、五分後、茶々丸姉が戻って来た。小脇に抱えていたスーツをテトラに渡した彼女は、お着替えが済みましたら、お呼び下さいと軽い会釈を行う。彼女が部屋から出るのを見送ったテトラは寝間着を脱いだ。汗臭さが少し鼻についたがどうしようもないかと諦める。手に取ってみると、スーツはところどころ破けていたり、染みが出来ていた。記憶にないそのキズが不思議だったものの、今考えることではないかと思い直し、スーツに袖を通す。寝ぐせの付いた髪を手櫛で梳くなどして、出来る限り身だしなみを整えたテトラは扉の外に声をかけた。

それに応じて静かにドアを開けた彼女は、テトラの頭から足元まで視線を動かすと軽くうなずき、くるりとテトラに背を向ける。「それでは参りましょう」とテトラを促し、歩き始めた。テトラもまた彼女に黙ってついていく。

先程までの部屋と同じく、廊下もやはり石造り。壁の所々に設置された燭台の火があやしく揺らめいている。燭台から魔力を感じたテトラは、アンティークな魔道具だなと思った。

廊下を抜けると今度は螺旋階段だった。足を止めて見上げると中々に天井が遠く、呆然としてしまう。貧血気味の体には酷な仕打ちであった。少しばかり気を落として視線を下ろせば、彼女は随分と先に行ってしまっていた。慌てて階段に足をかける。途中にある立派な部屋を目にして、自分が軟禁用の部屋に入れられていた可能性に思い至り、ややブルーになってしまう。

落ち込みながらも足を動かす内に、上からの光が強くなる。屋上

のテラスに出たときには眩しさに目がくらみ、一歩よろめいてしまったがすぐに慣れてしまった。一般人の体じゃないですよねえと嘆息してしまう。

向かい側の塔へ向かうため、テラスから出て円形の闘技場（中心部にはオベリスクが、外延部には石柱が立っている）をまっすぐ通り抜ける。向かいの塔へかけられた道は細く、宙に浮いていると錯覚させられ、はらはらしてしまった。

そんなテトラに一瞥もくれることなく、黙々と数歩先を歩いていた茶々丸姉は不意に立ち止まった。目の前には五芒星の魔法円。別荘からの出口ですね。テトラは得心した。

「私はここまでですので」と言ってテトラに向き直ると、転移魔法陣の上に立たせて陣を起動させた。ありがとうございましたと礼をするテトラに、彼女は口を動かした。御武運を、と少しばかりの哀れみを込めて。

転移先はマクダウェル邸（ログハウスである）の地下室だった。部屋の中心にある大きなボトルシップにスポットライトが当てられているだけで、壁際まではよく見えない。だれもいないのでしょうかと考えた矢先、暗がりに人影が浮かんだ。メイド服姿の絡繰茶々丸だ。

「こちらです、テトラ・スプリングフィールド先生」

抑揚の無い茶々丸の言葉に違和感を覚えつつ、テトラは先導に従う。通りがかりの部屋には可愛らしいぬいぐるみから人間大の精巧なドールに至るまで様々な種類があった。知ってはいたものの、テトラにはやはり不気味に感じられたが、持ち主のエヴァンジェリン

のことを考えたら軽く吹き出してしまった。身体と精神のどちらが上位かはわからないが、６００歳の吸血鬼がお人形遊びをする光景は何ともシュールに思われたのだ。

ひっそりと笑いを漏らすテトラ。それが気になったのか「どうかなさいましたか」と感情のこもらない声をかける茶々丸。「いえ何でも」という応えに彼女は醒めた調子で「そうですか」と相槌を打った。けれど彼女の瞳は僅かに揺らいでいた。彼女の後ろを歩くテトラには、幸か不幸か、窺い知る余地もなかったのだが、確かに幾ばくかの色を湛えていた。

木階段を上って一階に到着する。ちらと内装に目をやると、地下室同様たくさんの人形がそこかしこに置かれていた。窓のカーテンは閉められており、陽は差し込んでいない。テトラはようやく今が夜だとわかった。

足を動かして二階へ向かう。よくよく考えてみると、今日は何かと階段に縁がある日だった。うんざりするほど長い螺旋階段を踏破した上、その前も――。おや、とテトラは疑問に思う。その前は、なんでしたっけ？　思い出そうとしたテトラだったが、それは罪悪感によって遮られた。二階に上がってすぐに、ベッドから身を起こしているエヴァンジェリンが目に映ったからだ。

鳴りを潜めていた罪の意識が次第に広がっていく。エヴァンジェリンを傷つけ、今では綺麗に消え去っている認識だがそれを当然と思ってしまった。一過性のもので一つの世界を救う鍵を失いかけたのだ、それもネカネに続いて再び。しかし何よりも申し訳ないのは、そうやってエヴァンジェリンの生存に単純に安心することが出来ない自分であった。目前の存在をただ認めることもできず、冒涜してしまっている自身が醜悪で、息が詰まりそうだった。

「――申し訳ありませんでした！」

故に最初の行動は土下座だった。板張りの床に頭をこすりつけて、ひたすらに平伏するよりしようがなかった。他に謝罪の方法が見つからなかったのだ。

テトラは頭を下げていてわからないが、エヴァンジェリンは唖然としていた（この間茶々丸は、主人への紅茶を淹れに一階へ下りていた）彼女からしてみれば、テトラは回復したとはいえ自身の腕をもぎ取った人間であり、これからどれだけ嫌味や無理難題を吐いてやろうかと楽しみにしていた対象である。会話のイニシアチブを取って虐めてやるつもりだったのに、出鼻をくじかれてしまったというところ。有り体に言って興ざめであった。

それでも「……ならば、謝罪の証に足を舐めろ」とベッドから足を出したのはプライドだったのだろう。正直、まさか舐めるとは露程も思っていない。ところがテトラからしてみれば、彼女に対してどんな形であろうととにかく謝罪がしたいのであり、満足してもらえれば御の字なのである。当然、要求を呑み、顔を上げてエヴァンジェリンの足に近付けていく。本当にするとは微塵も考えていなかった彼女は、そのプライドから今更要求を取り下げることもできない。したがって足にはテトラの顔がゆっくりと近づいていく。そうして、重なろうとした瞬間、「マスター……？」茶々丸が戻って来た。

互いにばっと距離を取る。エヴァンジェリンは足をベッドに入れ、テトラは土下座から身を起して正坐。エヴァンジェリンは奇妙な緊張から解放されてため息を漏らし、テトラは冷静になって見ると何をしようとしたのかと気恥ずかしさから頬を染めた。

一人蚊帳の外にあった茶々丸はミリ単位で首を傾げ、主人であるエヴァンジェリンには紅茶を、一応先生であるテトラにはお茶漬けを渡した。お茶漬けを見たエヴァンジェリンとテトラは、かたやほうと満足げに頷き、かたや「いえ、結構ですよ」と頬を引きつらせた。

「本当に要りませんか」と念を押す茶々丸。テトラは実際問題、お腹が空いていたので切実に食したかったのだが、仕方なしに「ええ、お気持ちだけでも」と返答した。多少間違ってはいるものの、礼儀なのである。そうどうしようもないのである。「わかりました」と下げられるお茶漬けを、しかし未練がましく見つめるテトラ。

その情けない姿を目にしたエヴァンジェリンは、やれやれと肩を竦めて「そろそろ本題に入るとしよう」と会談の開始を告げた。その声は、毒気が抜かれたせいか幾分柔かいものだったが、ともあれ話し合いは始まった。

「今は何月の何日でしょうか？」

「十二月十九日の深夜零時を回ったところです、テトラ・スプリングフィールド先生」

エヴァンジェリンの別荘については知らないことになっているので「……ダイオラマ魔法球のおかげですね？」と一応確認する。

「そうだ。わざわざ別荘を使わせてやったんだ。相応の対価は払ってもらうぞ……とはいってももう頂いてあるがな。慰謝料込みで」

エヴァンジェリンは両腕をテトラに見せつける。継ぎ目が見当た

らない事に安堵のため息をついたが、既に相応の対価を払っているという言葉が引っ掛かった。

「もう血を吸われたのですか？」

「いや、殆どは輸血パックに保存してある。どうにも不味いので魔法薬用に取っておくことにしたのさ。ああ、あと髪の毛もだな。貴様の血はその程度にしか役に立たん。サウザンドマスターの血が薄いのか、解呪の足しにもならんわ」と言ったかと思うとサウザンドマスターのことでも思い出したのか、エヴァンジェリンは憤慨しはじめた。

「……そういえば髪が切られているのは、それからスーツとコートが妙にぼろぼろになっているのはどうしてでしょうか？」

居心地が悪くなったテトラは話題を少々ずらす。これに答えたのは茶々丸であった。

「テトラ・スプリングフィールド先生はマスターの治癒を終えたのち、そのまま血だまりに倒れこみました。そのため特に後頭部の髪の毛が血で濡れてしまったのです。これはスーツとコートもですが。断髪や衣類の洗浄につきましては、その際どういうわけか私の身体が不調になり、失敗してしまいました。申し訳ありません」

淡々と謝罪を述べる茶々丸に「いえその、悪いのは私ですし」とテトラは顔を合わせられず、頬を掻きながら応じる。そのため茶々丸が、そうですねとちいさく呟いたことには気がつかなかった。

いつの間にか憤慨を終えたエヴァンジェリンは、紅茶を口に含み、剣呑な空気

「さて、問題はだ。貴様、どうやって私の腕を取った？　それにだ。感じられる魔力量がその器に比して小さくなっている。一体どういうわけだ？」

その言葉に、テトラはとうとう来たかと身構えた。現在、使い慣れた異能は不安定で使えない。にもかかわらず魔力がある程度その維持に利用されているのは不思議でならないが、ともあれ、今は手持ちの材料で何とかするしかないのだ。

テトラには切っていいカードと切って悪いカードが存在する。生来の異能はまずもってＮＧだろう。その性質上、疑心を持たれることとなる。ぎりぎりのラインは、まだ魔法の範疇にある認識操作魔法。魔力量については何かと目立ちたくがないために、常に認識操作の維持に回しているとでもすればいいだろう。問題は、どうしてエヴァンジェリンを傷つけたか、であるが……思いつきはしているがテトラには躊躇われた。彼女を精神的に傷つけるかもしれない。しかしそれ以外に方法も思い当らなかった。心中で嘆きながらテトラは覚悟を決めた。

「まず、私は認識操作魔法の適正が高いことが前提です。私は衆目を集めるのが苦手なので殆どずっと認識操作魔法の維持に魔力リソースを多く割り振っています。これが後者の質問の答えです」

テトラの言葉を聞いたエヴァンジェリンは、黙って続きを促した。

「それであの時なのですが、その――気が動転してマクダウェルさんを敵かと思ってしまったんです。その闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）なわけですし、それでつい、認識操作魔法を全開にして――後はあの時の状況につながります。本当に申し訳ありませんでした」

頭を再び下げるテトラに、エヴァンジェリンは何か言おうとしたが、結局口を閉ざしてしまった。

しばしの沈黙ののち「まあいいか」と彼女は思案気に呟いた。

「私たちは基本的に不干渉だ、テトラ・スプリングフィールド。今回はそれで良しとしてやる。だがもし次があったなら――」

――容赦はなしだ。白目と黒目を反転させ、凄まじい殺気を放つエヴァンジェリンにテトラはただただ圧倒されてしまった。封印されていようといまいと、これが本物の強者なのだと骨の髄まで理解させられた。彼女にとって、自身は稚児に等しい存在なのだと認知せずにはいられない。覚悟も力も何もかもが足りていない弱者でしかない。指先が震え、動悸が激しくなる。

テトラを冷たい視線で眺めるエヴァンジェリンは、茶々丸にテトラを学園長の下へ連れていくように命じた。テトラはもはや歯をカチカチと鳴らすのみで、会談は実を結ぶことなく閉じられた。

※

テトラが去った後、エヴァンジェリンは忌々しげに舌打ちした。

テトラ・スプリングフィールドはなんとつまらない人間なのか。せいぜいが三流の悪人程度。誇りも矜持も持ち合わせていないガキ

だ。はっきり言って失望してしまった。あのサウザンドマスターの息子なのだ。筋の通った、もっと気概のある人間かと思っていたというのに。あの程度の殺気で震えるようでは、少なくとも今の段階では成長すら望めまい。まあ唯一評価すべきところは、礼節を踏まえているところと比較的冷静でいられることくらいだろう。それでもつまらないガキであることに変わりはなかったが。

だから不干渉を提案した。エヴァンジェリンだって今の平穏な生活を何だかんだで楽しんでいる。まがりなりにも英雄の息子であるテトラに、何の意味もなく干渉することで学園の魔法使いから何がしかされるのはごめんである。

そこまで考えて、エヴァンジェリンは苦笑いを浮かべる。何のかんの言って、せっかく手に入れかけている光が気に入りつつあるらしかった。馬鹿げたことだと一笑に付すのは簡単だったが、実際にそう感じているのだから仕方のないことだろう。そうこれで後はあの男がいれば――――。

ぼす、と枕を叩く。耳まで真っ赤にした気恥ずかしそうな表情は、先程殺気を撒き散らしていた存在と同一人物の物とは到底思えない。妄想に浸るその姿はまさしく恋する中学生のようであった。

にやにやしているエヴァンジェリンだったが、茶々丸が帰って来るとすぐに居住まいを正した。主人としての威厳のためである。二階に上がって来た茶々丸の小脇には、何故か座布団が抱えられている。

どうしたのかとエヴァンジェリンが尋ねると、どうやら玄関に座布団を置いていたらしい。その上、ほうきを逆さに置いていたのだそうだ。自分でもよくわからないが気付いたらそのようなことを行

っていたということだ。

その変化をエヴァンジェリンは喜ばしく思う。それと多少の気恥ずかしさだ。マスターと認めた者に害なす存在への敵意、という感情が芽生えつつある。マイナスな感情ではあるが、魂の萌芽に変わりは無い。なんて喜ばしい。この点では、テトラ・スプリングフィールドに感謝してやってもいいかもしれんな、とエヴァンジェリンは意地悪い笑みを浮かべるのであった。

第十二話（後書き）

テトラ君、疎まれるの回。

補足

この回からしばらくの間、基本的にテトラの異能は使えなくなっております（認識操作魔法は別）理由は後になりますが。
別荘の構造は原作を意識。
茶々丸姉は魔力が動力源の為別荘内でしか動けない（原作）
エヴァ邸の構造も原作意識。（でも三巻と十六巻でベッドからテーブルに変わっているみたい）
ぶぶ漬けとかホウキとかは有り体に言えばさっさと帰れ、ということです。茶々丸の感情の萌芽を書いておきたかったので。
エヴァが不干渉、としたのはテトラがつまらん人間だから。

エヴァ主従に気に入られるってすごくハードル高い気がする。

第十三話

「クリスマスイブなのに……」

少女らの不平が教室に木霊した。自業自得でしょうにと口の中で呟きながら、テトラは補習用のプリントを配っていく。指導教員の補佐として働いていたためか、配り様は堂に入っているが、対照的に生徒達は不満顔。プリントを一枚取ってはのろのろと後ろの生徒へと渡している。

教壇に立ち、全員に回ったことを確認したテトラは、まだ着慣れていない予備のスーツのポケットからストップウォッチを取り出した。スタートのボタンに人差し指を置き、改めてプリントが配られているかを確認すると、始めてくださいと号令をかけ、ボタンを押した。

号令と同時にカリカリと軽快な音が響き始めない。

補習プリント一枚目は百マス計算。たかが百マス計算、されど百マス計算である。

冬休みに入り、テトラは補習を受け持っていた。普段の授業よりも敷居は低いのかもしれないと補習を始める前は楽観していたのだがその予想は見事に裏切られている。

２－Ａ筆頭バカレンジャーだけでなく学年下位の面々が集っているのだ。ある意味当然の結果かもしれない。しれないのだが……。

シャーペンの鈍い動きからテトラは思わず目をそらし、窓の外を

見やった。高く昇っているはずの太陽は分厚い雲に隠れてしまい、ちらちら降ってくる雪は窓に当たるとすぐに溶けてしまう。暖房が効きすぎているのかもしれない。少しばかり頭がぼんやりとしてきており、空調の音がやけに頭に響く。

テトラが襲撃されてから一週間が経とうとしていた。

エヴァンジェリンに脅された後、近右衛門から事情を聞かされた。曰く、襲撃は近右衛門による警備訓練の一環であると。（メガロメセンブリアの関与については伏せられている。これは政治的問題――特に今回は物騒極まりない上、とりわけ『災厄』への私怨も絡んでいるのだ――に子供（テトラ）を巻き込まないようにとの近右衛門の配慮である）

テトラはその話を特に疑っていない。知らされた瞬間に、兄のネギがこれから経験する『吸血鬼事件』を思い浮かべたからだ。そのため胸をなでおろし、警備訓練と魔法使いとしての訓練、一石二鳥を狙ったのかと思考を止めてしまっている。訓練にしては嫌に真剣だったとは流石に感じてはいるものの、近右衛門ならやりかねないと、摩耗しつつある中でも印象的な知識――より正確に言えば原作とそれに関する俗説――から思い込んでいるのだ。それゆえ、近右衛門が秘密裏に計画したという話を内密にするよう頼まれたことも当然と考えている。

だから今こうして、平穏を享受していられるのだ。

そっと耳を澄ませば、街の楽しげな声さえ聞こえてきそう。

穏やかな時の流れを感じているうち、ふと思考に何かが描かれた。籠の中、さえずる小鳥。籠の入り口は開けられていて、自由に出入

りが出来る。けれど小鳥は出ようとしない。そんなイメージ。

ネバーランドは何処(いづく)にか。

不意に浮かんだ言葉。馬鹿げたことだと頭を振る。少なくとも襲撃以来、変化したことは多少なりとも存在しているのだから。そしてその変化にはテトラが理解していないこともある。

例えばその異能と魔力量。

異能は現在、どうにも使用出来なくなっており、認識系魔法は露見を恐れて控えている。何しろ既に近右衛門から幾つか指摘を受けた。これは異能の効果が薄れたことで近右衛門の感覚に引っかかるようになったためだろう。

魔力量はそれなりに増加したままだ。学園の魔法使いより数段優れているが、ネギよりはやはり数段劣っているというところ。これもまたテトラにとっては不可解であった。本来異能に回していた分がそのまま増加分になるはずなのに、実際は異なっている。

変化は魔法以外にもあった。

先日まで伸ばしていたテトラのブロンドはばっさりと切られ、今はシャギーボブ。以前とは異なり、凛とした少年の印象が強くなっている。（ちなみにポニーテールを纏めていた空色のシュシュは左手首に付けられている。シュシュは茶々丸から別れ際に投げ渡された）

以前の少女めいた、物憂げな雰囲気が幾分緩和されている。まったくおかしな話だった。異能も魔法制限を余儀なくされているとい

うのに、どうでもよいようにも感じている。そんなことよりも『先生』として勉強しなければならないと切に願っている。しかしそれは何故なのだろう。

これらの変化をテトラは奇妙だとは思うが、ただそれだけ。その原因の特定に至ることは無い。なぜならテトラ自身がそうあるように否定したからだ。

エヴァンジェリンを治療する際、テトラは字義通り心を砕かなければならなかった。正気と狂気の狭間をふらふらしていた。自我の境界線すら曖昧だったテトラはたった一つの言葉を頼りにするほかなかったのだ。

それが『先生』という茶々丸の呼びかけ。

その場に存在した唯一のターム。

それに縋る以外選択肢は無かったのだ。

故に必要だったのは『先生』の定義。そんなもの本来わかるはずもない。そう本来は。

――あなたがあなたらしくいられるように。

これは最近耳にした、指導教員の定義にすぎない。けれどそれで充分だったのだ。

だから否定した。『普通』でいられるよう、異能を用いて自身の異常のあらゆる自己認知を否定した、いや、否定しようとした。

――ここにいていい？

問いであり乞いでもあるそれは心に深く張られた根。テトラとしての根源は容易く牙を剥く。『普通』に必要ないものを全て捨て去ってしまえば、残るのはこの世界を『普通』に生きる少年の意識しかない。力もない、知識もない、ただの少年だ。

そんな無駄な人間が、どうしてネギ・スプリングフィールドの英雄譚を邪魔しないでいられようか、魔法世界を失うことになりはしないだろうか。もしそうなったら、それこそ『テトラ』という存在の否定ではないのだろうか。

この思いが現在のテトラを創り出してしまった。

中途半端に自身の異常を否定し、原作に関わりたくはないが、『先生』として接したいと考え、そうして自己存在の肯定を切望する。論理的な矛盾を抱え、アンビバレントであることで自己を保っている。あまつさえその滑稽な有様に気付くチャンスを、今この瞬間もその異能で消し去っている。もしも今、テトラが自身の状況を認識できるなら、お腹を抱えて嗤い転げることだろう。なんて無様と吐き捨てながら、けらけらと涙を流すだろう。

ともあれ、いくら仮定しようと現在、認識することは出来ないのだ。それが幸か不幸かはわからないが、少なくともたった今、テトラは幸せを感じている。

テトラは自分自身を元々陰の薄い存在に設定していたため、異能が解除されても取り立てて仲の良い人がいるわけではない。それこそ指導教員くらいしかいないかもしれない。それでも今日のように補習を通して生徒と近づくと、質問を受けたり、指名されないよう

に顔を伏せられたり、そうした瞬間、ああ自分を見てくれているのだと実感する。それがたまらなく嬉しい。

そう、ネバーランドなんてないのだ。

ストップウォッチを見ると、もう制限時間は過ぎていた。頬を掻き、終了ですと告げると、まだ終わってないのに、などと声が上がった。生徒達のそんな様子に頭を痛めながら、テトラは新たなプリントを配布する。

やる気のない生徒達も最初の百マス計算ではまだ集中していたが、それ以降は緩やかに集中力は欠けていくのが目に見えてわかり、テトラも気を削がれてしまった。成る程先生方はこんな気分だったのかと内心で苦笑する。そうしてプリントの解説を板書しつつ、自分の場合はどうだったかなと思いを馳せようと――。

チョークが中ほどから折れ、落下していく。床にぶつかる音にテトラははっとした。

目敏い生徒の一人に、なにかあったのですかと問われたが、いいえと身体を黒板に向けたままなおざりに聞き流す。ただちょっと目眩がしただけ。決してうすくなっているわけではない。問題らしい問題はないのだ。

生徒は未だ怪訝な面持ちを浮かべていたが、テトラに促されて渋々プリントに取りかかる。四苦八苦しながらシャーペンを動かす生徒をしり目に、テトラは折れたチョークを少しの間見つめた。折れたチョークは中途半端な長さで、新品に取り換えるべきか迷ったのだ。そのまま使うには使いづらく、捨ててしまうには勿体ない。わずかに思案した後、チョークを持ちなおした。結局そのまま使うこ

とに決めたのだ。

板書を再開しようと思った矢先、背中に視線を感じた。授業中なのだから当然と言えば当然だが、それまでとは毛色が異なる。ちらと瞳を動かすと先程の生徒と目が合った。

慌てて目を反らしたテトラはほんの少し後悔した。生徒の瞳には不安と気遣いの色が浮かんでいた。見習い子供先生が授業中に悩む素振りを見せてしまったのだ、不安にもなろうというもの。まだ慣れていないということは免罪符にもなるまい。

こっそりため息をついて、チョークを動かす。

まだまだ『先生』には遠いと強く実感し、知らず、表情が沈む。届かないからこそ理想なのかもしれない。そんなことさえ考えてしまう。

黒板の端まで書き終えると、チャイムが鳴った。補習終了の合図だ。

起立、礼、着席。たったそれだけで教室は活気を取り戻す。この日の補習は数学で終わりで、今は丁度お昼時。生徒達はぺちゃくちゃお喋りしながら帰り支度を整えている。何となく疎外感を感じて名簿や教材を手早く纏めたくなったが、生徒が全員出ていくまで待たねばならない。補習という形式上、誰かが質問をしに来るかもしれないからだ。

改めて教室を眺めてみると、１８０センチ超の少女（？）からまだまだ幼さを残した少女まで大小さまざまだった。髪の毛も茶髪はもちろん橙髪等々、色彩豊か。それでいて似合っているのだからお

かしなものだった。

次第に生徒は減っていき、十数分も経った頃には数人しか残っていない。その数人ものんびりと歓談に興じている。

テトラは教材を脇に抱えて立ち上がった。残りの数人に一つ声をかけてから、教室から抜け出した。

教室から出て後ろ手に戸を閉めると、視界の端に橙色が滑り込んできた。神楽坂明日菜だ。鞄を持ってそわそわと窓際に突っ立っていたが、テトラの姿を認めると不機嫌そうに声をかけてきた。

「テトラ――んん、テトラ先生。あーっと、ちょっといいですか？」

歯切れの悪い明日菜に疑問を覚え、わかりましたと頷いた。はっきり言って気は進まないが、明日菜とは着任当初の一件以来多少は話をする関係――これは異能が通用しなかったということもあるが邪険にするのも気が引けていたためだ――である。

少なくともテトラにとって明日菜は知り合いであり、活発さが見られないことは気にかかったのである。

明日菜の隣に立って「どうかしましたか。それから普段の口調でいいですよ」と言うと「どーかしてるのはあんたのほーでしょーが」と責められてしまった。

困惑するテトラに明日菜は口を開いた。

「よくやってると思うわよ、私は」

そう言って明日菜は窓の外に目を向けた。くしゃりと髪の毛をいじり、頬には少し赤みが差している。

テトラは一瞬、意味を呑み込めなかった。いったい自分の何がよくやってると言えるのだろう。教師としてもまだまだ未熟なのに。

「頑張るのはいいけどさ、ちょっとは気ー抜きなさいよ」

あんたもどっか行っちゃう気がするじゃないと小声で付け加える明日菜。

けれどその言葉は心地よい響きで、きっとテトラが求めていたものだった。

そんなに私ってわかりやすいですかねえ、とテトラは自虐めいた言葉を発すると、かなりねと一刀両断される。

「気づかないヤツなんていないわよ。さっきも途中からうわの空だったしね」

図星であった。申し訳ない思いに駆られ、テトラは目を伏せる。

うなだれるテトラを見て、明日菜は呆れたように額に手を当てた。

「だーかーら。気負いすぎなのよ！　ガキなんだからちょっとは気楽になりなさいって！」

気負っているのでしょうか。テトラは自問するが答えは出ない。ただ少なくとも明日菜が励ましてくれているらしいことはわかっていた。それはとても喜ばしいことで、いつの間にか笑みを浮かべて

いた。

顔を上げて、ありがとうございますと礼を言うと「いいわよ別に」と照れたようにそっぽを向いてしまった。

その様子を微笑ましく思いながら、ふと気になったことがあった。先程、明日菜は『あんたも』と言った。これはどういうことなのだろう。

（記憶の箍（たが）が外れているならばガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグのことかもしれません。すると私の存在が箍を緩めているのでしょうか）

推論は出来ても、直接尋ねることは出来ない。藪蛇になりかねないからだ。可能なのは自身の存在が強い影響を与えないよう祈ることだけ。情けないがこれが自身に出来る精一杯なのだ。

けれど感謝の気持ちとして、これくらいなら罰は当たるまい。そう考えてテトラは口を動かした。

「そういえば、高畑先生は今日の夜はお暇らしいですよ」

「ほんと！？」

明日菜は叫び声をあげたかと思うと、そっかーそーなんだーえへへへと怪しく笑いだした。さっきまでの真剣な雰囲気はどこへやら。涎を垂らしながら妄想にふけるその姿にテトラは軽く引いてしまう。

「ああ高畑先生……だめですよぉ」

訂正。結構引いていた。

それじゃあ私はこれで、と頬を引きつらせながら立ち去るテトラにはもう一瞥もくれることもない。

廊下には一人、ピンクな妄想を垂れ流す少女が残されたのだった。

第十三話（後書き）

テトラ君、いい具合に歪みましたの回。

補足

アスナはガトウの件により『置いていかれたくない』をキーワードとして多少歪んでいる（私見）
その前向きすぎる姿勢、バイトや渋い男性好き、意地でもネギを守ろうとし続ける姿勢はその表出なのかなあと。
そのため気張って努力する人がいたら多少つっこむのではないかと。
（今話ではテトラ、原作ではネギ）

現在のテトラのキーワードは『先生』『自己の肯定』
ネギが来たら……？

これから数話、ネギ着任までは魔法先生や生徒との絡みが中心。日陰者らしいっちゃらしいかも。
次話は今話の夕方、超包子。クリスマスイブの飲み会話。原作からは葛葉刀子、セルヒコ、超鈴音が登場予定。

第十四話

その日の夕方、テトラは指導教員によって超包子へ半ば強引に連れてこられていた。テトラはなるべく超包子を避けていたため、初めての来店である。路面電車をよくもまあここまで見事な屋台へと改造したものだと感心してしまった。

超包子は外席まで溢れるほど人でごった返しており、まだ席が見つかっていない。クリスマスイブだと言うのに色気なんて欠片もなく、あるのはただただ食い気だけ。誘えなかったよーだとか、そう落ちこんじゃあかんよなどと恨みつらみが聞こえてくる。

苦笑いを浮かべながらしばらく探していると、隅のテーブルが空いていた。屋台の外ではあったが雪は随分と小振りになっているので特に気にはならない。空いていますよと彼女を呼びつけて向かい合って座る。御品書を開けば、ずらりと並ぶ料理名に目が痛くなってしまった。

「見野(みえの)先生と――テトラ先生カ。珍しい御客人ネ」

料理を選ぶのに四苦八苦していると注文を取りに超鈴音(チャオ・ソンイン)がやって来た。

指導教員、見野は、リンちゃんこんばんはーと挨拶し、注文を口にしようとしたが、超に機先を制された。

「小籠包酢豚水餃子甘酢餡かけ麻婆豆腐海老のチリソース焼売……（中略）……スタミナスープライスヌードルにビールだたネ」

ハカセが解剖したいと言てたヨとからかうように付け加える超。

「十年も経てばわかるわよ」

「十年後にはいないかもしれないネ」

未来人だったっけと見野は楽しげに笑った。

火星系未来人ネと答えた超は肩を竦め、テトラに注文を促した。

火星だの未来人だの、異常な単語が飛び交う会話に頭を痛めたテトラは「ニンニクラーメンチャーシュー抜き」と適当に答えた。正直、メニューを発掘するのも面倒だったのだ。

「わかたヨ。追加注文も可能だがネ……」超はちらと見野に視線をやってため息をつく。

頑張ってくれたまえヨ、テトラ先生と言い残して超は屋台に入っていった。

テトラは意味を計りかねて見野に尋ねてみるが「去年ちょっとねー」と濁されてしまった。

「アレはちょっとどころではないヨ」ビールとお冷を運んできた超が呆れた調子で割り込んできた。

「葛葉(くずのは)先生と二人で――まあ色々とネ」と言った超はテーブルに飲み物を置こうと腰をかがめ、自然な動作でテトラの耳元に口を近づけた。

「げに恐ろしきは独身女性ということダヨ」

そう囁いた超は次の瞬間には姿勢を正している。何か言われたように感じた見野はむっとしてビールを呷(あお)った。

「今年は一緒じゃないから。テトラ君もいるし」

「そんなこと言てると――」超は言葉を切ってどこかを見た。そうかと思うと「噂をすればなんとやらネ」と肩を落とした。

「見野先生、今年はあまり煽らないでくれヨ。葛葉先生は耐性がないからネ」

このテーブルは開けておくから頼んだヨと念押しした超は項垂れて去っていく。テトラは超の見ていた方向に目をやると、スーツをびしっと着こなした妙齢の美女が立っていた。ストレートロングの金髪に眼鏡を掛けたその風貌は理知的な雰囲気を漂わせている。葛(くず)葉刀子(のはとうこ)だ。彼女はどこか苛立った表情でぐるりと辺りを見渡し、テトラ達の存在を認めると一瞬驚いたような表情を浮かべた。

近づくにつれ、彼女は段々と不機嫌そうに口元を歪めていき、整った眉も震わせる。心当たりのないテトラは何とも居心地が悪い。（そもそも彼女は、原作本筋にあまり関わらないとはいえ魔法関係者である。尚更気疲れすると言うものだ）彼女とはあまり面識がないのだから、見野に問題があるとわかってはいるが当の本人は全く気付いていない。葛葉がテーブルの前に立つと、見野はようやく彼女に意識を向けた。

「あら刀子。不景気な顔してどうしたの？」

葛葉は腕を組み、トントンと指で叩いた。

「詠美(エミ)、テトラ先生を連れて何をしているのですか」

威圧感の増した葛葉にさして動じる風もなく、見野は「デート」と言ってのける。

ピキと額に血管が浮き出る葛葉。彼女の荒れ狂う気に当てられてテトラは身体が麻痺し、それでも尚泰然としていられる見野に憧憬を抱いた。何しろ周囲の客も早々に退避を始めているのだ。別にテトラが臆病なわけではない。

葛葉が再び言葉を発しようとした矢先、異変を察知した超が慌てた様子でやって来た。

「ニンニクラーメンと小籠包ネ。葛葉先生は何にするカ？」

軋んでいた空気が和らいだことにテトラだけでなく周囲の客も安堵する。水を向けられた葛葉は僅かに戸惑いながら日本酒を頼んだ。超に促されてテトラの隣に腰を下ろそうとするが、見野が強引に自身の隣へと座らせてしまう。

葛葉とテトラは、こんばんはと今更ながらに挨拶を交わした。テトラが未だ萎縮していることに気が付いた葛葉は目を伏せて謝罪し、きっと見野へ向き直った。

「テトラ先生に飲ませていませんよね？」

「まだに決まってるでしょう」

ため息をつく葛葉に、見野はわかってるわよと呟いた。

「ちゃんと十年は待つわ」

「そのころには――」葛葉は言いかけた言葉を飲み込み、困ったようにテトラを見た。

その続きを何となく理解したテトラは喉の渇きに気づき、水の入ったコップに手を伸ばした。

結局のところ、テトラが麻帆良に永住することは難しい。一年先か二年先か、何時になるかはわからないが魔法使いとしての修業が終わったと見なされてしまえば、英雄の息子として魔法世界に行くことになるのだろう。ひょっとするとそのころには英雄の弟という新たな付加価値が生じているのかもしれない。そうなれば尚のことだ。

コップを口元から離すと、水面が震えていた。

「――そのころには麻帆良にいないかもしれませんね。上様（カミ）がそう決めるにきまってますよ」とテトラは葛葉の言葉を引き継ぎ、コップを置いた。コトリという音が酷く遠く感じられる。

「神様だってサイコロを振るかもしれないわ」見野は小籠包をパクついた。

「細工をするのは人間ですよ」

自分の言葉に思い当ることがあるのか、葛葉は躊躇いがちに言う。近右衛門のことでも思い浮かべているのだろうか。

「葛葉先生の言う通りネ。揺らぎを生むのはどんな時も人間ヨ」

確定させるのも、保留するのもネと言いながら超は酢豚と徳利、御猪口をテーブルに置いた。

「それって『麻帆良最強頭脳』としての意見？」今度は酢豚を口に放りこむ見野。

「『未来人』としての経験ヨ」

超は意味あり気に笑ってまた屋台へと入っていく。

「未来人？」御猪口に徳利を傾けながら、葛葉は見野に尋ねた。

「どういうことも何も、そのままよ。未来人なんですって」

そうですかと相槌を打つと、葛葉は手を顎に当てて眉根を寄せる。真偽を計っているのだろう。テトラは平気な風でラーメンを啜りながらも、内心びくびくしていた。

科学の進展に多大な貢献をしている超である。オーバーテクノロジーを次々生み出すその様は、知恵が回るというレベルを通り越しており、もともと疑わしいと言えば疑わしい。些細なきっかけで事実に近づくことだってあるのだ。真相を知っているテトラからしてみれば何とも恐ろしい状況である。

「きっと冗談ですよ」

勢い込むテトラの様子に違和感を覚えたものの、葛葉は曖昧に頷

いたが、未だ考え込む素振りを崩さない。

「案外ほんとだと思うんだけどなあ。――それにしても刀子」見野は意地悪く笑った。「シワ、残るわよ」

うっと息をつまらせる葛葉。見野はにやにやしながら、動揺を露わにする葛葉に追い打ちをかけた。

「しかめっ面して……。そんなんだから今日も一人なんじゃないの？」

「そっ、それは詠美もでしょう！」

葛葉は声を荒げて立ち上がった。

「わたしはほら、テトラ君がいるし？」

澄ました顔で箸を動かす見野をじろりと睨む葛葉であったが、突然の出来事に目を白黒させるテトラに気がつくと気まずそうに腰を下ろした。恥ずかしいのか、テトラとは目も合わせずに酒をちびちびと舐め始める。

「あーあー。テトラ君驚かせちゃった」

わざとらしい非難に、葛葉は「誰のせいですかっ」と口を尖らせる。

「いっつもクール振ってる誰かさんのせいでしょ」

「仕事なんですから仕方ないでしょう！」

大体仕事が多すぎるんですよと愚痴を漏らして、苛立ちを隠そうともせずにぐいと御猪口の中身を喉に流し込んだ。見野もグラスを大きく傾けて残りを飲み干し、ため息をつく。

「ギャップって埋めにくいものよ。その辺はわかってるでしょうに」

ねえ？　とテトラは同意を求められたが返答に窮してしまった。葛葉が酒を御猪口に注ぎながらもちらちら視線を寄越しており、あからさまに肯定するのも憚られる。かといって沈黙を保てば肯定と見なされてしまう。今この瞬間、沈黙は金ではないのだ。必死で言葉を絞りだそうとするが、出るのは「ええっと」などという愚にもつかぬものばかり。

そうこうするうちに葛葉は一杯二杯と飲むペースを上げていた。酔いが回り始めたのか目つきが剣呑なものへと転じており、先日のエヴァンジェリンを彷彿とさせる。いつ狂化（注：興奮して目が白黒反転すること）するかわかったものではない。見野は我関せずと傍観しているだけ。

「そうかもしれませんが」いよいよ焦ったテトラはやけくそ気味に言った。「私は可愛らしいと思いますよ」

辺りが静まり返った。疑問に思い振り返ってみると、視線が合うこと合うこと。見知った見知らぬ関係なく、誰も彼もがテトラ達を見守っていた。実態は、葛葉の発する剣呑な空気を感じ取った人々が聞き耳を立てていただけだったのだが、今更そんなことは関係ない。賽は投げられたのだ。

「テトラ君」見野が笑いを懸命に堪えた様子で名前を呼んだ。

状況を理解できないテトラは、疑問符を浮かべながら二人に向き直った。見野の口からは小さく笑いが漏れており、葛葉はというと目を丸くしている。地雷を踏まずに済んだことに安堵しかけるテトラは、しかし次の瞬間テーブルに突っ伏した。

「テトラ先生って年上好きなんやねー」

どこからか投じられた石がさざなみを呼ぶ。

「年齢差は三〜四倍です。熟女の方が適切かと思われますが」

ここは超包子。夢にやぶれたものの溜まり場所。それは鬱憤を晴らすには十分すぎるネタで、小波は容易に瀑布へと変わりゆく。

要するに、だ。

あいつってそんな趣味が……、アスナも他人のことは言えんよ、ううむお嬢様にはそういう意味での危険は無いようだな……しかしあの年齢差がアリならばいやいや私は何を……、朝倉の件はやはりそういうことなのか……？　情けなさすぎるぞ……、ちづ姉はどうなのかな、うふふそれってどういう意味かしら、私の趣味とは合いませんわね、葛葉先生に挑むとはある意味強者でござるな、そんな強者じゃ意味ないアル、葛葉先生がそういう趣味なら男っ気のなさに納得いくです、ほうほうテトラ先生にはそういう趣味があったとはねい新作のネタになりそうだ、せせ先生同士だからいいいいいのかなー、ありえねーだろ常識的に考えて、こりゃー記事にしたら流石にマズそ、女性不信でなく熟女好きじゃったとはのうどっちにしても木乃香はやれんの、テトラ君……母親が恋しかったんだねでもまだ教えられないんだごめんよ、葛葉先生も相談してくだされば良

かったのに、葛葉にもようやく春が来たか些か青い果実すぎるが……ああ不味いな瀬流彦逝って来い、僕ですか！？　いや行きますけど漢字違いますよね絶対！　危険手当くらい出して……もらえませんよね、あいやーそんな事情があったとはネ流石に想定外ヨ、はっまさかマスターを害した理由は幼形だからなのでしょうか云々。

ことここに至ってテトラはようやく現状を正しく認識し、何だかもうどうでもよくなった。女性不信と思われていたんですねなどと逃避していた。切実に異能が使いたかった。引きつった笑みを浮かべてテーブルに突っ伏していた顔を上げると、ブチリと音がした。というかカチャリと音が聞こえた。というかバチバチと音がした。というかバリバリに帯電した刀（何処から取り出したのだろうか）が振りあげられていた。端的に言って葛葉がブチギレていた。その脇で見野が爆笑していた。

「だ、だ、誰が熟女で年増でショタコンですってー！？」

涙声と共に刀は振り下ろされ、閃光が辺りを覆い尽くし、雷鳴が響き渡る。

空へと向かって。

閃光による視力低下が回復するまでの間、魔法使い達は念話で密談をしていた（但し秘匿念話帯のため、テトラは傍受すら出来ていない）

『いやあ学園長、今年はきちんと準備しておいて良かったですねえ』

『そうじゃの。予想通りと言うべきか期待通りと言うべきか……。ああ瀬流彦君はまだそっちのテーブルにいるように。危険手当はた

んと出すから安心せい。それから刀子君は三ヶ月の減俸に後日事情聴取じゃから』

『うっ……すいませんでした学園長』

『まあアレだ、強く生きろ瀬流彦』

『そんな御無体な……』

『どーいう意味ですか！』

『――刀子君、減俸更に一ヶ月追加。言い忘れておったが、テトラ君は少なくとも君らが魔法関係者と気付いておる筈じゃから、その系統の話は見野先生にばれなければいいぞい。自分自身以外に関する魔法関係についてはまだ話してはいかんがの』

自力で気付くのも一つの修業じゃてな、と付け加えて近右衛門は念話を閉じた。

全員の視力が戻ったころ、一人の女性教員、源しずなが口を開いた。

「去年も見ましたが、すごい手品ですよね。少し危険みたいですけど……」

源の視線の先では瀬流彦と呼ばれた男性教員が、葛葉のすぐ目の前にへたり込んでいた。彼のすぐ脇には葛葉の刀が突き刺さっている。だが驚いたことに、それでも尚、優男風の柔和な雰囲気は崩れてはおらず、糸目が開かれたりもしていない。外見上変わったことと言えばショートカットの髪型がやや乱れていることくらいだ。

「葛葉先生もう勘弁して下さいお願いします……」

かすれ声から心中穏やかではないことは明らかだが、当然と言えば当然の話。瀬流彦に防御を任されたのはその技術が信頼されているからなのだが、咄嗟の障壁行使だったためギリギリの強度しか保てず、存外命の瀬戸際だったのだ。

それでも尚一般人が――『手品（笑）とか……ねーよ』と頭を抱える少女もいるが――パフォーマンスの一環と思っていられるのは、瀬流彦が警護慣れしていることが大きい。警護対象に不安を悟られないことは必須技能の一つなのである。

瀬流彦はぱんぱんと埃を払うと、テトラと見野に尋ねてから椅子に腰かけた。席はテトラの隣、丁度葛葉の向かいである。気まずいことこの上ない。テトラは『手品（笑）で済むんですね』と遠い目をしており、見野は爆笑したまま。葛葉は痴態を晒したことを恥じているし、瀬流彦は瀬流彦で、もう何も起きないといいなあと内心でため息をついている。四人の間に響くのは、堪えようと努力している見野の笑い声のみ。

二三分経って笑いが治まると、見野は「中々不思議な手品よね。去年はもっとすごかったけど」と言った。

「これよりひどかったんですか……」

テトラの適切な言葉に瀬流彦は苦笑した。

「外席が半壊したからね。幸い、深夜だったから御客が少なくて何とかなったけど」

お恥ずかしい話です、と葛葉は縮こまる。その原因は見野だとテトラは即座に理解し、何とも傍迷惑なことだと今日何度目かになるため息をついた。

「そう言えば、あちらにも先生方はいらっしゃったんですね」

「独身者の集い……みたいなものかな。ほらガンドルフィーニ先生や弐集院先生はいないだろ？」『ほんとはさっきの出来事に対処するためだったんだけど……ついでに慰労会も兼ねようって学園長が』

突然の念話に驚くテトラ。今までずっと秘匿されてきたというのにいったいどうしてだろう。

「だから葛葉先生は、私が見野先生といる事に驚いたんですか？」

『もう隠さないんですか？』

「いえ私はただ」葛葉はきっと見野を睨みつけた。「詠美もてっきり一人だと思っていたもので」『学園魔法関係者の秘匿念話帯についてはまだ教えてはならないとのことですが……恐らく独力で辿りつく分には問題ないかと思われます。学園長もそう願っている節がありましたから』

刀子は予定ありだと思ってたんだけどねー、と応じる見野を横目に、テトラは得心していた。原作で、ネギが学園祭までの期間、魔法使いについて教えられなかった理由は訓練の為でもあったのか。ネギ・スプリングフィールドという存在はいずれ力ある魔法使いの争い事に巻き込まれる。故に日常生活で魔法使いをそれと見つけられなければ、困ったことになるだろう。更には感知されないようにする技術を知ることもできる。テトラ自身は最近まで使えた異能の

おかげか、そういった類には敏感なので必要なかったが、なるほどなるほどそういうことだったのか。

そこまで考え、テトラは顔を青ざめた。論理の逆を辿れば、それだけの能力を有すると自ら証明してしまっているのである。軽く落ち込んでしまったが、近右衛門にある程度ばれているのだ。今更たいして変わるまいし、元々臨機応変（いきあたりばったり）になることは承知していたはずだ。テトラは自身を鼓舞した。

「どうかしたのかい」

瀬流彦がテトラの顔を覗き込んだ。納得したり青ざめたりと表情を変えるテトラを思いやったのだろう、不安そうな面持ちの瀬流彦に、何となく気恥ずかしさを覚えたテトラは「髪が少し乱れていますよ」と照れ隠しに指摘した。

瀬流彦は顔を引き、髪を手で撫でつけようとすると、責任を感じた葛葉がハンドバックから簡素な木櫛を取り出したが、やんわり拒否されてしまった。櫛は古いものらしく、呪術性を帯びていたからだ。

「髪って言えばさ」見野がふと思い出したように話を振った。「どうして切っちゃったわけ？　今のシャギーもいいけど、せっかく綺麗だったのに」

予想外の質問に、テトラは言葉を詰まらせ、葛葉と瀬流彦は心苦しそうな表情を浮かべる。何となく話しづらい。三人の様子に違和感を覚えた見野は「訳ありなら別にいいんだけど」とすぐさま矛を収めた。

奇妙な沈黙にいたたまれなくなったテトラは、気分転換みたいなものですよと言った。

「確かに変わったものねえ」

うんうんと見野が大袈裟に頷くと、ほんの少しだけ空気が和らいだ。

その後もどこかぎこちない会話が続いたものの、続々と運ばれてくる料理に舌鼓を打ったり、酒を呷る内に会話は弾み、クリスマスイブの飲み会は深夜、閉店まで続いた。

今はその帰り道。既に見野と別れた三人は帰路についていた。街灯に照らされ、小さな影が一つともう一つ、大きな影が地面に出来ている。

「葛葉先生、葛葉先生。下りてくださいよぉ……」

泥酔した葛葉を背負った瀬流彦は弱弱しく抗議した。

「いーじゃないですかぁ。そりゃーわたひはバツ一ですしぃ？　もーすこしで三十路ですけどぉ……」

「単純に、危ないんですってば」

素面のテトラはともかく、瀬流彦だって酔っている。足取りはふらふらとしていて少しばかり危なっかしいが、テトラは眠い目をこすりながら見ることしかできない。魔法でさっぱりさせようとも考えたが、それでは酔った意味がないと二人に拒否されていた。

なにがあぶないんですかぁと舌ったらずに言いながら、瀬流彦の背中にぐりぐりと頭を押しつけると、いつしか寝息を立て始めてしまった。熱っぽい吐息、上気した頬、潤んだ瞳、少し乱れたスーツ。背中の葛葉を想像した瀬流彦は雑念を追い出すように頭を振った。その拍子に、んんと鼻にかかった声が漏れ、葛葉の体温と柔かい体を意識してしまう。

顔を赤らめた瀬流彦は気を紛らわせるため、眠そうなテトラに声を掛けた。

「眠たそうだけど、大丈夫？」

「ええ。瀬流彦先生こそ大丈夫ですか？」テトラはちらと寝入っている葛葉を見やった。

瀬流彦は視線の意図を理解し、困ったような笑みを浮かべた。

「まあ、ね。手を出したらそれはもうざっくりと切られちゃうし」冗談めかす瀬流彦。「ていうかテトラ君って結構進んでる？　まさかほんとに熟――こほん年上好き？」

「本を読んでいるときに、少し」

別に嘘では無い。古い文献を漁っていると結構出てきたものであった。もちろんそれらの文献は生徒の手に渡らないようにされていたが、テトラは意に介さず目を通していたのだ。

「それに、同年代ってあまりいませんでしたから」

メルディアナ魔法学校は学校と言っても、年度毎の卒業生は十名

にも満たない。課程は本来八年間にわたるから、総数は百名を超えることは無いだろう。その上テトラは関わらないようにしていたのだから、恋人云々など尚更有り得ないことだった。

友人もいませんでしたし、と淡々と告げられる言葉に瀬流彦は絶句する。

テトラとまともに話をするのは今回の飲み会が初めてだったが、瀬流彦の受けた印象は、背伸びをしようとする普通の子供、あるいはガードの固い子供、でしかなかった。言動は大人びているが時々幼さを覗かせる――そもそもそれ自体が子供っぽいと言える――普通の少年。

『大人』という定義の要素に、瀬流彦は『幼さを自覚していること』を挙げる。透徹した目で見れば、幼さから人は逃げられない。大体において人格は子供の間に形成されるものであるし、人である以上、行動原理の根本は感情と不可分だろう。論理的な人間でさえ、感情ではなく論理を好む、という感情からは逃げられず、そもそも論理的であるから論理を選ぶのか、論理を選ぶから論理的であるのかはトートロジカルで意味がない。飛躍は常に感情によって生み出されるのだ。

鑑みるに、テトラ・スプリングフィールドは『普通』の子供だろう。幼さをはっきりと自覚せず、身の丈に合わない背伸びを行っているという点でも、感情を大人びた言動によってひたすらに抑えようとしている点でも、だ。

もちろん、年齢の割には進んだ精神を持っているのは明らかだが、まだ子供の範疇と言える。問題は『英雄』の子供として見た場合、テトラの成長は果たして『普通』の成長と言えるのか、この一点で

ある。

正常であること、それ自体が異常ではないか。皮肉な問いが瀬流彦に突き付けられていた。

瀬流彦はすっかり酔いの冷めた頭でぐるぐると考えていた。テトラはそれに気付かずに何ごとか尋ねているようだが、瀬流彦は「そうだねえ」と小さく頷くばかり。時たま、ぴくりと背中の葛葉が動くが今は気にしていられなかった。

「――『英雄』かあ」

ぽつりと呟いた言葉にテトラは首を傾げる。

「僕もさ、憧れてた頃があったんだと思ってさ」

魔法を習いたての時分、子供の頃の話だ。今はもう自分が警護向きの魔法使いで、その本領は護ることにあると理解しているが、割り切れない思いは未だ瀬流彦の心に燻っている。仮に戦場に出たとしても、瀬流彦に出来るのは後方で人々を護り、実際に戦う人々の背中を見守ることだけだろう。平和的な能力と言えば聞こえはいいかもしれないが、どうしようもない高波に襲われた時、なすすべもなく飲み込まれるのみなのだ。

「今は違うのですか」

瀬流彦はため息混じりに首を振った。

「そりゃあ少しはあるよ。テトラ君にはちょっとだけ嫉妬してるかもしれない」

黙りこむテトラの姿を見て、瀬流彦は後悔した。酔いは随分冷めたと思っていたが案外残っていたらしい。どうにも口が軽くなっているようでいけなかった。

長い沈黙の後、テトラはか細い声で問いかけた。

「なら、どうして教師を？」

瀬流彦は黙ってその問いを反芻した。もっともらしい答えが浮かんでは消えていく。どうして、どうして、どうして、か。舌で転がす内に論理は削げ、感情が露わになる。それは諦観も多分に含まれてはいたが、けれど今、中心にあるのは。

「――好きだから、かなあ」

曖昧でいて、実感の篭ったその言葉は暗がりへと消えていき、イブの夜は静かに更けていく。

夜空には更待月（ふけまちづき）が浮かんでいた。

小話：翌朝、瀬流彦、携帯に。

翌朝、携帯の何度目かのアラームで目を覚ました瀬流彦は、葛葉からメールが来ていることに気が付いた。二日酔いを魔法で飛ばしながら開いてみると、昨夜のお詫びにと食事の御誘いらしい。

珍しいことだと瀬流彦は思ったが、時計を目にとめると少し寝坊してしまったことを悟り、慌てて朝の支度を始めた。

彼は知らない。昨夜、考え事の最中、テトラに葛葉をどう思っているか尋ねられたことを。

彼は知らない。その時彼が頷いてしまったことを。

彼は知らない。その時葛葉が起きていたことを。

彼は、知らない。

第十四話（後書き）

クリスマスイブ、超包子にて、その帰路の回。あるいは葛葉刀子（笑）の回。あるいは微妙にフラグが立ちました？の回。

補足（結構キャラが出たので長め）

誰これなキャラもいますが、一応オリキャラは主人公と指導教員のみです。

テトラの指導教員＝『見野詠美（みえの　えみ）』適当ながらも結局名付けしてしまったため、その内登場シーンを改稿いたします。大した変化は無いでしょうが。

『ニンニクラーメンチャーシュー抜き』言わずと知れたあの作品より。

超包子の営業については少なくとも長期休暇中は行われているということに。（漫画の劇中では学園祭とその直前、夏休み中の描写しかない……はず。部活等の片手間に年がら年中やっていられるのか疑問に思ったので）

Ａ組が大量にいる理由→クリスマスイブだし、暇な面々が超包子に集っている。

珍しく千雨がいる理由→クリスマスイブだし、たまにはと思い、超包子で喰っている。

茶々丸がいるのに、わざわざ超がテトラのテーブルへ注文を取りに来る主な理由は、茶々丸が嫌がったため。だから茶々丸が『熟女』と葛葉を煽ってます。

葛葉刀子（笑）になっていますが、私の勝手なイメージです。理性的な激情家（参考は主に１６巻）また、この時点では、一般人の彼氏を捕まえていないということに。

源しずなはとりあえず一般教員かつ独身ということに。（漫画原作

だけでは判断に困る）
神多羅木についてもとりあえず独身ということに。（同上）
瀬流彦は警護が得意（これ自体は原作設定）また、この時点に恋人はいないということに。心中はもちろん妄想。
念話帯は造語、のはず。ただ具体的には思い出せませんが、どなたかのＳＳで目にしたことがある筈なのでその辺りはご容赦を。念話は念『波』なる媒体を用いて会話するらしく（原作９巻）、秘匿性を保つためにはこれくらいしか納得できませんでした。後は相互に符丁を用いるかくらいしかないのかなと。（そもそも念話自体簡単に妨害されるようなので旧世界では然程役に立つ気がしませんが）
原作でネギに魔法先生や生徒達について知らされなかった理由は妄想。
『論理の逆を辿れば～』と書いた部分があるが、一般に、ある真なる命題の逆は必ずしも真にはならない（念の為）
帰りはタクシー使えばいいのに。

テトラがいなかったら（つまり原作だとしたら）、見野は普通にのんびり酒を飲んでいたため、葛葉刀子は然程酔っぱらわなかった、という想定。

大人の定義について。黒歴史に悶えるようになったら大人への階を一段上がったことになる、というようなこと。

地味な原作改変フラグ建設中。瀬流彦と葛葉の絡みとか誰得過ぎるが気にしない。
次回は、基本リアリストでありながらも『英雄』や『マギステル・マギ』という偶像を追うロマンチスト、みんな大好き？ガンドルフィーニ。

あるいは大晦日～三箇日の御話。

誰得話と地味な原作改変フラグ立てが続きます。
ようやっと書きたいことが書けるようになってきました。
８／１０刹那のコメントを微修正。色々な意味で→そういう意味で
の

第十五話

年も明けて元旦。

スーツの上にコートを羽織っているテトラにとって寒さはそれほどでもないが、龍宮神社へと続く参道は水気の多い雪で覆われており、ちょいとバランスを崩せば転んでしまいそうである。視線を地面に彷徨わせ、今度は滑らないように注意しながら拝殿へと向かっていた。

日も大分沈みかけの頃合いであったから、人影は午前に比べると随分少ない。朝は諦めて正解だったなとテトラは独りごちた。朝の龍宮神社は辟易するほどの人ごみだった上に、テトラは少女を巻き込む大転倒をやらかしたのだ。ラッキースケベはネギの十八番だと言うのに我ながら何をやっているのかと思わず呆れたものだった。

一つ礼をして鳥居をくぐると、すぐ脇に社務所があった。然程客が来ないのか退屈そうに店番をしている少女は龍宮真名。白い小袖に緋袴の巫女装束は遠目に見ても安っぽい作りではなく、褐色の肌に長身とおよそ日本人離れしている風体にも関わらず、よく似合っている。

テトラの視線に気付いた龍宮は眠たげな目を見開き、軽く肩を竦めた。

テトラはそんな龍宮に会釈した後、手水屋で手を清め、参拝客の列に並んだ。参拝には多少待たねばならなかったが無神論者を騙る日本人らしく列の進みは早い。生粋の無神論者なら初詣なんて無視するだろうに。何にしろキリスト教圏出身の自分が言えることでは

ないのだけれど。

実際のところ、絶対者としての神様は存在するのだろう。駄神か超越神のせいかは知らないが、現実に転生紛いの出来事(オカルト)が起きているのがその証左だ。はっきり言って呪詛のバーゲンセールでも開きたいくらいだが、神様とかいうモノを信じられるという点では自分は幸せなのだとも思う。寄る辺ない生き方は前世でうんざりするほど経験しているのだから。

つらつら考える内に先頭まで来ていた。拝殿に向かって軽く会釈し、賽銭を投げいれる。四五円だ。神様なんかと始終御縁があったらたまらないが無いよりマシだ。そういえば背高のっぽの大食い探偵が主人公の小説はここにもあるんだろうか。案外、某学園自体があったりして。

馬鹿な想像に苦笑を浮かべつつ、テトラは鈴をガランガランと鳴らした。二度深く頭を下げてパンパンと柏手を打つ。今生では初の参拝であり、理不尽な身の上でもあるため、祈願には自然力が入ると言うものだった。

暦は既に勝負の一年に入っていた。テトラは赤毛の少年を思い浮かべながら祈り続ける。たった一年、されど一年。誰も彼もの命運を担う少年が安全完全健全に最善を尽くせるように。そうして。

「皆が笑って終われますように」

ぽつり呟き、最後にもう一度礼をする。くそったれの神様に届くよう、しっかりと。

頭を上げ、踵を返す。

テトラの懇願する様を眺めていた参拝客は頬を染め、慌てて視線を逸らした。

どことなく居心地が悪く、テトラは足を速めた。時折寄越される視線がどうにも不安を煽ったのだ。

その勢いのまま社務所の前を通り過ぎる折、ちらと陳列棚を見やって、

「やあテトラ先生。何か買っていかないか」

龍宮真名に声を掛けられた。テトラは仕方なしに立ち止まり、龍宮に向き直った。

こういうのは初めてだろう、と言って龍宮は棚に並べられている見本品を指さし、破魔矢や御札、御守り、絵馬について解説を行う。バイトとはいえ流石は巫女と言うべきなのだろう、達者な説明だったが最後の一言で台無しになった。

「ま、効果の程は知らないがね」

「それを言っちゃダメでしょうに」

テトラは呆れながらも物色し、羊草文様の御守りを指差した。

「この羊草があしらってある、招福の御守りを一つ」

黒の革財布から千円札を一枚取り出し、龍宮に手渡す。

「はいよ」

龍宮は御守りを龍宮神社と朱筆で書かれた紙袋に入れ、テトラに渡した。

「袋も御守りの一部だから捨てないようにな。……罰が当たるぞ」

羊草と言えるくらいなら知っているかもしれないがなと冗談めかす龍宮に、

「……へえ、今まで気にしたこと有りませんでした」

「今まで？」

テトラは内心で舌打ちし、

「日本について調べていたときには、ということですよ」

と答えた。

そうかと龍宮は相槌を打ったが、腕を組み、納得していないような表情で何ごとか考え始める。

手持無沙汰になったテトラはハンドバッグに財布と御守りの入った紙袋を入れた。迂闊な一言が原因とはいえ、落着かないものは落着かないし、気まずいものは気まずい。早いところこの場を辞したかったが、さりとて色々と後ろめたいところが有るテトラにはそれもし難いのだ。

「どうかしました？」

苦し紛れに問いかけると、考え込んでいた龍宮は一つ頷いた。

「テトラ先生は今夜暇か？」

「ええまあ……」

脈絡のない問いにテトラは言葉を濁す。『今夜の予定』からのコンボは否が応でも想像がついた。嫌な予感がひしひしと感じられ、喉がひりつく。相手は幾多の戦場を駆け抜けた猛者である。数多の二次創作で繰り広げられた世界樹前広場での決闘だとしたら、ずっと君のターンになること請け合いだった。もしも桜咲刹那まで出張ってきたとしたら今日が二度目の命日となるだろう。よもや超鈴音関係だろうか。いずれにせよ、ただ事で済むはずがない。

ならどうして拒否しないのだろう。

忙しいと一言言えば済む話なのに、どうして。

ふと、羊草の花言葉を思いだした。

まさか自分は清純な心なんてものを求めているのだろうか。

中々に皮肉が効いていた。馬鹿馬鹿しいにも程がある。嘘をつかずにはいられない生き方を望んでいるのだから、何を今更。

「少しばかり親睦を深めたいだけさ」

龍宮は薄く笑い、店じまいを始めた。商品を棚に仕舞い込み、ひと通り掃除を終えると社務所の奥へと姿を消す。

テトラは仕方なしに龍宮が戻ってくるまで待つことにした。一方的に予定を取りつけられたからと言って無断でふいにする気にはなれなかった。ひとまず社務所の裏へ回り、扉の脇によりかかった。僅かに板張りの壁が軋む。おろしたてのコートのポケットに手を突っ込み、空を見上げれば日はとうに暮れており、星がちかちか瞬いている。テトラの小さな口から漏れる白の吐息は星の瞬きを一瞬だけ覆い、すぐさま大気に溶けていく。冬だった。雪のちらつきはなかったがテトラは冬の夜空を感じていた。

呼吸を意識してみると、冷たさとか静けさとか、寒さとか寂しさとか、そういった空気で胸が一杯になる。夏の暑さは幻想で、冬の寒さは現実なのだ。肌が冷え込みでぴりぴりと緊張する。大気に取り残される感覚だった。

ようやく龍宮が社務所から出てくる頃にはテトラは寒さですっかり縮こまっていた。

「悪いね、待たせすぎたようだ」

龍宮はロングコートから鍵を取り出して戸の鍵を閉める。テトラはその背中をじっと見つめている。

「夜遊びを見過ごすわけにもいけませんからね」

紫煙を燻らせる気分で溜めた息を思い切り吐き出した。同時に強張っていた体が弛緩する。思ったより緊張していたようだ。

「お堅いことだ」

「教師ですから」

見習いがつきますけど、とテトラは苦笑を漏らした。

龍宮は振り返った。長い髪がたゆたうように流れる。

「にしたって真面目じゃないか」と幾分揶揄するように言った。「なりたくてなったわけじゃないんだろう？」

テトラは首を横に振った。

「だからって手抜きの理由にはなりませんし、何より、今はそれなりに満足してますから」

それを聞いた龍宮はテトラの瞳を見つめた。そうかと思うとさっと目をそらし、髪を掻きあげながら「そうかもしれないな」と一言呟いた。

二人の間に奇妙な沈黙が降りる。龍宮はいつものポーカーフェイスを顔に貼り付けているため、テトラには表情を読むことが出来ない。そわそわと落着かない気分であったが、表には出そうとせず、努めて平静な調子で尋ねた。

「それで結局何だっていうんです？　親睦とか言ってましたけど」

テトラの胸中には幾ばくの忌避感と期待があり、けれど龍宮はそれに気付くことは無く、

「……まあ、来ればわかるさ」

何やら意味深に口端を吊り上げると、コートの裾を揺らして歩き始めた。テトラはその半歩後ろをついていく。

そのまま参道を下り、丁度やって来た路面電車に乗って商店街へ向かう。正月、それも夕方ということもあり車内の人影は比較的まばらで、特にテトラが気をつけるべき人物――例えば噂好きの少女達――も存在せず、二人は隣り合って座った。

窓の外をゆったりと流れる風景は中世ヨーロッパの街並みでどこか現実味がない。先程まで感じていた冬の寒さは暖房の効いた車内ではとうに消え去っており、白く曇った窓だけがその存在を主張しているようにテトラは感じた。

世界はどこまでも地続きであるはずなのに、境界がどこかしらで内外を区分してしまっている。地平線の向こうが見えないように、他人の意識が存在していないのかもしれないように、そうしてこの世界の向こう側にかつて自分があった世界が存在するかもしれないように。どこかの世界に在る限りその外側に至ることなど不可能でしかなくって、だからこそそれは残酷なまでに優しい不条理なのだ。

（『求めよ。さらば与えられん』か）

正しい信仰なんて今更いらないんですけどねえ、とテトラは小声でぼやくと、龍宮はおや、と意外そうに言った。

「信仰がどうかしたかい？　先生はおおよそリアリストのようだが」

「いえね、信仰で飯が食えたらよかったなと思っただけですよ」

冗談めかすテトラに龍宮はにやりと笑った。

「すると先生は傭兵にでもなるつもりようだな。おすすめはしないがね」

一瞬きょとんとした表情を浮かべたテトラは、言葉の意味を飲み込むと、噴出しそうになるのを必死で堪えた。

「ところで」龍宮は何気なく尋ねた。「先生は『私』のことを知っているのかい」

「……ええ。『四音階の組み鈴』というと有名なＮＧＯ団体ですからね。龍宮さんはもう抜けたらしいですから下火になりましたけど……知ってます？　まほネットのアングラではファンクラブもあったみたいですよ？」

と、テトラは笑いを堪える振りをしながら一応の真実を答える。それを聞いた龍宮はこめかみを押さえ、唸り始めた。

「……広報部は何をしていたんだ」

情報なんて漏れるものですよ、とテトラが若干の諦観を混ぜた相槌を打つと、それはそうだがな、と呆れたように息を吐いた。

「ちなみに龍宮さんの異名は『リアルクラリック』『魔弾の射手』『つかあの嬢ちゃん弾が外れねーんだけどマジで』等がありましたけどね」

「くっ、全てはこの瞳のせいなのか」

「リアル邪気眼乙と言わざるを得ない」

「意味はわからんがそこはかとなく嫌な響きだっ……」

心底嫌そうに呻く龍宮を見たテトラは口に手を当て、いかにも愉快そうに笑い声を立てた。心の中では上手いこと誤魔化せたことにほっとしていたが表に出すことはない。

「冗談ですよ。……っと、商店街に着きましたよ」

テトラは立ちあがり、脱力した様子の龍宮の手を取ると、引きずるように路面電車から降りた。頭一つ分背の低い少年が長身の女性をリードする様は珍妙である。停車駅に並んでいる、恐らくは帰宅予定の人々から奇異な目を向けられたため、二人はひとまず歩道の脇に寄った。

路面電車に乗り込む人を見送る頃には龍宮も虚脱感から立ち直り、テトラを先導する形で歩き始める。何を考えているのか、手は繋がれたままだ。しっかりと握られているために手を離すこともできず、テトラは緊張を強いられていた。

龍宮真名という少女は気紛れに友人をからかいもするが、どこか抜け目ない印象を持っている。手を繋ぐという何でもない行動にさえ、隠れた意味が無いとも限らない。龍宮とは気心が知れているというわけでもないのだから尚更だ。

表通りをそのまま十分程進み、二人はとある喫茶店に入った。店内は然程混んでおらず、テーブルは所々空いている。隅のテーブルに向かい合って座り、まもなくしてお冷が運ばれてくる。龍宮は餡蜜を三つ注文し、「一つは先生の分さ」とテトラに告げると、店員を下がらせた。

「奢ってもらうようで、すいません」

「なあに気にしなくていいさ。臨時収入も入る予定だからな」

疑問に感じたテトラが臨時収入について問うと、それこそ気にしなくていい話だよ、と言って龍宮は手をひらひらと振った。

「それにしても、餡蜜がお好きなんですね」

二つも食べるなんて。さも初めて知った風に言うテトラに龍宮は苦笑を浮かべる。

「好物なのは否定しないが、流石に二つは食べないさ。――――ん、丁度来たようだ」

喫茶店の入り口の方を体を向け、片手を上げる龍宮。その先にはサイドテールの少女が立っている。身長自体はテトラと変わりない１５０程度だが、肩に竹刀袋をかけ、目つきは険しく、鋭く尖った雰囲気は正しく剣士であった。少女の視線がテトラを捉え、目つきは一層険しくなる。

口を半開きにして呆然とするテトラをよそに、少女は龍宮の隣に腰を落ち着けた。

「先生も知っているだろうが、こいつは桜咲刹那。まあ同僚だな」

紹介を受けた刹那は、こんにちはと軽く頭を下げたものの眼光は鋭いままだ。テトラも挨拶を返したものの、声が若干震えている。二者間に緊張が走り、龍宮が気取ったように口を開く。

「――さて先生」

にいと口端を吊り上げ、意地悪そうに目を細める。

「親睦を、深めようじゃあないか」

第十五話（後書き）

補足

背高のっぽの大食い探偵：はやみね先生にはお世話になりました。
『求めよ。さらば与えられん』：新約聖書より。べ、別に願えば叶うって意味じゃないんだからねっ。勘違いｓ（ｒｙ
邪気眼：発祥は２００６年らしい。ネギま劇中では本来存在しないだろう単語。しかし３４巻でリア充とか使われてるしなあと思わなくもない。
クラリック：ガン＝カタより。
どーして刹那が出てくるのかについては次回。別に刹那アンチと言うわけではありませんのでご安心ください。

次回は、
せっちゃん、交渉する。
たいちょー、暗躍する。
パパラッチ、復活する？
の三本です。ＯＨＡＮＡＳＨＩがあるかも。される側ですけど。

四ヶ月も空いてしまい、申し訳ありませんでした。
ちょいちょいネットで確認する限り、原作の設定バレが凄まじいことになっているようで少し様子見が必要かも。というか撤退を余儀なくされる方も多いんだろうなあ。残念。
次話は来週末くらい、３５巻を読み終えた頃になるといいですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9926q/

日蔭者の生き方。

2011年8月11日00時32分発行